昭和60年６月15日号（毎月２回１日、15日発行）第28巻・第12号　通巻633号　昭和54年６月２日第三種郵便物認可

今日のソ連邦

1985
12
6.15.



大祖国戦争勝利40周年を祝う

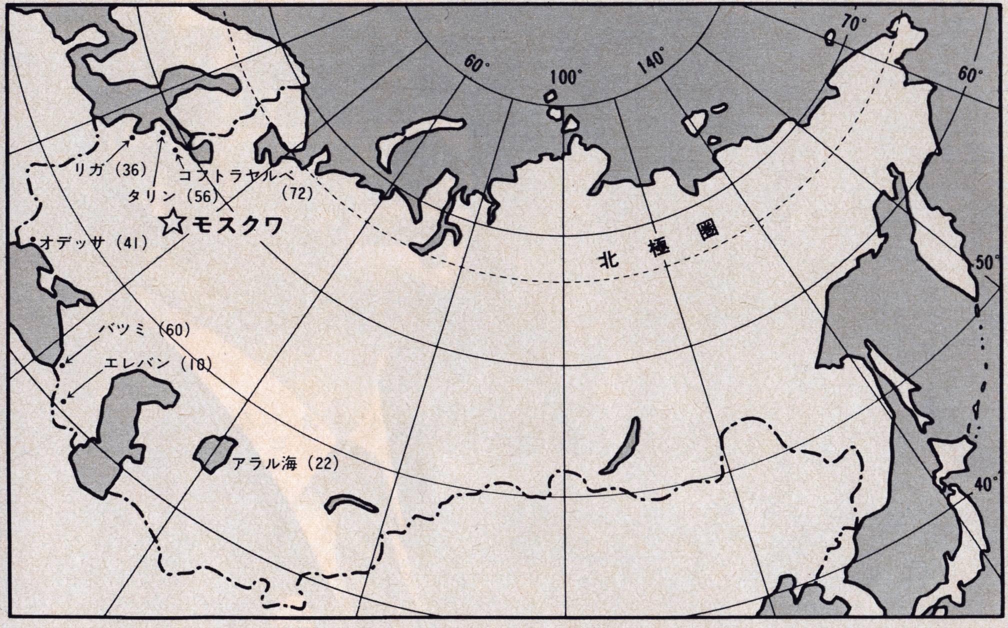
ソ日共同取材
ソ連の学校教育――伝統と改革④

シブアラル運河計画

第12号　1985年6月15日発行

本誌の記事と写真はノーボスチ通信の提供によるものです。

今日のソ連邦



★数字は関連記事のページ

表紙　モスクワ防衛戦に参加し、プラハで終戦を迎えた元偵察兵のユーリー・バランジン。伝統により、5月9日の戦勝記念日、戦友たちと会うためにモスクワのボリショイ劇場前へやってきた。
カメラ　A・ソロモノフ

編集　在日ソ連大使館広報部　電話03(447)3536（代表）
〒141　東京都品川区東五反田3―9―13
振替口座　東京9―122358（加入者名＝ソ連大使館広報部）

発行所　（株）新時代社　電話03(293)4881
〒101　東京都千代田区神田神保町1―44
振替口座　東京0―13581（加入者名＝新時代社）

本誌の定期購読をご希望の方は、1部半年1800円、1年3000円、2年5000円の誌代（送料込み）を添えて、上記のいずれかにお申し込み下さい。多部数の場合の誌代は、お問い合わせを。



5月8日、クレムリンの大会宮殿で行われた大祖国戦争勝利40周年記念式典で報告するミハイル・ゴルバチョフ・ソ連共産党中央委員会書記長



大会宮殿の大祖国戦争40周年記念式典

大祖国戦争勝利40周年を祝う

ソビエト国民は、ドイツ・ファシズムに対する勝利40周年を大きな全国民的な祝日として祝った。すべての家族、すべての家がこの記念日を祝った。5月9日、国じゅうがかつての前線兵士、パルチザン、地下活動家、銃後の勤労者など、愛国者としての義務を果たし、侵略者に抵抗し、祖国の防衛に立ち上がったすべての人たちに祝いの言葉を述べた。

ファシズムに対する勝利の理想は人々に限りなく貴い。そのことはモスクワの祝賀式典に多くの外国からの賓客が参加したことでも分かる。この中には日本共産党と日本社会党の代表団も含まれていた。

5月8日、クレムリンの大会宮殿で記念式典が開かれ、ミハイル・ゴルバチョフ・ソ連共産党中央委員会書記長が「ソ連国民の不滅の偉業」と題する報告演説を行った（本号付録に全文収録）。

ゴルバチョフ書記長の報告でも指摘されたように、ファシズムとの戦争は、社会主義と帝国主義の突撃部隊との最大の衝突だった。その過程でソビエト連邦の運命だけでなく、ファシスト侵略者が絶滅を予定していた欧州の多くの国民と国家の運命も決まった。この決戦の過程で欧州の、そしてまた全世界の運命が最終的に決まったのである。

ファシズムの壊滅は反ヒトラー連合の諸国と諸国民の共同の努力によって、多くの国のレジスタンス運動の参加者、パルチザン、反ファシスト地下活動家たちの自己犠牲的な闘争によって達成された。しかし、同時に、ファシズムの侵略計画を抹殺した決定的な力となったのは、世界最初の社会主義国家だった。戦争は、社会主義が不敗であることを証明した。

ファシズムは撃滅された。だが、ソ連国民が支払わなければならなかった代償は信じがたいほど高価だった。戦争は二〇〇〇万ソビエト人の生命を奪った。戦火の影響を受けなかったような家族は一つもなかった。同じようなことが二度と繰り返されてはならないというソ連国民の願いがあれほど強いのは、そのためである。

ミハイル・ゴルバチョフの報告で強調されたように、世界のすべての国民は現在、核戦争の脅威という一つの共通の敵を持ち、この脅威を根絶するという一つの最大の課題を抱えている。この課題を解決し、核の地滑りを止めることができるだろうか？ ソビエト人にはこの点に関して二つの意見はない。確かに、帝国主義の冒険主義的な層のせいで世界を覆っている戦争の脅威は防止することができる。そのための前提条件の一つは、前大戦の教訓に学ぶことである。

当時、世界の客観情勢は反ヒトラー連合の結成をもたらし、世界観、階級的、政治的立場の違いはそのための障害にはならなかった。このような連合結成の経験は不朽の意義を持っている。社会体制の異なる諸国家が共同の敵との闘いで努力を結集することができ、相互に受け入れられる決定を見つけ、共同の目標達成のために効果的に行動できるということが実地に証明されたのだ。この協力はファシズム打倒の事業に貢献しただけではない。領土問題を含む戦後体制の複雑な問題の、すべての国民の利益に合致するような調整の基礎もつくったのである。

第2次世界大戦終結40周年にあたってのソ連共産党中央委員会、ソ連最高会議幹部会、ソ連閣僚会議の呼びかけ「すべての国の国民、議会、政府へ」（本号付録に全文収録）には次のように述べられている。

「ソ連は、全般的平和の維持に対するすべての国家、その議会と政府の高度な使命を考慮し、平和と人類の運命に対する責任を自覚して、すべての国の国民、議会、政府に対し理性の声に耳を傾け、積極的な共同行動によって核破局の奈落への転落を止め、新しい戦争への道を遮断し、核兵器の完全な廃絶を達成するよう呼びかける。ソ連は、平和に役立つものならばあらゆるイニシアチブ、あらゆる提案を検討する用意がある」

5月9日、華やかに飾られたモスクワの赤の広場で軍事パレードが行われた。ソ連では普通、軍事パレードは年に一度、一九一七年の社会主義革命の記念日（11月7日）が祝われる時にしか行われない。しかし、今回は大祖国戦争勝利40周年に際して特別に行われた。

パレードはモスクワ軍楽学校の生徒たちの太鼓の音で始まった。太鼓の連打のリズムに続いて混成軍楽隊が演奏を開始した。



5月8日、クレムリンの城壁のそばにある無名戦士の墓に敬礼する大祖国戦争で勝利したソビエト軍部隊の軍旗。



右　大祖国戦争時の軍装で行進する兵士たち

左上　勝利の旗の行進。勝利の旗（先頭中央）を掲げるのはソ連邦英雄（2回）のN・M・スモロホフ空軍元帥。その後に10の各方面軍軍旗が続く。

左中　ソ連邦英雄たちの行進

左下　パレードには大祖国戦争時の兵器も参加した。写真は有名なT34型戦車。









かつてのパルチザンと地下活動家たちの行進▶



空挺隊員たちの行進

赤の広場に勝利の旗が掲げられて入ってきた。この旗は一九四五年5月、ベルリンの屈伏した国会議事堂の円屋根の上に立てられたあの旗だ。

一九四五年に勝利の観兵式が行われた時（6月24日）、バレンツ海からバルカン半島まで敵を撃破した10の方面軍の混成大隊が赤の広場を行進した。そして再び、40年を経て、赤の広場にこれらの方面軍の栄光に包まれた真紅の軍旗が登場した。

旗手たちが往時の戦闘で抜群の功を立てた連隊、師団、軍団、軍の一五〇本の、リボンや賞で飾られた旗を捧げ持ってきた。

最後に旧参戦軍人——これらの旗のもとで戦った人々が広場に入ってきた。生き残ったこれらの人々の中には、戦争を最初から最後まで戦い抜き、兵士名誉勲章やソ連邦英雄の称号など、高い褒賞を受けた人々も少なくない。胸にたくさんの勲章をつけた白髪の男性や女性の列がレーニン廟のわきを通り



ソビエト軍に加わって戦ったチェコスロバキア人民軍の旧参戦軍人たちの行進



▶ポーランド軍の旧参戦軍人たちの行進



現代の兵器のパレード

戦勝記念日にかつての炊事兵がモスクワの中央文化公園に戦時中の炊事車を引っ張ってきて、希望者全員に兵士たちの食べたカユをごちそうした。

▶5月9日の戦勝記念日には、伝統によりモスクワのボリショイ劇場の前に旧参戦軍人たちが集う。その中にはかつての従軍看護婦もいる。お祝いにはダンスが欠かせない。





5月9日の赤の広場



過ぎて行く。40年前の戦勝パレードに参加した人も行進している……右翼を進むのは対地攻撃機のパイロットで、通算二九二回出撃したソ連邦英雄2回の退役空軍中将V・アレクセンコである。歩兵が行く、水兵が行く、戦車兵が行く、砲兵が行く、パイロットが行く、工兵が行く……兵卒も行けば将軍も行く――ちょうど40年前、同じこの敷石の上を行進したように。

Z・フーシチャ将軍がポーランド軍旧参戦軍人のパレード部隊を赤の広場に率いてきた。一九四三年10月、ベロルシアのレニノ近郊でポーランドのT・コシューシコ記念第1歩兵師団は初陣を飾った。師団はベルリンまで進撃した。

一九四二年の冬、L・スボボダ指揮下の第1チェコスロバキア独立歩兵大隊がソ連領内で結成された。大隊はソ連の兄弟たちと肩を組んで、一九四三年3月、初めて戦闘に参加した。チェコスロバキア人民軍の旧参戦軍人部隊のパレードを指揮するのはJ・ドチカル中将である。

人々で一杯の見物席の前を、かつての戦争に参加した兵士たちと同じ軍服を着て同じ武器を持った若い兵士たちの混成部隊が進んで行く。

そのあと、いつものように、軍大学の学生、軍学校の生徒、海兵隊、空挺部隊が整然と隊列を組んで赤の広場を進んだ。

次に兵器のパレードが始まった。ふたたび先の戦争のことが想起される。広場をかの有名なT34戦車の縦列、SAU100自走砲の縦列が進む。トラックに引かれた76㎜砲、一二二㎜榴弾砲が進み、ロケット迫撃砲"カチューシャ"、37㎜高射砲、85㎜高射砲――すべてがヒトラー・ドイツに対する勝利をもたらした兵器である。パレードはソ連軍の最新の兵器でしめくくられた。

この日全国で旧参戦軍人の集会、お祭り、祝賀コンサートが行われた。すべてにお祭り気分が感じられた。人々は街頭で歌い、踊り、持っている全部の勲章を胸につけた旧参戦軍人たちに花を贈り、祝福し合った。

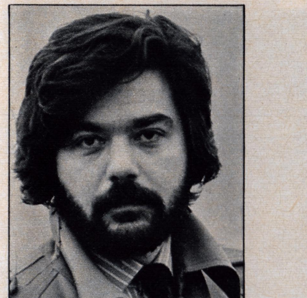
すべての都市と農村にある戦没兵士のオベリスクや記念碑は花に埋もれた。国中が死んだ人々を追悼して1分間の黙祷を捧げた。

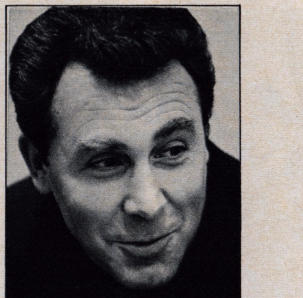
夜、祝砲の火がモスクワ、各共和国の首都、ドイツ軍との激戦が行われた諸都市の空を明かるく照らした。40発の祝砲が大祖国戦争におけるソビエト国民の不滅の偉業を賛えた。

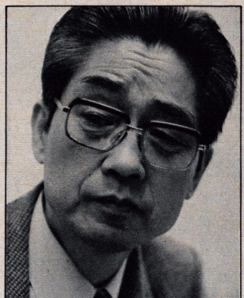
戦勝40周年の祝砲は人々の記憶の中に、一九四五年5月のあの晴れやかな日、そのために前線でも銃後でも全力を捧げたあの日を浮かび上がらせた。鮮やかな火に照らし出された空は全国民的喜びの深い思いを、余すところなく、鮮明に映し出していた。祝典にやってきて祝典パレードを見たすべてのソ連人と外国の来賓は、当時の気持ちを味わっていた。

ソ日共同取材

ソ連の学校教育——伝統と改革④


カメラマンのウラジーミル・ビャトキン


本誌記者フェリクス・プラテ


東京大学教授柴田義松氏

（編集部から）　8号、9号、11号に連載されたソ日共同取材「ソ連の学校——伝統と改革」の4回目をお届けします。昨年の秋、編集部の依頼でソビエト教育学の著名な専門家、東京大学教育学部の柴田義松教授が訪ソし、ソ連の多くの専門家と会い、教育と学校改革の問題について話し合いました。柴田教授はモスクワのあと、フェリクス・プラテ本誌記者らと共にアルメニア、エストニア共和国を訪れ、歴史や民族的伝統の異なる各地の教育事情を視察しました。今回はそのうちのアルメニアからのレポートです。5回にわたって連載されるこのシリーズは次回が最終回です。編集部ではこのシリーズについての皆さんのご感想をお待ちしています。

アルメニア共和国の首都へ

本誌記者　フェリクス・プラテ

というわけで、われわれはモスクワでソ連教育省やソ連教育学アカデミーの指導者とじっくり話し合い、民族学校の問題、就学前教育の問題、労働教育と職業指導の問題に取り組んでいるさまざまな研究所を訪問し、中等普通教育学校や子どもたちにコンピューター技術の初歩を教えている学習生産コンビナート、低学年用の教師を養成している師範学校、ソ連第一のレーニン記念教育大学での教育の様子をつぶさに見聞した。モスクワでのこの盛り沢山のスケジュールをこなしてから、われわれ三人——東京大学の柴田義松教授と本誌記者フェリクス・プラテ、カメラマンのウラジーミル・ビャトキンは昨年の10月17日夕刻、アルメニア共和国の首都エレバンへと飛び立った。

柴田教授のソ連での教育視察旅行を計画するにあたって、われわれは編集部で次のように考えた。

わが国の教育システムは単一であり、ソ連全体の若い世代の教育に責任を負う最高機関——ソ連教育省とソ連教育学アカデミーはモスクワにある。全国民的な討議に付された学校改革案を準備したのも、主としてこれらの機関である。従って、当然のことながら、さまざまな問題や理論的状況について知るためには、モスクワから始める必要がある。

だが、ソ連は多民族国家である。ソ連には一〇〇以上の大小民族が住んでおり、15の共和国を構成している。そして、それぞれの共和国にはそれぞれ独自の歴史的、文化的伝統があり、それが若者の教育の独自性に影響を与えている。だから、すべての共和国をまわって、実例を挙げてそこの教育について本誌で紹介できれば面白いだろう。

しかし、柴田教授の短い滞在期間では二つの共和国を訪問するのがせいぜいだった。

われわれはアルメニアとエストニアを選んだ。この二つの共和国は互いにまったく似ておらず、ともにきわめて個性的で、地理的にも気候的にも異なった場所にある、というのがその理由だった。まったく異なる歴史を持ち、自然も住民の外貌さえも異なる。結果的には、われわれが日本の読者に紹介するための例としてこの二つの共和国を選んだことに、柴田教授も満足した。

アルメニアとアルメニア人について

さて、われわれはザカフカズの三つの共和国のうちの一つ——アルメニア共和国（あとの二つはグルジア共和国とアゼルバイジャン共和国）に着いた。ここはアゼルバイジャンとともにソ連欧州部の最南端である。われわれが泊まったホテル〝ドビン〟の窓からは、晴れた日にはアララト山（五一六五m）が見える。アルメニア人にとって神聖なこの山は、すぐ近くとはいえ、すでに国境の向こう——トルコ領にある。われわれはモスクワから二〇〇〇km以上南にいるのだ。アルメニアはソ連の15の共和国のうち、人口（三二六万人）で少ない方から4番目、面積（二万九八〇〇平方km）では最小である。

民族構成では最も単一的で、人口の83・5％がアルメニア人である。そのほかにアゼルバイジャン人、ロシア人、ウクライナ人、クルド人、ギリシャ人、アッシリア人が住む。

ソ連の他の民族と比べてアルメニア人は情熱的、活発、客好き、人づきあいのよさ、商売上手で知られている。人類学的にはアルメニア人はコーカソイドの南方系の一支脈——アルメニア人種に属し、外見では、たとえばロシア人とかなり異なる。浅黒い肌、高い鼻、日本人に似た黒い髪と黒い瞳がその特徴である。

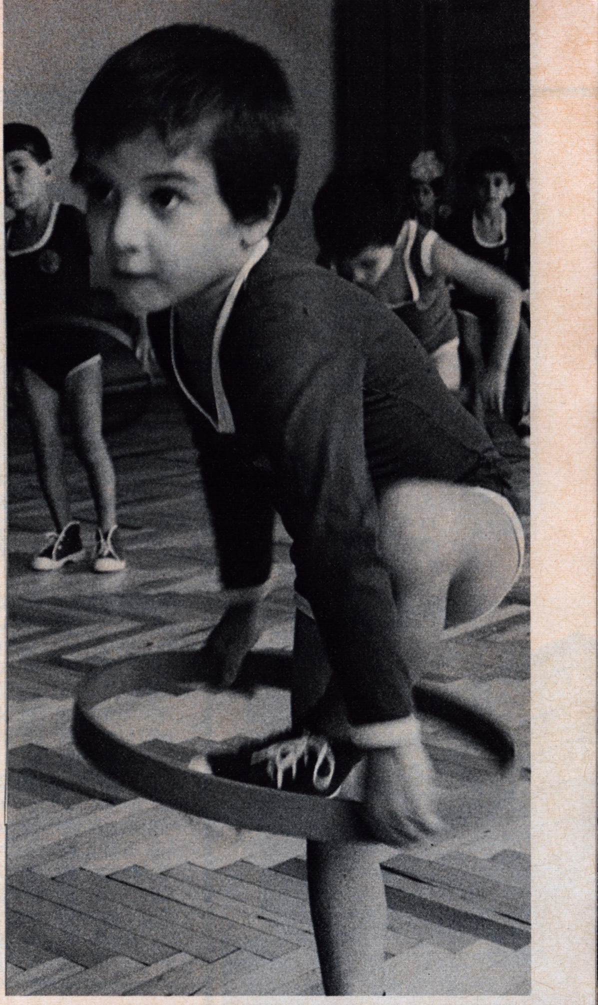
アルメニアの歴史と文化は数千年もの昔にさかのぼる。アルメニア高原は人類文明発祥の地の一つであると考えられており、アルメニア民族とアルメニア語の形成過程がすでに紀元前に完了しており、5世紀初頭にはアルメニア文字が作られ、それがほとんどそのままの形で現在でも通用している、ということを指摘するだけで十分だろう。ついでに言えば、アルメニア語は文字も音もロシア語とはまったく別で、ロシア人には通じない。つくば科学万博のソ連館にはアルメニアの文化の発展を紹介するコーナーがあるので、それを見ればアルメニアについてのある程


▲エレバン教育大学の校舎は市の中心部にある。手前はロシアの作家・外交官アレクサンドル・グリボエドフ（一七九五—一八二九）の像。グリボエドフは一八二八年のロシア・ペルシャ講和条約の締結に尽力し、この条約で数万人のアルメニア人の生命が救われたので、今もアルメニアで尊敬されている。


▶アルメニア共和国の第一教育次官バブケン・アフチャンからアルメニアの専門家が編さんした教科書について説明を受ける柴田教授







右・中・左　エレバン近郊のコルホーズ"アフタナク"の幼稚園では体育に力が入れられている。毎日、体育の時間には力や敏しょうさ、調和のとれた動作を育てるためのいろいろな体操をする。



左下　"アフタナク"コルホーズ幼稚園のこの子（5歳）は、音楽の特別の才能があり、耳で聞いたメロディーをそのまま電子ピアノで演奏できる。週に3回、音楽学校の先生の指導を受けている。

"おいしいよ！"



幼稚園の昼食は12時半から（"アフタナク"コルホーズの幼稚園の食堂で）

度の概念を得ることができるだろう。

アルメニアでソビエト政権が樹立したのは一九二〇年の末、すなわちロシアで社会主義革命が勝利してから3年後である。この3年間にソビエト・ロシアではすでに、新しい学校建設の一定の経験が蓄積されており、それがアルメニアに新しい国民教育制度を短期間に、しかも大きな誤りを犯すことなく作り出すのを助けた。

アルメニアには新しい国民教育制度が必要だった。というのは、アルメニアにおける教育分野の状況は当時まったくひどいもので、5世紀にすでに独自の文字を作り出していたこの民族の90%以上が文盲だったからである。革命前のアルメニアの教育制度（制度と呼べるならの話だが）はきわめて複雑で、1年制および2年制の学校から成り、これらタイプのちがう学校の間には何の継続性もなかった。

第1次世界大戦を迎えるころ、現在のアルメニア共和国に相当する地域には四五九の学校があり、そのうちの四四六が初等学校、6が不完全中等学校、7が中等学校で、そこで学齢期児童総数の7—8%にあたる約三万四七〇〇人が学んでいた。女生徒は極端に少なかった。多くの村には学校がなかった。

新しいソビエト政権のもとで、教育制度は急速に確立された。すでに一九二一—二二学年度には、共和国内のすべてのタイプの学校で六万八六〇〇人が学んでいた。15歳から50歳までの住民すべてに読み書きを習うことを義務づける特別法令が公布された。習う言葉はアルメニア語でもロシア語でもよく、習う人自身の選択に任された。文盲の割合は一九二二年までに73%に、一九三五年までには6・3%に減り、一九三六年には文盲は完全に克服された。

芸術教育に力を入れる

モスクワにおけると同様に、われわれのアルメニア滞在中のスケジュールも目一杯に詰まっていた。しばしば十分に食事をする暇もなく、大急ぎでちょっと"かっ込む"だけだった。少しでも多く見たり聞いたりしたかったので、食事で時間をつぶすのが惜しかったからだ。柴田教授は構わない人で、あれこれの学校を見ようとか、休息を減らしてでもあれこれの教育者ともっと詳しく話し合おう、という客好きな世話人たちの提案に喜んで賛成してくれた。そしてそのあとまた急いで次の予定地へ出かけるのだった。

アルメニア共和国教育省はわれわれの要求や関心に応えるよう精一杯努力してくれた。教育省とアルメニア共和国教育学アカデミー教育科学研究所では、教育の現状と、学校改善との関連で起こっている問題について詳しく聞くことができた。これについては本号の柴田教授の記事を読んでいただきたい。そのあとわれわれは、エレバン教育大学、教育学・教育要員の養成、高等教育一般の仕組みを紹介してもらった。ここで指摘しておきたいのは、ソビエト政権以前のアルメニアには、大学はなかったということである。ソビエト政権樹立宣言が行われたすぐあとの一九二〇年12月の国立エレバン大学の開設が、この共和国における高等教育の端緒となった。

現在、16歳以上の住民一〇〇〇人あたりの高等教育および中等教育修了者の数でアルメニアは15共和国中第1位である。いまアルメニアでは13の大学で五万八〇〇〇人以上の学生が学んでいる。

ところで、ソ連ではアルメニア人はアルメニア共和国にだけ住んでいるわけではない。ソ連全体のアルメニア人の数は四一五万一〇〇〇人で、そのうちの二七二万五〇〇〇人がアルメニア共和国に、四七万五〇〇〇人がアゼルバイジャン共和国に、四四万八〇〇〇人がグルジア共和国に、約五〇万人がその他の地域（ロシア連邦共和国、ウクライナ共和国、中央アジアの諸共和国）に住んでいる。だからアルメニア人はソ連のさまざまな共和国や都市で、その土地の原住民族をのぞけば、むしろ他の民族出身者よりも多く見かけることができるのである。ザカフカズの諸共和国の大学ではバルト海沿岸の諸共和国出身の若者たち（ラトビア人、エストニア人、リトワ人）にはまずお目にかかれないが、バルト海沿岸の諸共和国や中央アジアの諸共和国の大学ではアルメニア人学生は決して珍しくない（もちろん、授業が特定の民族語で行われている大学ではなく、カフカズ諸民族出身者もバルト海沿岸諸民族出身者も同等に入学することができる、ロシア語で授業が行われている大学での話だが）。

教育システムと教育原理はソ連全体で単一であることはすでに述べた。だからアルメニアに関してそれをくり返す必要はない。だが、次のことは指摘しておきたい。最近の10—20年間、アルメニアでは青少年の芸術教育を組織し、実施する精力的な措置がとられてきた。だから学校改革が芸術教育の強化の必要性、学校での道徳と美学の拡大に注意を向けているいま、アルメニアの教育家たちはこの分野での自分たちの悪くない経験を他の共和国に伝えることができる。

アルメニアではすべての中等学校に美学コースが設けられており、実質的にすべての学校に音楽と絵の専科教師が保障されている（ソ連全体ではいまこれが大きな課題になっている）。児童美術展が開催され、学校美術サークル・コンクールが組織されている。エレバンでいちばん立派な展覧会場の一つは常設の児童創作博物館である。



エレバンではすでに10年も児童の芸術教育と児童の創作指導に関する教授・教授法センター（児童芸術教育センター）が活動している。先に述べた児童創作博物館、子どもたちが演じる児童劇場、児童の伝統音楽アンサンブル、コーラス、民族アンサンブル、室内軽音楽オーケストラが出演するコンサートホールがこのセンターの中にある。クラシック音楽やソ連および外国の作曲家の作品を演奏するマチネが行われ、児童芸術アカデミーを組織するための準備が行われている、とアルメニア共和国教育次官は話してくれた。



シャウミャン地区のピオネール・学童宮殿では子どもたちの芸術教育で成果を上げている。音楽サークルの一つで少女たちが弾いているのはアルメニアの古い民族楽器カノン。



下 少女たちが学んでいる民族的な模様のじゅうたん織りを見る柴田教授（シャウミャン地区ピオネール・学童宮殿で）



彫塑を学ぶ子どもたちと先生（シャウミャン地区ピオネール・学童宮殿で）

児童芸術教育センターには造型芸術スタジオがあり、ピオネール・児童宮殿にはたくさんのサークルが組織されている。エレバンの近くの農村シャウミャン地域のピオネール・児童宮殿は印象的だった。ここでは特に、子どもたちに手仕事と工芸品作りを教えることに力を入れていた。子どもたちはわれわれが見ている前で、じゅうたん織り、編み細工、陶芸、石のモザイク、木彫、刺しゅうに熱中していた。

これらのサークルで学ぶ児童の多くは幼稚園や保育所のインテリアを自分で作っていた。″アフタナク（勝利）″コルホーズの幼稚園ではA・オフシャピャン園長が、コルホーズのピオネール宮殿のサークルで学んでいる児童が作って贈ってくれた美しい仮面、人形、アップリケ、ゴブラン織り、モザイクをわれわれに見せてくれた。これは幼児の趣味、文化、美的概念の発達の基礎になる。このような幼稚園や保育所はアルメニア共和国全体で一一二〇以上あり、そこで約一五万人の幼児が初歩的な教育を受けている。

ワナシェン村の学校で

首都エレバンは人口一一〇万。アルメニア共和国の工業、行政、文化の中心地である。一九八五年4月、一九八六―一九九〇年のエレバン市経済発展計画を定めたソ連共産党中央委員会とソ連閣僚会議の決定が出された。その中では、いくつかの問題と並んで、市内の就学前児童施設と学校の建設を強化することが重視されていた。だがわれわれは、首都の学校ではなく、アルメニアのありふれた学校について知りたかった。そこでわれわれはエレバンから約一〇〇km離れたアララッキー地区のワナシェンに向かった。

ワナシェンは野菜と果物を栽培するコルホーズによって結ばれた人口二五〇〇の集落である。ここには10年制の普通教育学校が一つあり、四五〇人が学んでいる。各学年2学級である。1学級平均20―25人で、これは学校改革が勧告している基準と一致する。

教師や教授法専門家たちと詳しい話をしたあと、われわれは教室へ向かった。子どもたちが日本人に会うのはこれが初めてだったし、教師たちの何人かは外国へ観光旅行に行ったことがあるとはいえ、ここにいる大人だって日本人と話をするのは初めてだった。

われわれは上級生たちに日本のプロフェッサーに何でもいいから質問するように、と提案して、われわれの方は彼らに彼らの将来の計画、興味、世界で起きているあれこれの出来事についての態度を質問することにした。もちろん、日本について何を知っているかも訊ねた。

あとでホテルへ戻ってから、私は生徒や先生たちとの会話の印象を柴田教授とまとめてみた。まず第一に、そこには現代日本の生活や文化的伝統に対する大きな関心が認められる。これは基本的には多くのソ連人に共通することである。アルメニアの子どもたちの知識欲には驚かされた。彼らの質問は日本の現実の実にさまざまな面にわたっており、しばしばある問題や事実についてかなりの知識があることをうかがわせた。すばらしいアルメニア民族料理が盛られたテーブルを囲んでのワナシェンの教師たちとの会話について言えば、それは約3時間にも及び、始まってから30分ほど過ぎたころにはもう参加者全員がすっかり打ち解けて、興に乗り、互いに初めて会った間柄だなどとは想像もできないほどだった。

アルメニアの教師たちと柴田教授とは、当然のことながら、多くの共通した専門的な関心を持っており、互いに両国の教師の仕事や学校の問題についてできるだけ多く、詳しく知ろうとした。やがて話題は自然に一般的なテーマに移った。だれがどのように暮らしているか、職業のほかに何に興味を持っているか、賃金は、どんな問題にぶつかっているか等々。そして話題はいつもそうであるように、先の戦争の恐怖、いま世界を脅かしている危険へと及び、ファシスト・ドイツとの戦争で死んだ同郷のワナシェンの人々、広島と長崎の無辜の犠牲者に思いが馳せられた。われわれを歓待してくれたアルメニアの教師たちは、平和こそ世界で最も貴重なものであり、地球上のすべての民族は明るい平和な未来を享受する等しい権利を持っているという信念を子どもたちに植えつけることがソ連の学校の人道主義的な課題である、ということを日本の子どもたちと教師たちに伝えてくれるよう頼んだ。彼らは心から日本の子どもたちにいつまでも平和が続くように希望した。



授業が終わったあと、学校のグラウンドでサッカーボールを蹴っていた少年たちは、柴田教授を自分たちのゲームに誘った……

アルメニア共和国の教育探訪

東京大学教授　柴田　義松

アルメニア共和国は、歴史のある古くて、しかし若いソビエト社会主義共和国である。首都エレバンは、紀元前七八二年に建設された極めて古い都で、その遺跡からは、ここヨーロッパとアジアとの中間、西洋と東洋との交差点に、独自の高い文化をもった強力な国家が古くから存在したことがうかがわれる。学校も古くからあり、アルメニア文字は五世紀の初めに作られて、アルメニア独自の文学、学問、文化を発展させてきた。

私のアルメニアに関する予備知識は乏しく、例の美味なコニャックやぶどう酒の産地ぐらいに思っていたが、アルメニアは現実にはすでに農業国から工業国にうまれかわっていた。アルメニアには海がなく、ほとんどが高原と山地だが、人口密度は、ザカフカズのなかでもっとも高い。そこで電気器具や工作機械など、労働力を大量に必要とする機械工業が栄え、九〇〇種ほどの工業製品を輸出している。

アルメニアにソビエト政権が樹立したのは一九二〇年末だが、以来、民主的国民教育制度が発展し、現在では、すべての村に中学校があり、中等教育を修了する者は青年の九〇%に達している。高等教育機関は十三、中等専門学校は六五、職業技術学校九八、普通教育学校は一五二〇あり、三一五万の人口中、一三〇万人がなんらかのタイプの教育を受けている教育国となっている。

アルメニアの教育の現状

私たちは、まずアルメニア教育省、教育科学研究所、アルメニア教育大学等を訪れ、アルメニア国民教育の現状について概括的な話を聞いたが、モスクワのはるか南、コーカサス山脈を越えて、トルコと国境を接する小共和国アルメニアの教育水準が極めて高く、ロシア共和国と遜色がない程に充実発展しているのにおどろいた。ソ連の国民教育は、全ソ連邦に共通の統一的制度にしたがって実施されているから、それも当然といえば当然のことだ。その反面、アルメニア独自の教育制度というものをここで見出すことはむずかしい。ソ連邦では、母語による教育を受ける権利が全ソ連邦市民に認められているので、アルメニアの学校では、ほとんどがアルメニア語で教育をしている。したがって、アルメニア語とその文学の教科書、アルメニアの歴史と地理の教科書、外国語の教科書、および数学をのぞく小学校用の全教科書は、アルメニア共和国で独自に作成されている。アルメニア教育の独自性といえば、制度的にはほとんどこの点にあるだけといえよう。

教育改革も全ソ連邦と共通の方針に基づいてすすめられようとしている。現在、アルメニアでは、八年制学校卒業者の約八割が九学年へ進学し、五%が中等専門学校に、十四%が職業技術学校に進学している。この職業技術学校を、中等普通教育をもおこなう中等職業技術学校に改め、入学者も倍にふやすとともに、他方、九学年以降の普通教育と職業教育との統合をはかることが、改革の最大の眼目となっている。

大学への進学率は二割程度だが、アルメニアの大学だけでなく、ロシアの大学へもかなりのものが進学している。これはやはり超エリートの道で、生徒をロシアの大学に進学させることは、アルメニアの教師たちの一つの努力目標となっているようだ。ロシア語は、ソ連邦全体の共通語である。したがって、一般の学校では二年生からロシア語の授業がはじまり、アルメニア語とともにロシア語を自由に話せるバイリンガル（二語併用者）の育成が目指されている。また、ロシア語で教育をするロシア語学校もアルメニア全土で一〇〇校ばかり存在する。これは全体の七%ほどの数で、数学・物理学校、音楽・芸術学校、外国語学校などごく少数の英才学校とはやや性格がちがうが、特別の学校である。現地に住むロシア人子弟もここに通学するが、生徒の九割はアルメニア人ということで、両親または保護者の希望によりだれでも入学できる制度となっている。

アルメニアの教師教育

アルメニアでの教員養成は、四つの師範学校、四つの教育大学を中心に、その他、総合大学、体育大学、音楽学校等でおこなわれている。現在、教師全体の八割は大学卒であり、小学校教師も五三%が大学卒というのは全国平均をかなり上まわっている。アルメニアの教育水準の高さを示す一つの指標といえよう。

教育によって国力を高めるという思想はソ連全体に共通するものだが、アルメニアにきて、私はそれをいっそう強く感じた。学校教育の質的改善をはかる道はいろいろありうるが、なんといっても決め手となるのは教師の力量であろう。教師の資質やその地位の向上のためにどんな努力がはらわれているかを、私たちはいたるところで聞かされた。ソ連では現職教師の再教育が発展していることについては前にも述べたが、アルメニアについてみると、教育大学の通信制教育のほかに、四つの教員研修所があり、教師は五年に一回、再教育の機会を与えられている。これは、ふつう一~二カ月の講習会だが、研修所では、ほかに短期セミナーも開かれている。また、特にロシア語教師は三年ごとに再教育を受けられる。

アルメニア教育科学研究所では、教師の「教育研究集会」について話を聞くことができた。これは、わが国で日本教職員組合が主催する「教育研究集会」に性格がやや類似するもので、教師たちの日常の実践研究が各地域の研究集会で報告され、そのうちのすぐれた実践研究はさらに中央の研究集会で発表され、印刷もされて広く教師の間に普及されるというものである。研究集会はほぼ二年に一回開かれている。アルメニアでは教育科学研究所でテーマを作成し、各地区、町単位で実践発表がおこなわれ、すぐれたものが研究所に送られてくる。それらを研究所でさらに検討し、教育雑誌・新聞、パンフレット等に発表する。無署名で発表された論文が、二年間に批判を受けない場合、本人および学校の校長に報告され、業績とされるという制度もとられている。このアルメニアで高い評価を受けた研究は、さらに全ソ連邦の教育研究集会に報告され、全国に広まるのである。

私たちは、つぎにアルメニア教育大学を訪問した。この大学は、ソ連邦に最初にできた十教育大学の一つで、十二学部に五〇〇〇人以上の学生を擁し、教官は六三八人、うち教授・博士は五三名、修士は約三〇〇名というかなり大規模の大学である。五つの建物があり、物質的にはあまり豊かでないと教官たちは話していたが、エレバン市の中心部にある大学は、学生の表情にも活気があふれていた。

ここで聞いた私にとって興味深かった話の一つは、入学試験のようすである。定員一〇〇〇人に対し、約三〇〇〇人ほどの受験者がある。男女の比率では、男子が約四分の一で、これは中学校教師の男女比にほぼ等しい。ソ連では、先進的労働者とかコルホーズ員に対し優先入学の制度がとられているが、この大学でも特にコルホーズの青年に対し優遇措置がとられている。農山村では保育園の普及率がまだ三三%であるなど、教師が不足しており、都市と農村との生活水準における格差是正がソ連政府の大きな課題となっているからであろう。

この教育大学で特に人気のあるのは言語学部のようで、五~六倍の競争率がある。その言語教育研究室には六十人のスタッフがおり、十四カ国語の教育をおこなっている。三カ月の集中授業で外国語をマスターする方法が開発され、現在、日本語の教育にも挑戦しようと準備しているとのことであった。

入学試験科目はふつう四科目で、たとえば国語、外国語、歴史、文学だが、一科目（文学）は口述試験でなされる。数学の場合は、口述試験と筆記試験と両方ある。口述試験には教官二人が立



遠くからのお客さんは幼稚園では珍しいし、おまけにコルホーズの幼稚園は町から離れているので、日本のプロフェッサーの訪問は子どもたちには物珍しく、うれしかったようだ（〝アフタナク〟コルホーズの幼稚園で）。

▼
柴田教授の質問に手を挙げたのは、多分、クラスでいちばん勇気のある生徒たちだった（ワナシェン中学校で）。





▲池で水遊びをする〝アフタナク〟コルホーズの幼稚園児たち



ジュリエッタ・カラペチャン校長自身が担任する9年生のクラスで、日本についての本で記憶に残っているもののことを話す女生徒。



4年生のロシア語の授業。隣の黒板に漢字で「日本」と書いたところ、生徒たちはその訳の分からない符号を自分のノートに書き写した。

ち会う。試験問題は、教育省の承認を得ることになっているが、口述試験の問題はあらかじめ二、三問出されたものについて一時間位、答案を考えたのち、一人あたり十五分ほどでおこなわれる。口述試験については、当然、その客観性が問われる。そこで最近は、心配してついてくる両親たちのために、口述試験のもようを別室でテレビで見られるようにしているそうだ。いずれにしても、ソ連の大学の入試制度は、一発勝負式のわが国の大学入試とくらべ、念入りだ。このような時間のかかる口述試験をはじめとして、学校の成績優秀者の無試験入学、企業、コルホーズ、軍隊経験者等の優先入学など多様性に富み、受験者の能力・知識水準・経験等を多角的に評価して、入学者選抜をおこなっている。アルメニア教育大学には夜間部はないが、通信制教育はおこなっている。この通信制教育は、小中学校の教師で大学資格を求める者は無競争で採用される。こうした通信教育や夜間部の学生が多いことはソ連の大学の特徴で、全ソ連邦では、教育大学の全学生八四万人中、半数近くが通信教育および夜間部の学生である。

アルメニアの保育園と学校

アルメニアの教育の実情を視察するため、特に希望して、農村地区の保育園、十年制学校およびピオネール宮殿を見学した。現在進行中の教育改革がどこでも話題にのぼったが、たいていが全ソ連邦共通のもので、アルメニアに固有のものとして興味をひいたものといえば、学校の物質的基盤の改善として、第十二次五カ年計画中（一九九〇年まで）に学校の特別教室を完備し、建物を約二倍に増やす計画、アルメニアには海がないため水泳指導が従来不十分であったので、全校に幼稚園をふくめプールを新設するという計画ぐらいのものである。

保育園の現場で現在、重要課題となっているのは、六歳児入学への移行の問題である。これまでも六歳児には、アルメニア文字（三六文字）と〇から三〇までの数の教育がおこなわれていたが、文字指導を読み方だけでなく書くことまで、三〇までの数の指導を加減の計算指導にまで高めることを中心とした授業内容の改革がすすめられている。

私たちが訪れたアフタナク村保育園には、二二五名の児童が十一組に分かれて保育されている。一組平均二〇～二五名である。保育者たちは六時間二交代制で、朝七時半から夕方六時十五分まで勤務し、十時間保育をおこなっている。十七名の保育者のうち十名は師範学校卒、七名は大学卒ということで、高等教育修了者の率は高い。他に、看護婦二人、助手十一人、調理人、事務員、教務主任、園長など計三七名が勤務している。

この保育園では体育の実践研究に力を入れており、三～四歳の体育指導については、その実践内容がモスクワのソ連国民経済成果博覧会を通じて全国に広まっているという。私たちは、五～六歳児の体育指導の実際を体育室で見学したが、軽快なピアノのリズムにのって行進したり、踊ったり、全身運動で軽い汗を額にうかべて子どもたちが、いかにも楽しげな表情をみせているのが印象的だった。

翌日の土曜日、私たちは、エレバン市から南へ、車で一時間あまりアララット山を右方に仰ぎながら、アララツキー区ワナシェン村の十年制学校を訪れた。生徒総数四五〇名、各学年二組に分かれるので、一学級の生徒数は二十数人である。女性の比較的若い美人校長が出迎えてくれたが、教師は四七名、うち十五名は本校の卒業者ということで、村のコルホーズとの関係は極めて密接である。卒業生も大半は、コルホーズで働くことになる。

そのため高学年生に対する職業指導の充実改善が、やはり学校の重要課題となっている。コルホーズの機械化がどんどん進行しているので、それにあわせて技術教育の内容を高めることが問題で、生産実習は近隣の八つの学校が共同利用する例の「生産実習コンビナート」でおこなわれている。そこでは六つの職種（家禽と家畜の飼育、野菜栽培、じゅうたん製作、自動車およびトラクターの運転）の実習が可能ということであった。

三年生のロシア語授業と十年生の物理の授業を見学した。私が興味をもったのは、一つは教卓の上においてあった教師の使う「学級成績簿」と生徒たちが全員もっている「日誌」である。「学級成績簿」を開くと左端に生徒の名前がアルファベット順に並んでいる。「ロシア語」のページを見ると右側に日付と授業テーマ、教科書のページ数などが書きこまれており、中央には上欄に日付け、その下に生徒の成績が五点法で書き入れられるようになっている。生徒全員の点数が書きこまれている日が十日に一度ぐらいあるが、これは一斉テストがおこなわれたときのものだろう。ほかは一日に三、四人の生徒の欄に3点、4点、5点といった点数がつけられている。1とか2の数字はめったに見られない。これらは落第点で、成績がよほど悪いときにつけられるものだからだ。

ソ連の学校ではこのようにして毎日の授業中にも生徒の学習成績が評価され、点数がつけられる。その点数が記入されるのが、生徒たちの「日誌」で、見開き二ページに月曜から土曜までの欄があり、各曜日に授業のおこなわれた教科名、課題、評点等が書き入れられるようになっている。その他、欄外には、欠席・遅刻を通知したり、教師と両親が署名する箇所があり、この「日誌」は学校と家庭とをつなぐ通信簿の役割をはたしている。

ソ連の学校における生徒の成績評価のし方がこれでおおよそ分かるだろう。学期末試験だけでなく、常時このように授業中にも評点がつけられることから、ソ連の生徒たちは、ふつう極めて規律正しく、授業中さわいだりするようなこともめったにない。教師も生徒一人ひとりの学習状況を常に把握するよう努める必要があり、この評価方法がソ連の学校の授業のあり方を大きく規定しているといえる。点数評価をあまりに意識しすぎる場合の欠点もあり、その点の批判が学会などでは問題にされているようだが、すでに永い伝統となったこの評価方法がかんたんに変わることはないだろう。

つぎに物理教室で授業中の生徒たちと私がかわした問答をここで紹介しておこう。

「物理の学習は好きか、きらいか」という私の問いに対して、半数以上の生徒が「好き」とこたえ、教科のなかで「もっとも好き」とこたえた生徒が三分の一ほどいた。

「物理の学習はなんのために必要と思うか」という問いには、「自然の法則を学び、科学的世界観を獲得するため」だという模範的回答がかえってきた。「物理の学習を自分の将来と結びつけて考えているものはないか」とさらに問うと、一人だけ手があがった。物理学を専攻しようとするものらしい。

最後に、「物理法則を実際に応用した例を一つあげてほしい」という問いに、女子生徒がただちに出てきて、教卓に置いてあった器具を使い、電磁波とラジオの説明をしてくれた。こちらの質問に、いくらかはにかんだところはあるが、てきぱきと短く的確に答える生徒たちには大いに好感がもてた。

逆に、日本のプロフェッサーに対する質問が、三人の生徒から出た。

「日本の学校には特別教室があるか」

「教科書は無料か」

「日本の生徒たちは世界平和のためにどのようなたたかいをしているか」

最後の質問にはいささかとまどった。平和教育の実践は私もいろいろと知っているが、子どもたちの自主的な平和運動といえるものをすぐに思いうかべることはできなかったからである。ソ連では九月一日の入学式の日に全学校で「平和」の授業がおこなわれるなど、平和教育については極めて熱心であることを私はたびたび見聞してきたが、あらためて平和への関心が子どもたちにも強いことを認識させられた一瞬であった。と同時に、平和は「たたかい」によって守られるという子どもたちの認識に、ソ連の平和教育の特質が見事にあらわれていることを感じた。



アララツキー地区のワナシェン中学校を訪問したあと、見送りに出てきた中学校の先生たちと記念撮影。左から5人目がこの地区の国民教育部長ベニアミン・アルチュニャン、その右がジュリエッタ・カラペチャン校長。

オビ川の水をアラル海に送る
シブアラル運河計画

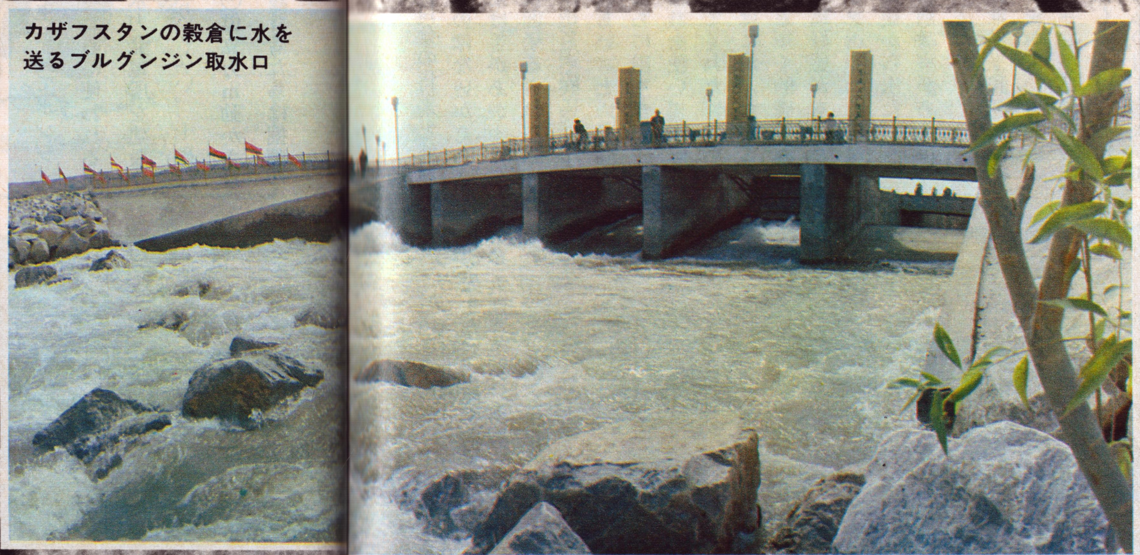
——ウォロパエフ水問題研究所長に聞く



グリゴリー・ウォロパエフ（水問題研究所所長、ソ連科学アカデミー準会員）

昨年の10月、ソ連共産党中央委員会総会は関係諸機関に、長期土地改良計画の一環であるシベリアの河川とアラル海を結ぶ運河の建設計画（シブアラル・プロジェクト）の作成を委任した。

21世紀には実現するにちがいないこの大事業について、本誌記者パーベル・アントノフがソ連科学アカデミー準会員で水問題研究所の所長でもあるグリゴリー・ウォロパエフにインタビューした。



カザフスタンの穀倉に水を送るブルグンジン取水口



カザフ共和国の首都アルマアタを潤す大アルマアタ運河



中央アジア最大級の大フェルガナ運河

水を待つ中央アジアの肥沃な土地

シブアラル運河計画

——運河の概要を読者に紹介してほしい。どこから始まって、どこで終わるのか、幅は、深さは……等々。

水量ではエニセイ川、レナ川に次いでソ連で3番目のオビ川にイルティシ川が合流する地点から数km下流にベロゴリエという小さな村がある。運河はこの村の近くから始まる。オビ川は南から北に向かって流れ、年間四〇〇立方kmの水を北極海に注いでいるが、運河はその水量の約7%、年間27・2立方kmの水をもらう。運河は北から南西に中央アジアめざして二五五〇km走り、オビ川の支流トボル川の水源から約五〇〇km西に達し、カスピ海に次いで世界で2番目に大きい湖——アラル海水域の大河、シルダリア川とアムダリア川に水を供給する。これによって、ここ数十年、流入する水量の不足で水位が下がりつづけているアラル海の寿命を延ばそうというものである。

運河の幅は平均約二〇〇m、深さは10—15m。大型船も航行できる。運河の最初の$\frac{1}{3}$の区間にはいくつも閘門が設けられ、水は合計一一〇mの高さまで持ち上げられ、下流から上流へと逆送される。

五つのポンプステーションを使って水を段階的に分水嶺まで持ち上げ、そのあとはシルダリア川、アムダリア川まで自力で下らせる。水を一一〇mの高さまで上げるのは簡単なことではない。ソ連には水を数百mの高さにまで上げなければならない運河もある。もちろん、ずっと小規模な運河だが。

——水が漏らないようにするためには河床や側壁は何で覆うのか?

特別な材料は考えていない。土のままだ。運河の予定コースの土壌を長期にわたって調査した結果、地中に浸透して失われる水の量は10%を超えないことが分かった。その理由の一つは、運河は主として干上がってしまった昔の川の河床を使うからだ。

——運河の建設はどのような規模で行われるか?

コンクリートは主としてポンプステーションの建設のために使われるが、その量は中規模の水力発電所を建設するのに必要な量より少ない。土砂はもっと多く、約六〇〇億立方m動かさなければならない。設計者たちは掘削作業、特に発破作業の最も効率的な方法を採用しようと努力している。

——工期は?

現在、ソ連土地改良・水利事業省の年間土木工事量は七〇億立方mだ。建設者の作業能力は毎年10%の割で増加する予定になっている。この増加分のすべてがシブアラル・プロジェクトに投入されれば、工事は10年かからない。

——それほど優先的に扱うだけの価値があるのか?

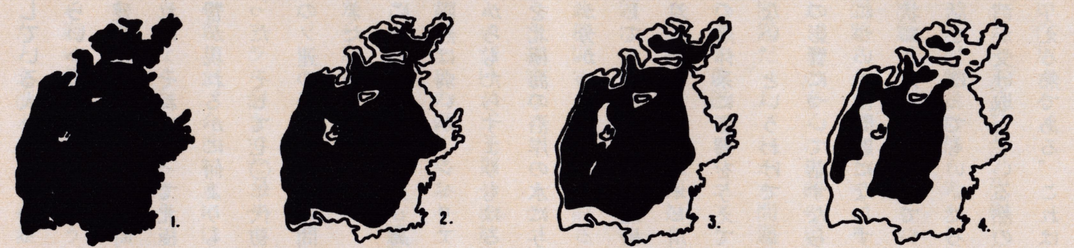
ある。この地域の農業気候潜在力はソ連の他の地域のそれの3—4倍、場合によっては6—7倍も高い。ここは日照に恵まれ、土地も肥えている。水だけが足りないのだ。太陽エネルギーが足りないのならお手上げだが、水なら運んでくることができる。

この地域では実質的には人間に必要なすべての作物が栽培されており、年2回の収穫も可能だ。だから中央アジアは飼料と穀物の最大の生産地になることができるし、そうなるべきだ。飼料といえばまずトウモロコシだが、たとえばウズベキスタンでは近年、数万haにわたって、1haあたり7t以上の

シブアラル運河予定図



減水によるアラル海の後退（数字は最深部の深さ）



53m（1960年）　48m（1977年）　43m（1990年）　33m（将来の予想）



数kmにわたって底を見せたアラル海

トウモロコシを収穫している。これは安定した全ソ的な記録になっている。ここでよく取れるのはトウモロコシだけではない。ここでは飼料の保存と加工が容易で、家畜を飼育するコストはソ連のどの地域よりもはるかに安い。

一九八一年にソ連は外国から四二〇〇万tの飼料用の穀物と豆を輸入した。ソ連にはこの地域以外に、飼料用の穀物の不足をカバーできる地域はない。その観点からもシブアラル運河はユニークな役割を果たすだろう。

さらに、中央アジアでは人口がソ連の平均よりも急速に増えていることも考慮しなければならない。運河の建設が終了するころまでに、人口は二〇〇〇万人以上増えているだろう。シブアラル運河がなければ、増加した人口のために社会的に有用で興味深い仕事を保障することはできないだろう。

――こんどは運河の建設がもたらす危険について。シブアラル運河が地球規模の熱体系に与える影響が特に心配されており、たとえば、淡水の流入が減ることによって北極海の水温が上がるのではないかと言われている。その結果、北極海の氷が解け、世界中で海水面が上昇し、欧州は水没するのでは、と心配している人々をどうやって安心させたらいいのか？

運河建設の構想が生まれた時点からわれわれは、それによって北極海にどんな影響が現れるかに何よりもまず関心を持った。そして七〇年代初頭から、10以上のソ連の研究所がこの問題を研究してきた。

長年にわたる観察の結果、高緯度帯では太陽熱は弱いが、シベリアの河川が大陸からもたらすよりもはるかに多くの熱を北極海の沿岸の水に与えていることが分かった。

強調しておくが、それは北極海沿岸の水に対してであって、オビ川は北極海全体の熱体系に影響を与えているわけではない。というわけで、シブアラル運河の影響について話すなら、北極海全体については問題にならず、カラ海の氷状にさえ影響を与えていないオビ湾に話をしぼってもいいだろう。

オビ湾が受け取っている熱の96％は太陽が与える熱である。これはかなり正確に分かっている。オビ川がもたらす熱は4％にすぎない。われわれがオビ川から取る水の量は7％だから、熱量で言えば、この川がオビ湾を暖めている熱の総量の0・3％にもならない。たとえてみればこれは、タバコに火をつけようとしてライターに点火したときの室内の温度の変化に相当する。

精密な機器ならオビ川河口から15km離れたところの水温のわずかな変化を計測することもできるだろう。しかし欧州まではそれからはるかに距離がある。カラ海を出れば、もうどのような変化も検出できない。

――これまでは取水量27立方kmを前提に話を進めてきたが、第2段階で予定されている60立方kmまで取水量が増えた場合はどうか？　さらに、一〇〇立方kmの場合は？　オビ川の水を全部取ってしまって、カラ海に一滴も水を流さなかった場合は？

一滴も流さない場合でさえ、変化はまったく認められないだろう。大気との相互関係にも、地球の他の地域への熱の転換にも影響がないだろう。

年間に総量約一五〇〇立方kmの淡水を北極海に注いでいるシベリアのすべての川の流れが止まってしまえば、話は別だ。そうなれば、北極の温暖化につながるプロセスが始まるかもしれない。

――暖かい水の流入が減るのになぜ温暖化か？

かなりむずかしい、しかもあまり解明されていない仮説による。その概要はこうだ。北極海が氷で覆われるのは、表面に冷たい淡水の薄い層があるからだ。淡水の流入が減ると、氷も少なくなる。そうすると北極海の温度の垂直分布が影響を受け、もっと暖かい下層の海水層が上昇し始める。このプロセスはもはや中断されることなく、数百年後には北極海はかなり暖まってしまう。だがくり返すが、こんなことが起こるのは、シベリアのすべての大河の流れがとつぜん止まってしまったらの話だ。

――砂漠をうるおすのにオビ川の水が選ばれたわけは？

ほかの川の水でもいいのだが、オビ川がいちばん自然だ。西シベリアとカザフスタンの地図を見てほしい。両者はウラル山脈の支脈とカザフ小死火山帯の間に横たわるツルガイ盆地によって結びつけられている。この盆地は北へ流れる川とアラル海に注ぐ川の分水嶺である。

生態系循環は自然そのものによって絶えず変えられている。一万一〇〇〇年前、ここは巨大な海だった。だからこれらの地域を結ぶ水の流れは自然な現象であり、運河が従来からの自然のプロセスを乱すことはない。

シブアラル運河は人間にとっては巨大なものだが、自然にとってはかすり傷にもあたらない。

――では、この計画にはマイナスの側面は何一つないと結論づけていいのか？

もちろん、現実はそれほど牧歌的ではない。運河には水工施設がつきものだ。それは何よりも貯水池であり、ダムである。ダムは魚の移動を阻止し、生息域を制限する。鉄砲水を和らげ、氾濫をなくすことによって、貯水池は大昔からの産卵場の条件を変えてしまう。

水工施設の建設はつねに漁業にとっては悪影響を及ぼす。残念ながらシブアラル運河も、オビ川下流の魚類相に否定的に作用する。

一五〇以上の研究所が約10年にわたって、運河建設に伴う考えられるかぎりの問題、しばしば考えもつかないような問題さえも想定して、それに答えてきた。その多くは周囲の環境にかかわる問題だった。わが水問題研究所は計画の前の段階で、シブアラル運河に関する学術協議会を80回以上開いた。この問題はソ連の最高レベルの政治機関、行政機関でも何度も検討された。このような綿密なアプローチ、慎重なアプローチだけが、予期せぬ結果に出くわさないための保証になりうる。

――この運河はどうしても建設しなければならないのか？

そうだ。シルダリア川は年々流れが細って、アラル海までたどりつくのがやっとの現状だ。今世紀末には両者はつながりがなくなってしまう。アムダリア川も同様の運命にある。そうなればアラル海は最後の水源を失う。水なしでは、たとえ海とはいえ砂漠の中では生きられない。アラル海はいまでも、すでに目に見えて干上がりつつある。

――だが、それは予測できなかったのだろうか？　砂漠の中で死にかかっている海を救う代わりに、それだけの水を灌漑目的に使ったらどうか？

もちろん、このような事態は予測されていたし、計画に組み入れられてさえいた。一つの海が死にかかっている代わりに10指にあまる大貯水池が出現し、必要なところに水を届ける用水路網が張りめぐらされた。かつては太陽に焼かれていた砂漠の地に数百万haの肥沃な耕地が生まれた。ラクダが食べるマメ科の植物しか生えなかった場所に人間、動物、栽培作物――すべての生物が生きるためのすばらしい条件が作り出された。かつての不毛の地で樹木が葉を繁らせている。そして、これらすべてにさらに数百万haの灌漑された土地をつけ加え、しかも死にかかっているアラル海を復活させるために、まさにオビ川の水が必要なのだ。

――建設にはいくらかかるのか？

すでに述べたように、この運河の建設にはソ連土地改良・水利事業省の現在の1年分の支出とほぼ同じだけの金額がかかる。これは15年で償却される。

――懐疑論者は、そんなおカネがあったら、それほど派手ではないがもっと合理的な目的のために使った方がいい、と主張している。彼らは同じ〝効果〟でも、この計画は〝実効がある〟というよりもむしろ〝効果をねらった〟ものだと言っているが……

もちろん効果もねらった。もしそう言うのなら、バイカル・アムール（バム）鉄道だってそうだ。ただ、こちらは垂直的な効果と水の効果だ。しかし、全国的な規模で収量を増加させる問題を解決できる唯一の方法である、という意味では実効もある。もちろん、穀物貯蔵所や道路その他も建設しなければならない。せっかく収穫した穀物が貯蔵や輸送の過程でダメになるロスも大きいからだ。とはいえ、これらは相互に対立するものではなく、収穫したものを大切にするすべての方策は今後の2期の5カ年計画で実現する。シブアラル運河によって増産が本格的になるのは21世紀の初頭からだろう。それは水なしには不可能だ。わが国で最も肥沃な地域である中央アジアに水を供給できるのはシベリアの河川だけだ。



科学万博のソ連ナショナルデー

M・エフィーモフ



ソ連館でアントノフ副首相と語る赤城宗徳・日ソ親善協会会長。左端はアブラシモフ駐日ソ連大使。

科学万博――つくば'85のエキスポプラザに5月13日、ソ連国旗と日の丸が掲揚された。これはソ連ナショナルデーの開始を告げる儀式だった。

エキスポプラザの貴賓席にはA・K・アントノフ・ソ連閣僚会議副議長（副首相）を団長とするソ連政府代表団の姿があった。

両国政府代表のあいさつのあと華やかなコンサートが開かれた。ソ連軽音楽のスターが大勢参加し、ソ連諸民族の特色あふれる歌と踊りを、常になく大勢集まった三〇〇〇人以上もの観客に披露した。

この日は万博会場の至る所でロシアのメロディーが流れた。

A・アントノフ・ソ連政府代表団長に万博と訪日の印象を語ってもらった。



▲ソ連ナショナルデーの開会式であいさつするソ連政府代表団長のA・K・アントノフ・ソ連副首相とエキスポプラザに集まった人たち

下　開会式のあと、ソ連のアーチストたちによる華やかなコンサートが繰り広げられた。

「私たちは科学万博――つくば'85ソ連ナショナルデー式典に参加するため特に来日しました。ソ連館に向けられた主催者側の数々の賛辞を聞いてうれしく思いました。ソ連館の人気のほどは、開幕以来現在までのソ連館の入館者数一八〇万人以上という数字によく表れています。これは万博入場者の3人に1人がソ連館に関心を持ったということです。科学万博は非常にバラエティーに富み、多くの顔を持っていて、いろいろ見るものが沢山あります。この点は私たちも自分の目で確かめることができました。

エキスポプラザのお客さんたちがソ連政府代表団長の私のあいさつに示して下さった関心と敬意には感激しました。主催者側のお話では、ソ連ナショナルデーのレベルは高いものだったということです。

ソ連ナショナルデーへの参加のほか、ごく短い日本滞在中に私たちは非常に多くの重要な会見を持ちました。その中ではまず第一に中曽根首相と安倍外相、そして経団連首脳たちとの会談を挙げておきたいと思います。私たちは一連の商社や工業企業を訪れ、双務関係の具体的な問題を話し合いました。私たちの確信したところでは、両国間の広範な交流を促進する良好な条件をつくり出すための未利用の余力が沢山残っています。日本側はソ日貿易に生じているアンバランスを克服する方策をもっと積極的に探求すべきだと思います。

全体として私たちは今回の日本訪問が実り豊かなものであり、多くの点で認識を深めるものであったと考えています。これは私たちの代表団員全員の一致した意見です」



コメコンの国際投資銀行

——創立15周年に寄せて

本誌記者 ビャチェスラフ・サモシキン
カメラ B・プリホジコ



モスクワのプレスネンスキー・バルにある国際投資銀行の建物



▼銀行理事会の会議

経済相互援助会議（コメコン）加盟10カ国（ブルガリア、ハンガリー、ベトナム、ドイツ民主共和国、キューバ、モンゴル、ポーランド、ルーマニア、ソ連、チェコスロバキア）は互いにさまざまな貿易・経済交流のきずなで固く結ばれている。共同の活動を管理するために、コメコンに設立された幾つかの国際組織は、全加盟国の同権を原則に活動している。このような組織の一つがモスクワのプレスネンスキー・バルにある国際投資銀行である。

銀行の活動にはすべてのコメコン加盟諸国が参加している。ユーゴスラビアはこの銀行と協力協定を結んでいる。

国際投資銀行の設立から今日までの15年間に、この銀行の融資で85の経済対象が新設、改修された。その主なものはハンガリーのバス生産合同イカルス、キューバの砂糖工場、ブルガリアの高速環状道路ソフィア＝ブルガス＝ワルナ＝ソフィア線、ポーランドのソ連製エアバスＩＬ86用ユニット製造プラントである。

通常、この銀行の融資で建設されているのは、ある一国の枠を超えた意義をもつ企業やプロジェクトであり、銀行のこの活動原則について、トドル・ディミトロフ国際投資銀行理事会副総裁（ブルガリア）はこう語っている。

「ある施設の建設に融資する場合、当行はこの建設に利害をもつ国々の立場に留意する。たとえば、ブルガリアはもう以前からフォークリフト・トラックの生産を専門としており、90％以上をコメコン諸国に輸出している。そこで当然、コメコン諸国はブルガリアのフォークリフトの増産を望み、〝バルカンカル〟公団の拡張、近代化、改修に進んで融資している。

また当行はある一国だけの生産にしか関係のない対象の場合でも、その国の国民経済の振興のために融資する権限を持つ。しかしこの場合でも、他の国の間接の利害を調査しなければならない。当行はハンガリーの鉄道部門の改装、電化に融資し、貨物積み替え駅を拡張し、数本の路線を電化した。これに直接利害を持っているのは当事国のハンガリーだが、貨物の輸送がスピードアップされるので、ほかの国々にも恩恵が及ぶ。私は当行がコメコン加盟諸国の経済振興を積極的に後押し、生産の専門化と協業化を調整するセンターだと思っている」

W・フリードリッヒ重工業融資部部長（ドイツ民主共和国）も、副総裁と同じような考えを私に語った。

「国際投資銀行の融資対象は、すべてコメコン域内の長期目的別協力計画と結びついたものである。たとえば私の部はコメコンの原子力発電発展計画に従って二つのプロジェクトに融資している。ハンガリーでは当行の融資でガンツ・マアバグ機械製造工場の生産設備が拡張されており、昨年からすでに原子力発電所用の設備を生産し始めた。当行が融資したドイツ民主共和国マグデブルグのテールマン重機械製造コンビナートでは、最近原発用クレーンが生産されるようになった。

国際投資銀行が関与している対象はいずれも重要な特徴をもっていて、生産発展の集約的な道へのコメコン加盟諸国の移行と切り離せない。当行は初期には主に新規の建設に融資してきたが、今は企業の近代化・改修や、科学技術革命の成果の生産への導入を目的とするものがほとんどである。

私の良く知っている例を挙げておくと、エルフルト市（ドイツ民主共和国）のウムフォルムテフニク・コンビナートはこれまで3回当行から融資を受けて、設備を更新し、今ではプレス設備をコメコン諸国をはじめ、ほとんどすべての先進諸国に輸出している。ライプチヒ見本市に出展されたこの工場製のエレクトロニクスを装備したプレス機械は、プレス6—7台の生産ラインに取って替わる総合機械で、部品の工場内の輸送距離を短縮し、資材と生産面積を節約し、労働生産性を高める。またプレス機械は個別注文により一基しか製造されないので、設計作業量が著しく増える。ウムフォルムテフニク・コンビナートによる融資利用のもう一つの成果は、設計作業にコンピューターが導入され、設計業務がぐんと速くなり、発注者のすべての要求を考慮に入れることができるようになったことだ。これは機械工業を発展させる現代的な道であり、加盟諸国の他の諸企業のよい手本である。

国際投資銀行の中期、長期信用の供与のもう一つの効果は投資効率が高いことだ。かつてソ連のオレンブルグ・ガスコンデンセート鉱床の開発とソ連から欧州諸国へのガスパイプライン〝ソユーズ〟の建設に、二四億振替ルーブル（注）という最高額が融資された。一九八〇年から加盟諸国は毎年このガスパイプラインによって一五五億立方ｍの天然ガスを受け取っており、ブルガリア、ハンガリー、ドイツ民主共和国、ポーランド、ルーマニア、チェコスロバキアの燃料エネルギー・バランスの改善に役立っている。また、国際投資銀行の設立以来、当行が融資した諸対象からは、コメコン諸国に二三〇億振替ルーブル以上の製品が輸出された」

（注）振替ルーブル——社会主義的な国際共同通貨で、コメコン加盟諸国間の非現金決済のさいの支払い手段。1振替ルーブルの金含有量は純金0・99g。ただし、具体的な貨幣としては流通していない。

前述の融資に次ぐ高額融資は、チェコスロバキアのタトラ自動車工場の改修と近代化に供与された。これについてミロスラフ・ボグル計画・経済部副部長（チェコスロバキア）は次のように語った。

「国家間の生産の分業と協業化の枠内でタトラ工場は積載量16ｔ以上のトラックを生産している。国際投資銀行のクレジットを利用したおかげで、一九八二年以来工場は新型車タトラ八一五の生産を開始した。これは最新の科学技術の導入、耐久性、用途の広さなどから見て、世界の最高水準を行くものである。〝タトラ〟のトラックは36のモデルが生

産されよう。オーバーホールまでの走行距離は最高四〇万kmに延びた。こうして年間一万五〇〇〇台の〝タトラ〟が生産され、コメコンのすべての国の輸送に活躍する。〝タトラ〟のトラックはさまざまな気象・作業条件のもとでもOKで、ソ連の極北でもテストされてパスした。

では、融資の仕組みはどうなっているのか？　コメコン加盟諸国の国民経済計画の調整のさいに融資対象の候補が決められ、そのあと一定の国から国際投資銀行へ融資申請書が提出される。申請書には、特に社会主義的統合から見た融資対象の意義が立証され、技術・経済的計算、世界水準の製品に比べた製品の出来、長所などが挙げられている。申請書は国際投資銀行の理事会と総会で審査される。総会は3/4以上の多数決で、融資を決める。今日まですべての決定は全会一致で採択されたが、これは偶然ではない。

ここで国際復興開発銀行、アジア開発銀行などのような国際銀行とは異なる、国際投資銀行の活動のポイントを指摘しておくのがよいだろう。授権資本への加盟諸国の分担払込資本は、相互貿易額に占める加盟国の輸出量に応じて決められる。しかしそのさい分担額の多少にかかわりなく、各国は他国と平等の権利——一票を持っている。このように国際投資銀行の管理における民主主義は完全なものだ。

国際投資銀行総会が融資を決定した後、その国と融資協定が結ばれる。協定では融資額、融資の利用と償還の期間、金利、融資対象の見積り価格、操業開始期間などが定められる。現在国際投資銀行の大多数の融資対象から融資金の消化と平行して製品の供給が始まっている。これは近代化と改修の諸対象をさらに一層効果的なものにしている」

ズビグネフ・マシチク事業分析・監督部部長（ポーランド）は語る。「しかし当行の業務は貸付金の供与と負債の徴収だけに留まらない。われわれは融資対象に対して、申請書の受け付け時からクレジットの償還まで逐一目を光らせている。建設の進行具合や融資の使用状況、国際水準に製品の質が合致しているかどうかを監督している。基準に合致しないなら、何も投資する必要はないからだ。必要が生ずれば、銀行は信用上の制裁を行使することができる。たとえば金利を引き上げることができる。もっとも、まだそのようなことは一度もないが……」

どこから国際投資銀行は広範な信用活動のための資本金を得ているのか？　このテーマで私はベラ・シャンドル資金部部長（ハンガリー）と話し合った。彼は33歳、ここでは最も若い部長だ。

「国際投資銀行の財源は自己資金と導入資金から成る。自己資金とは、一〇億振替ルーブル以上になる授権資本で、そのうちの70％が振替ルーブルにより、30％が交換可能通貨で払い込まれている。われわれは交換可能通貨の資金を国際資本市場から入手しており、世界の三〇〇以上の銀行と良好な実務的接触を保っている。われわれが交換可能通貨のクレジットを供与するのは、その施設がコメコン諸国で生産されないプラントを必要としている場合である。しかし資金部の主要な課題は、銀行全体の課題もそうだが、社会主義諸国間の経済交流を強化し、相互貿易の発展を促進する振替ルーブルによる業務の拡大である。現在われわれは振替ルーブルの資金を導入する可能性と形態を大々的に調査している。

われわれとモスクワの国際経済協力銀行との実務関係はよい。国際経済協力銀行は社会主義諸国の外国貿易振興のための短期融資をやっている。国際経済協力銀行はコメコン加盟諸国の多角的決済センターであり、われわれとこの銀行との緊密な協力は全く必要である」

国際投資銀行の〝頭脳センター〟である計画・経済調査部部長のワレンチン・ステパノフ（ソ連）の話——

「われわれは当行のすべての部の活動を調整し、信用活動の発展の見通しを立て、予測し、当行の業務の収益性を分析している。われわれは、出費をカバーするだけでなく、振替ルーブルでも交換可能通貨でも利潤を得なければならないからだ。

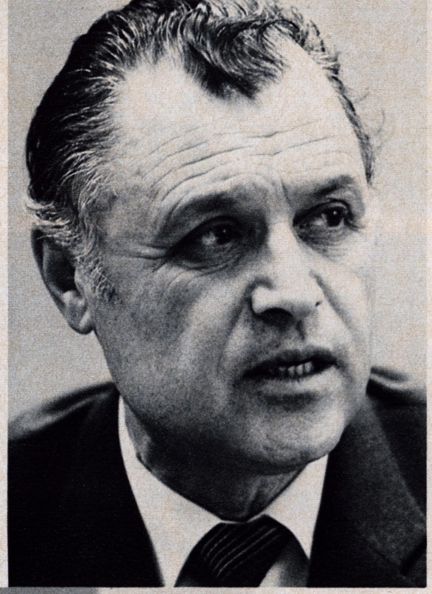
部員たちは、コメコン加盟諸国の各国民経済計画の全般的調整に銀行が参加する計画を策定したが、いまは次の5カ年計画（一九八六—九〇年）の信用供与のための統合対象を定め、この期間の銀行の活動の基本方向を決めているところだ」

すでに10年間国際投資銀行理事会総裁を務めているアリベルト・ペリチェンコ（ソ連）の国際的なスタッフには、銀行加盟国の70人以上の専門家が働いている。ドイツ民主共和国国立銀行から出向しているウォルフガング・フリードリヒ氏は記者に、「国際投資銀行での仕事は私や同僚たちの職業技能を向上させるだけではない。これは国際主義の学校である。ここでは銀行の全加盟諸国の相互利益が一致する。われわれはその利益を考慮するよう努めている」と語った。

国際投資銀行の銀行マンたちは前途を楽観している。彼らが投資している社会主義経済統合の事業は確実だし、前途洋々である。



アリベルト・ペリチェンコ国際投資銀行理事会総裁（ソ連）



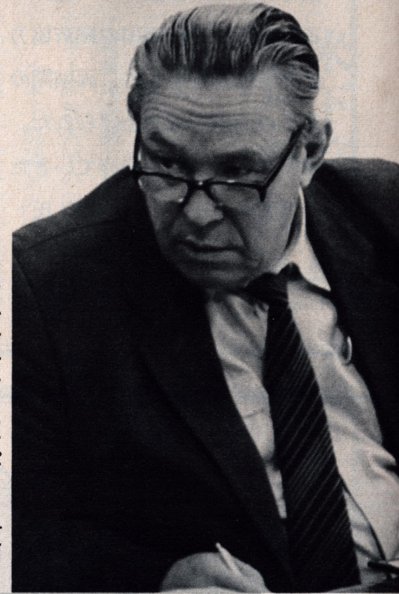
トドル・ディミトロフ理事会副総裁（ブルガリア）



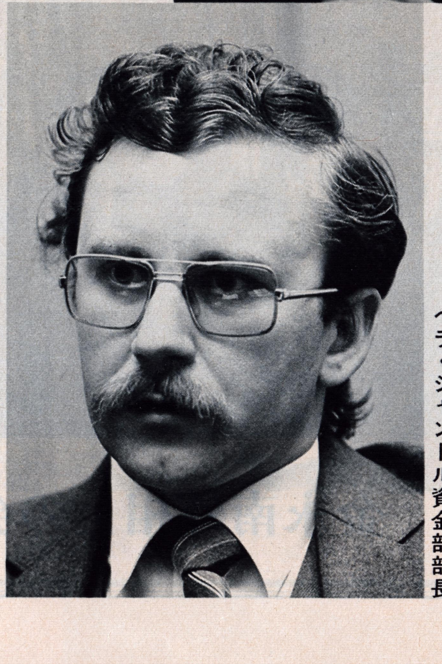
ミロスラフ・ボグル計画・経済調査部副部長（チェコスロバキア）



ウォルフガング・フリードリヒ重工業融資部部長（ドイツ民主共和国）



ワレンチン・ステパノフ計画・経済調査部長（ソ連）



ベラ・シャンドル資金部部長

写真ニュース



4月18日、ゴルバチョフ・ソ連共産党中央委書記長はクレムリンでドイツ連邦共和国の財界代表クリスチアンス・ドイツ銀行頭取と実務的かつ建設的な会談を行った。会談ではソ連・ドイツ連邦共和国両国の経済協力の発展問題を中心に、両国間の若干の問題が取り上げられた。

（写真――協力を強めていきたいと強調するクリスチアンス氏）

ソ連・西独の経済協力



金永南外相との会談

4月17日、モスクワでグロムイコ・ソ連外相と金永南・朝鮮民主主義人民共和国外相の会談が友好と相互理解の雰囲気の中で行われ、両外相は両国間の多面的な協力のダイナミックな進展を喜び合った。双方は、今後とも友好関係を深めるための共同の活動を積極的に続けることに賛意を表した。

社会主義諸国の平和政策に対抗する戦線づくりを目的とするアジア・太平洋地域の動きに深い懸念が表明された。両国は第2次世界大戦の結果生じた政治的・領土的現実をすべての国が厳守し尊重したうえでアジアと全世界の平和を強化するための努力を倍加すべきであると強調した。（写真は会談前の記念撮影）



米下院議員団との会見

4月10日、ゴルバチョフ・ソ連共産党中央委書記長は、ソ連最高会議の招きで訪ソした米下院代表団の団長T・オニール米下院議長とクレムリンで会見し、米下院の議員たちがソ連最高会議の代議員と活発な政治的対話を行ったことに満足の意を表した。

会談中M・S・ゴルバチョフは、ソ連指導部はソ米関係が正常な互恵協力と相互尊重の軌道に戻り、ジュネーブ交渉が具体的な合意をとげることを心から望んでいると指摘した。

「広範な実り多い協力が進めば、ソ米両国民が得るところは大きい。両国民が安全を保障し、ソ米両国民の生活そのものを守るという、共通の関心で強く結ばれていることは言うまでもない」とM・S・ゴルバチョフは強調した。

（写真はM・S・ゴルバチョフと談笑するオニール議長を団長とする米下院議員団）

ソ連・カナダ会談

4月3日、グロムイコ・ソ連外相はソ連政府の招きでソ連を公式訪問したJ・クラーク・カナダ外相と会談した。

ソ加関係の諸問題に関する意見交換のさい、両国関係がずっと安定した発展を持続するよう願っているとの共通の希望が述べられた。双方は政治的対話を活発にし、貿易・経済、科学技術、文化、その他の分野での両国の互恵協力を拡大する用意があることを確認した。



リガで日本料理の試食会

ラトビア共和国駐在本誌記者　ヤン・チーホノフ（写真も）



日本料理の試食会が開かれたレストラン"タリン"の"赤の間"



▼試食会用に用意された酒の肴は約20品。

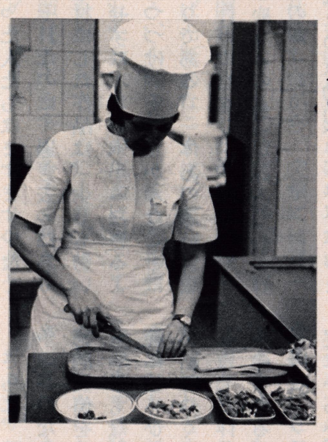
3月28日、ラトビア共和国（バルト海沿岸）の首都リガで、地元夕刊紙の主催による日本料理試食会が開かれた。試食会は、盛況で、会場のレストラン"タリン"は招かれたリガ市民一八〇人でいっぱいになった。参加させてもらえなかった残りの希望者は試食をした人の話を聞くことと、この種の試食会が今後も開かれるだろうと期待することで満足しなければならなかった。



レストランの職員に日本料理のことをたずねるアルフレッド・ルビクス・リガ市長（右）

リガ市民の日本料理への関心は、日本、特にもう10年以上前からリガの姉妹都市になっている神戸市への関心と同じように大きい。そしてこの初めての試食会の出席者の中には、洗練されたグルメやプロのコックだけでなく、ラトビアの有名な芸術家、ジャーナリスト、日本を訪れたことのある市民や、アルフレッド・ルビクス市長をはじめとするリガ市の職員たちがいたことも不思議ではない。

会場では日本の民族音楽が流され、ウエーターは日本から届けられた「神戸まつり」と日本語で染め抜いたはっぴを羽織って料理とその調理法を出席者に説明し、テーブルには早春の花を生けた小さな生け花が飾られて、日本的雰囲気は大いに盛り上がった。出席者はテーブルの上の刺し身、すし、巻きずし、野菜や魚の天ぷら、汁物、20品ほどの酒の肴を次々と賞味していった。これらのたくさんの料理からはいろいろな日本の薬味やしょう油の香りがただよっていた。日本酒はあいにくなくて、有名なリガの薬草酒バルザムなどの地酒だったが、その代わり食後にはいつものコーヒーではなく緑茶が出された。ナイフとフォークの代わりに木の箸を試みた勇敢な人たちがいて、会場は大いににわいた。試食する人はみな、主に外見で料理を選んでいたが、ある一点では誰もが同じ意見だつた。それはレストラン"タリン"のコック長ルタ・マセンスが調理した日本料理がまれに見る出来栄えだったということだ。



刺し身につまを添えるコック長のルタ・マセンス

ルタ・マセンスのことは本誌の昨年の20号でもご紹介したが、彼女は昨年秋の日ソ親善月間の時に日本を訪れ、ラトビア料理を披露した女性コック長である。

マセンスは語る。

「日本で私は日本料理のコツを物にしようと思っていました。でも覚える時間がほとんどありませんでした。日本に滞在した17日間に、神戸、大阪、静岡、広島その他の都市でラトビア料理の講習会を数多く行わなければなりませんでしたから。講習会は毎日2回に分けて行い、主婦、プロのコック、さまざまな年齢の料理好きな人たちが毎回60人も参加しました。静岡では大学の先生までやってきました。

日本の料理人との交流ではずい分得るものがありました。日本料理店では出された料理が一体何なのか一生懸命考えました。そのうちのいくつかはそれまで全く知らなかった物でした。私は自分の国の人に日本料理をごちそうしたくなりました。そのためにはこの目で見てきたものと、私が日本で買ってきたお料理の本を参考にしなければなりませんでした。ラトビアと日本は一万二〇〇〇km以上の距離がありますが、肉、野菜、鳥、たくさんの魚など、共通の食品がけっこうあります。腕のいいコックなら、数十種ぐらいの日本料理を調理することはそう難しくありません。これは私個人にとっても喜びでした」

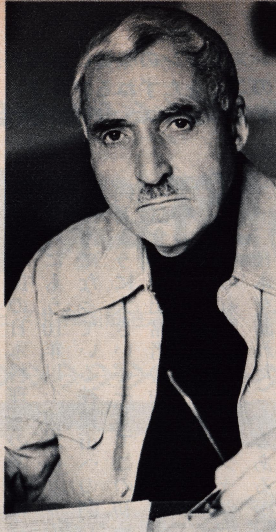


◀ウエーターのビルニス・アクスチンスは料理と調理法の説明をしてサービスに努めた。

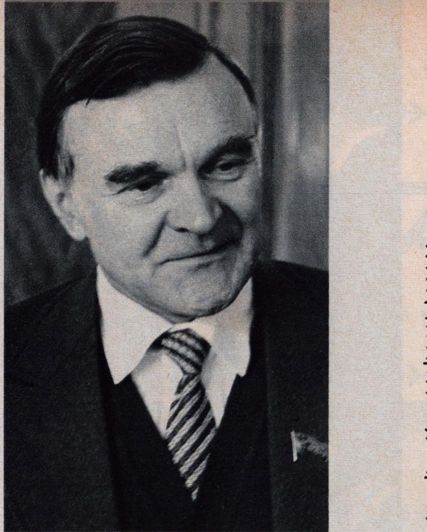
試食会は出席者の評判もよく、ルタ・マセンスの試みは幸先のいい出だしを切った。多くの人がメニューを記念に欲しがり、ラトビア語とロシア語に訳された日本料理の調理法の印刷物があっという間になくなった。リガに日本料理店を開きたいという希望も出された。それが実現するには、リガと神戸の友好関係がさらにもう一つ強まることが必要だろう。

現代ソ連の戦争文学

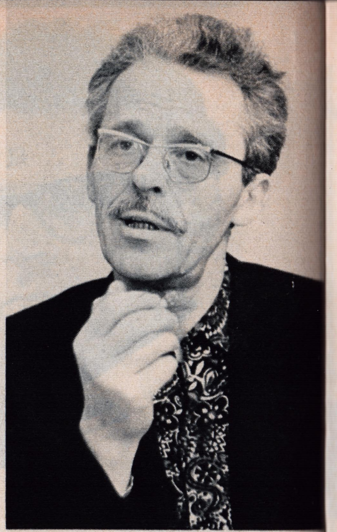
モスクワ大学教授、文学博士　アナトリー・ボチャーロフ



コンスタンチン・シーモノフ



ユーリー・ボンダレフ



ボリス・ワシリエフ



アレクサンドル・チャコフスキー



グリゴリー・バクラノフ

「戦後あたらしい世代が続々と生まれてくる。若さとはのんきなものだが、彼らものんきに暮らすだろう。教えてやらねばならない——どんな代償と引き換えに彼らのためにこの地上の生活が手に入れられたのかを」
——グリゴリー・バクラノフ（作家）

光陰は矢のごとしである……私たちのそばに、戦後生まれた人が増え、戦争が第一の、あるいは最も深刻な生活体験であった人たちはますます少なくなった。それなのに、過ぎ去ったあの戦争を題材にした作品は、少しも勢いと質を減ぜずに、川の水がみなぎるように増えつづけ、そのさかんなことは驚くばかりである。一体あの遠い過去のなにが作家の心をひきつけるのか。一体こういう本のどこが読者の心をひきつけるのか。

この流れの原動力、それはなんといっても民衆の思い出であり、民衆の癒しがたい痛みであり、曇ることのない誇りの感情であり、また彼らが体験したことのすべて、彼らが成しとげたことのすべてを完全に認識したいという民衆の熱望なのである。

また、現在切実な多くの問題の解答を戦争の出来事のなかから見いだし、時代のつながりと継承性を見たいという現代の要求も、この流れの原動力である。ひとりの人間であれ、国民であれ、明日のための結論を昨日から引き出さずに、きょうだけによって生きることはできない。

さらに、戦争に参加した旧将兵が戦争の炎のなかで試されたいろいろな道徳的価値を子供や孫へ伝えたいというもっともな気持ちと、ヒロイックな模範に強くひかれる未成年世代の気持ちが結びつく両方向からのプロセスも、こうした作品を生む原動力になっているのである。

今日、ソ連の戦争文学（散文）には実にいろいろなスタイルと傾向の作家がひとつになって入っている。この小論のなかで私は先の戦争を題材にしたごく最近の作品のなかでもっとも特徴のあるものについて、話したいと思う。

中編小説『サーシカ』は大祖国戦争に参戦したビャチェスラフ・コンドラチエフが初めて発表した作品だ。もちろん、60歳近くになっていてポスター画家が本職のコンドラチエフをいまさら若い散文作家に数えるのは無理だが、自分が体験したことを語りたいという彼の気持ちは実によく分かる。民衆の痛み、民衆の誇り、民衆の思い出は必然的に個々のひとりの人間の痛み、誇り、思い出のなかに現れてくるものなのだ。

中編小説『サーシカ』は戦場の前線の現実のデテールを実に正直に、実に正確に描写している。この小説のなかでコンドラチエフは、一九四二年冬のもっとも劇的で凄惨な会戦のひとつを背景として、ひとりの兵士、自分の義務を献身的に成しとげる心がまえと、目立たないけれども正真正銘のヒロイズムをもったひとりの兵士の鋭く真実味のあふれる人物像をつくり出した。

小隊長か中隊長の、ひとりの中尉も恐らくこれに劣らず目をひく戦場の人間像である。19歳の指揮官たちは、進軍、ざん壕、寒さ、睡眠不足など部下の兵士たちが耐えなければならないことはみな体験しながら、突撃には真っ先に立ちあがり、戦死した銃手に代わって機関銃を撃ち、防御戦を指揮した。いちばん肝心なことは、彼らが戦闘の帰すう、小隊の状況、彼らの指揮下に置かれた兵士たちの生命に対して重い責任を担ったということだ。

戦争を題材とする多くのすぐれた本を書いたグリゴリー・バクラノフがその中編小説『いつまでも19歳』の主人公に描いたのは、このような、勇敢で、間違いなく道徳的で、市民としての義務と士官としての名誉に忠実な、ひとりの若者だった。

戦後40年もたっていて、この間に当のバクラノフや彼と同じ年代の作家たち（たとえばユーリー・ボンダレフの中編小説『熱い雪』）が年若い、〝純真無垢な〟中尉という人間像をおびただしく書いているのを見ながら、バクラノフの地方的、室内楽的、私小説的とさえ言いたいような中編小説を挙げるのはかなり勇気が要る。この中編の筋は簡単すぎるほど簡単である。新米の砲兵中尉が前線に到着する。そして最初の戦闘で負傷する。治療のため後方の病院に入院し、彼はかりそめの、胸のときめくような、幸せな恋を経験する。退院して砲兵陣地へ戻った彼はまた負傷するが、こんどは病院へ向かう途中、一群の敵兵と遭遇して戦い、戦死してしまう。

初めての戦闘も、初恋も、英雄的な最期も、ここに書かれていることはなにもかもこれまでの戦争小説にのこらず書かれたことばかりのような気がする。けれども、誠実で純粋で真実味にあふれた小説は、ひとりひとりの人間の運命や体験が決して同じでないことを明らかにして、常に読む者の心を揺さぶるのである。

アレクサンドル・チャコフスキーの叙事詩的長編小説『封鎖』は戦時下のレニングラードの恐ろしい運命を題材にしている。敵軍の封鎖下に明け暮れた九〇〇日間の市民たちの信じられないほど苦しい生き方を語ることによって、チャコフスキーは今日のことにも思いをめぐらせている。しかし、作者の主なねらいは、敵が市のすぐそばまでひしひしと押し寄せてきたにもかかわらず、レニングラードの人々がどのようにして、そして、なぜ持ちこたえ、自分たちの都を敵の手に渡さなかったか、ということを読者に説明することに置かれている。

最近現れた戦争文学のなかでもっとも力強い作品のひとつは、戦時中パルチザンとして戦ったベロルシアの散文作家アレクサンドル・アダモビチの中編小説『懲罰隊』である。一〇〇パーセントノンフィクションの資料にもとづいたこの小説は、住民を皆殺しにし村々をまるごと焼きはらったファシストの部隊の物語である。作者は、下は黙々と命令を実行して子供と婦人に機関銃弾の雨を浴びせた平の兵士から、上は現在の集団虐殺が人類の未来の生活にとって利益があるなどと「頭のなかで」考えて自分たちの行為をなんとか正当化しようとした大隊長にいたるまで、これら実在した冷血漢、ひとでなしどもの心理の世界を復元して読者に示しているように見える。

アダモビチは、一九四一年成功の絶頂に立っていて、いきおい厚かましくまた得意になって持論の反人類的、人種差別的、冷血漢的思想を述べたてていたヒトラーのもの思いの内容をこの本のなかに取り入れている。こうして、この怪物じみた機構を動かしはじめた自己陶酔的な蛮行の教唆者（ヒトラー）から、その命令を執行した平の兵士にいたる鎖のつながりが、ボルカという皆殺しにされ廃虚となったひとつの村を舞台にして繰りひろげられるのである。

この小説を読むのは辛く、ほとんど耐えがたいほどだが、煉獄を通るように、誰もがこの小説を一度読んでおく必要があるだろう。同じようなことが起こってほしくなかったら、そのことを忘れてはならないのである。

コンスタンチン・シーモノフ（有名な三部作『生ける者と死せる者』など

「今日のソ連邦」昭和60年６月15日号(第28巻・第12号・通巻633号)付録

☆すべての国の国民、議会、政府へ

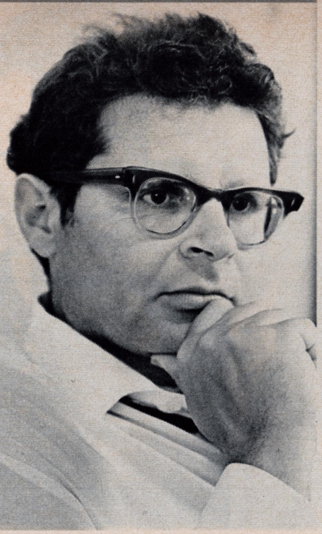
――第２次世界大戦終結40周年にあたってのソ連共産党中央委員会、ソ連最高会議幹部会、ソ連閣僚会議の呼びかけ（1985年５月10日）

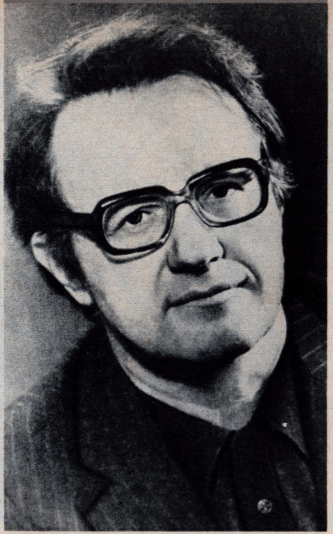
☆ソ連国民の不滅の偉業

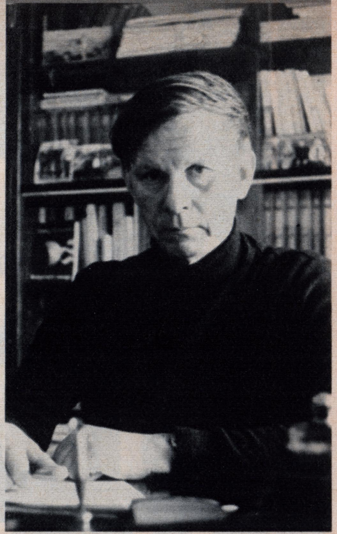
――クレムリン大会宮殿での「1941―1945年の大祖国戦争におけるソ連国民の勝利40周年記念式典」におけるM・S・ゴルバチョフ・ソ連共産党中央委員会書記長の報告（1985年５月８日）

☆タス通信記者の質問に対するS・L・ソコロフ・ソ連国防相・ソ連邦元帥の回答

「今日のソ連邦」1985年第12号付録


ビタリー・ショーミン


アレクサンドル・アダモビチ


ワシーリ・ブイコフ

の作者）の戦陣日記にもとづく本『戦いのさまざまな日々』は、戦場の苦しい日々、楽しい日々、教訓的な日々を描き出して、やはり複雑な感情を呼び起こす。教訓的と言えば、シーモノフが従軍記者時代の日記に、その後明らかになった事実や、その後の証言や、現在の自分の心境をまじえて書いていることで恐らくその意味はさらに深まっていると思う。

この本の初版の前書きにシーモノフはこう書いている。

「この本を出版しようとしたとき、私は読者がこれから読もうとすることは、あの戦時下の幾年かのあいだに私が書いたこと、もしくは現在私が回想していることだということを読者に分からせようと努めた。この本はノンフィクションで、架空の人物はひとりも出てこない。そして、私が差しつかえないと考えた箇所ではどこでも実名を使った」

戦いの４年間を再現したこの本の価値は、この作家の目が鋭いことだけでなく、英知にあふれている点に、人間の存在の意味とかかわりのあるいくつかの問題の奥深い核心に切り込むことに成功した点にもあるように思われる。ひとりひとりの人間の運命というプリズムを通して戦争を見る作者の目ははげしい内面的闘争、意志と恐怖、理性と自己保存本能の相克を読者に伝えて、運命が急転するときに現れるあの人間の道徳的潜在力を読者が認識することを助けてくれる。

すぐれた作家のひとりで、やはり前線で戦った軍人であったワシーリ・ブイコフは中編小説『ソートニコフ』のなかの主人公であるパルチザンの偵察兵たちをまっしぐらに死の瀬戸際へ連れていく。作者はこの極限状態のなかで、主人公たちが人間のもっているあらゆる精神的なものを信じているかどうか、自分自身と自分以外の人々に対する自分の責任を自覚する能力があるかどうかを試してみようとしたのである。

戦時中の民衆の生き方の奥底に内在する法則を取り扱った散文文学は最近ますます厳然とした存在になってきた。こういう傾向がもっともはっきり現れたのが、エブゲニー・ノーソフの中編小説『ウスビャティの鉄かぶとをかぶった男たち』であろう。この小説は条件つきだが「戦場が出ない戦争小説」と呼ぶことができる。

このノーソフの小説は、中部ロシアの村ウスビャティで戦争が始まってから最初の10日間のこと、お祭りのように幸せな草刈り風景から始まり、その最中に戦争が始まったという暗い知らせが突然農民に落ちかかってきて、やがて総動員で村中の男が残らず出征してしまうまでの10日間の話である。

戦争をテーマにしたごく最近の作品もたくさん挙げることができる。たとえば、有名な作家アナトリー・ルイバコフの長編小説『重い砂』は、ファシスト・ドイツ軍の侵入という非情な、むごたらしい機械に巻きこまれた地方のユダヤ人一家の運命を描いている。また夭折したビタリー・ショーミンの『OSTの記章』は、周囲の一切のものが人間らしくなくなる、無慈悲になれと言っているような状況のなかで、ひとりひとりの人間性をむごたらしい形で試したファシスト・ドイツの強制収容所の囚人たちの話だ。また『朝焼けは静かなれど……』という本で有名なボリス・ワシリエフの中編小説『遭遇戦』は戦争の一番最後の戦闘で戦死した兵士たちを描いている。

戦後のソ連の戦争文学が単なるテーマでなくなってから久しい。すでにそれは、現代ソビエト文学の多くの思想的・美学的問題が特殊な実生活の題材にもとづいて解答を見いだす地盤そのものになっているのである。

大祖国戦争を主題にした本は、記念碑でも墓碑銘でもない。これらの本のなかには、過去の教訓のほかに、将来への教訓もあるのだ。

☆　☆　☆

〝研究〟は一九七二年のＡＢＭ制限条約で容認されているかのようにいうワシントンの口実は、説得力がない。この条約の第５条は宇宙発射のＡＢＭシステムと構成要素の建設、実験、配備を禁止している。ところが米国で行われている宇宙配備の諸要素を持つＡＢＭシステムの開発を目的としたいわゆる〝研究〟は、今ではもう科学研究の枠を越えているのだ。

攻撃用宇宙兵器のある一定の実験用サンプル――各種レーザー兵器、電磁砲、迎撃ミサイル、衛星迎撃システムが開発されつつある。これらは皆、宇宙ミサイル迎撃システム（ＳＢＡＭＳ）の構成要素となるものであり、〝最終システムのキーワースの表現によれば、〝最終システムのれんが〟というべきものである。これらの〝れんが〟を開発する研究作業は、一九七二年の条約にずばり違反しているので、中止または禁止されなければならない。

研究活動の終了の暁、米国は大規模な宇宙ミサイル迎撃システム展開をやめることができるかのようにいっているが、この保証は不真面目なものだ。10年間の予定研究費六〇〇億ドルが、攻撃用宇宙兵器の開発が可能か否かの理論問題を解決するためにだけ必要などとはとても考えられない。Ｃ・ワインバーガーは本年１月13日のＣＢＳ放送とのインタビューで「私は研究段階でも、展開段階でも戦略防衛をやめることは不可能だと考えている」と本音をはいた。これにはコメントなど無用である。

さてソ連における宇宙分野の研究について述べよう。わが国では軍事分野のものも含めて科学研究活動が行われている。しかし、それは攻撃用宇宙兵器の開発を目的としたものではなく、早期警戒、偵察、通信、航行の宇宙システムを改良するためのものだ。われわれは攻撃用宇宙兵器や国の領土のミサイル迎撃防衛システムをつくらない。ソ連は一九七二年の無期限のＡＢＭ制限条約を堅持している。

問い 米国の宇宙ミサイル迎撃システム開発計画は、あなたが説明されたとおり、報復を受けずに対ソ核攻撃をすることをあてこんだものだが、ではソ連はどのような性格の対抗措置をとるのか？

答え 米国が宇宙の軍事化を始め、それによって現在の軍事・戦略バランスが崩れれば、ソ連としては、均衡回復のために対抗措置をとる以外に道はない。そしてこの措置は、防御兵器の分野でも、攻撃兵器の分野でもとられるかもしれない。もちろんソ連は、ワシントンの為政者たちがソ連にとらせようとしている手段ではなくて、ソ連の防衛力の利益に最も合致する手段をとりうる。われわれの措置が、ソ連とその同盟諸国に対してつくられる恐れのある脅威に対応するものになることは間違いない。このことはつよく断言しておく必要がある。

宇宙の軍事化を狙う米国の方針は、世界の軍事・政治情勢に極めて否定的な影響を与え、核軍備の削減問題の解決を、不可能にするとは言わないまでも、困難にする。攻撃用宇宙兵器の開発は、米国自身の安全はもちろん、その同盟諸国の安全の低下となってはね返ってくるだろうし、必ずはね返ってくるに違いない。〝スターウォーズ〟計画の主唱者たちやこの挑発的計画に加担したがっている者たちは、こういう羽目になることを忘れるべきではない。

ソ連は、最高首脳を含めて何度も声明してきたことだが、米国やＮＡＴＯ諸国に対する一方的優位なるものの獲得をめざしていない。われわれに優位など必要はない。なぜならわれわれはこれらの国々を脅かすつもりはないし、自分の意思を押し付ける気などなく、これらの国と平和のうちに暮らし、正常で良好な関係を維持することを望んでいるからだ。われわれの目的は、軍拡競争の停止、世界全体の核兵器の完全廃絶である。

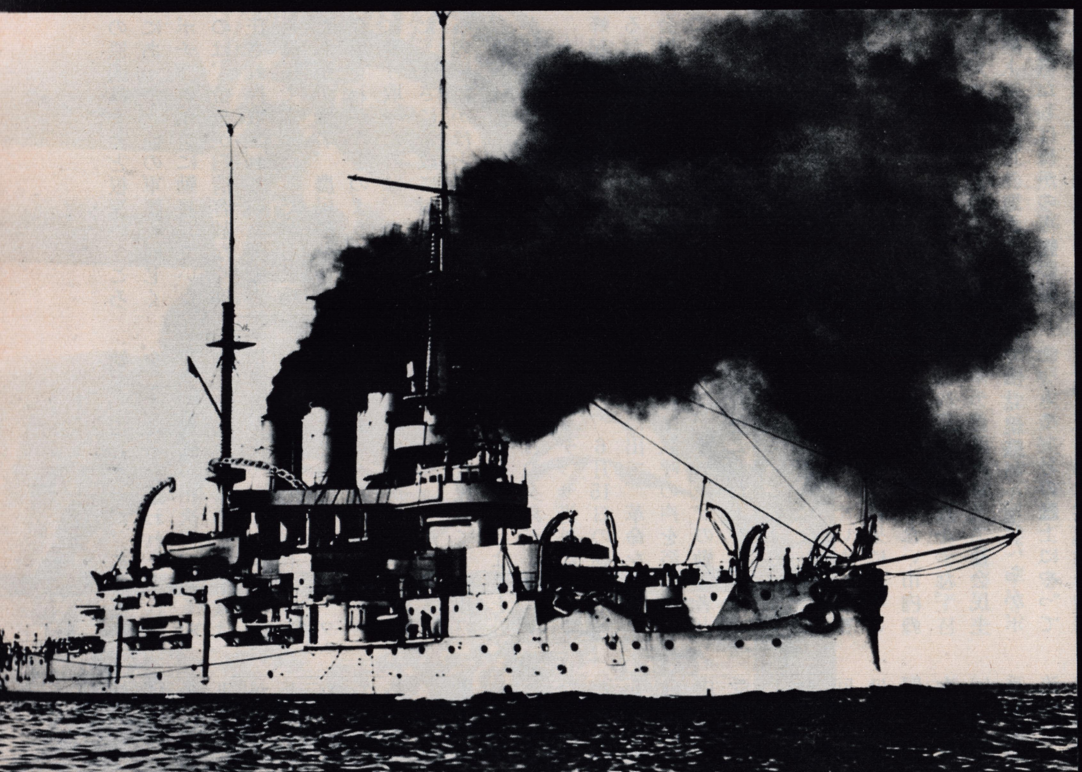
米国がジュネーブ交渉におけるソ連の立場を理解し、相互性で答えることを望みたい。米国は、ワシントンがもくろむ軍事計画に大きくドアを開く、ソ連が到底受けいれられないような協定を、ソ連に押し付けることを断念しなければならない。Ｍ・Ｓ・ゴルバチョフ・ソ連共産党中央委書記長が述べたように、「われわれは米国政府に対し、ソ米両国の政策路線が敵意と対抗ではなく、相互理解の探求や平和的発展をめざしていることが、万人に――ソ米両国や他の国々にわかるように、事態を運ぶことを提案している」。

（プラウダ、一九八五年５月６日号）

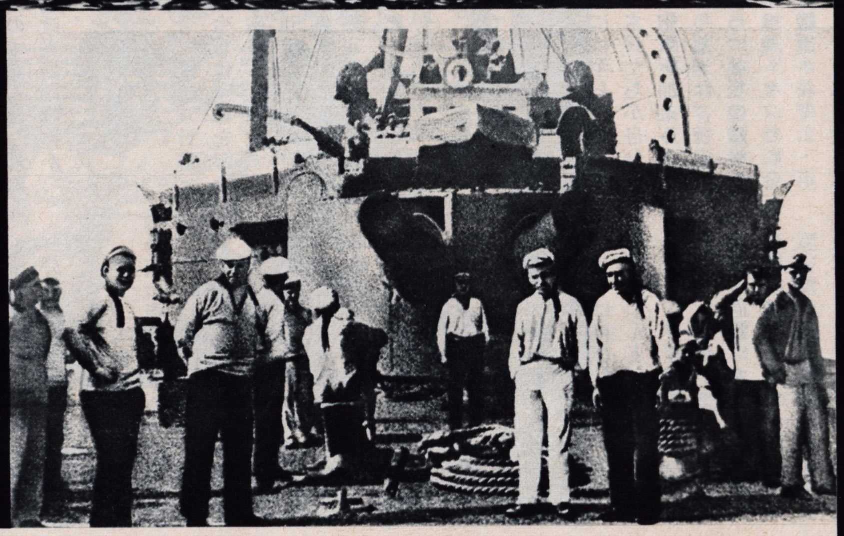
蜂起した戦艦ポチョムキン

――蜂起80周年に寄せて

本誌評論員　パーベル・シャリコフ



▲黒海を進む戦艦ポチョムキン号（一九〇五年）



ポチョムキン号の甲板上の蜂起した水兵

いまから80年前の、一九〇五年６月14日に黒海で起こった事件は、ロシアの革命運動史に深刻な足跡を残した。当時の最新鋭の軍艦で、ロシア海軍の誇りであった戦艦クニャージ・ポチョムキン・タブリチェスキー（クリミア公ポチョムキン）号の乗組員が帝政に抗して蜂起し、その頃全国に吹き荒れていた第１次革命（一九〇五―一九〇七年）の側へ移ったのである。水兵たちは士官たちを逮捕し、自分たちが選出した艦内委員会の指導下で10日以上にわたって艦を支配し、ロシア史上はじめて、専制政治の砦とも言うべき大型軍艦を、人民の自由をめざす闘いの砦に変えた。

革命的蜂起のきっかけとなったのは、質の悪い食事に対する水兵たちの不満、乗組員を犠牲にして自分の懐を肥やしていた士官たちの惨忍さと公金横領であったが、本当

の原因はもっと根深いところにあった。他の軍艦と同じくポチョムキンに勤務していたのは、帝政から情容赦なく抑圧され搾取されていた労働者と農民であった。だから水兵たちが労働者、農民の革命的登場をわがことのように身近に受け取ったのは、当然だった。まさに帝政に対する憎しみの感情がほとばしり出るには、ほんのちょっとしたきっかけさえあれば十分だった。

なぜこのポチョムキン号で蜂起が起こったのかを理解するためには、この軍艦では社会民主主義的革命組織が活発に行動していたという事実を念頭に置かねばならない。水兵たちの闘争を指導していたのはロシア社会民主労働党員の水兵グリゴリー・ワクレンチュクと下士官のアファナシー・マチュシェンコだった。

ポチョムキン号のボリシェビキ（ロシア社会民主労働党のレーニン派）の地下組織の指導者たちはほかの軍艦の党員たちと連絡をとり合っていた。彼らは一緒になって黒海艦隊全艦の蜂起計画を作成した。ところが、偶然なことから、決めておいた日取りより早くポチョムキン号の蜂起が始まってしまった。革命運動をしていると疑われた水兵の逮捕と退艦が相次ぎ、多くの艦の蜂起地下本部と党組織は指導者を失った。

事実上孤立化したポチョムキン号は蜂起第一日目に、ワクレンチュクの提案でセバストーポリ地区からオデッサへ向かい、オデッサ市でスト中の労働者と合流して、帝政打倒の共同闘争を続けようとした。その日の夕刻ポチョムキン号はオデッサ港外に錨を下ろした。6月15日の朝全市民が海岸に出て、革命を起こした軍艦に歓呼の声を浴びせた。当局は、オデッサの勤労者と、蜂起を起こしたポチョムキンの水兵たちがこのように団結するとは予想もしなかったので、あわてふためいた。警察は火に油を注ぐ結果になることを恐れて、だいたい市内の通りに姿を現さなかった。

オデッサのロシア社会民主労働党組織の代表たちがポチョムキン号の艦上にやってきた。彼らと水兵たちの合同会議で、スト中の労働者を支援するためにポチョムキン号の水兵の陸戦隊を上陸させるべきか、という問題が審議された。しかし、統一した意見が採択されず、陸戦隊の上陸は結局行われなかった。その後の事態から明らかになったように、この点で重大な誤りが犯されたのである。これによって、帝政当局は動揺から立ち直って、蜂起した水兵たちとの闘いに全力をあげて立ち向かうことができた。

皇帝の命令で蜂起4日目、黒海艦隊司令官は革命を起こした軍艦を砲撃して撃沈するために、2回にわたって強力な艦隊——第1回は戦艦3隻と駆逐艦4隻、第2回は戦艦5隻と駆逐艦6隻——を差し向けた。ポチョムキン号の艦内委員会はこのことを知ると、受けて立って戦うことに決定した。ポチョムキン号は艦隊の正面に出た。ところが、2回とも戦闘には至らなかった。ほかの艦の水兵たちが自分の同志たちに砲撃を加えることを断ったからだった。

その頃さらに3隻の艦艇の乗組員がポチョムキン号に合流した。戦艦ゲオルギー・ポベドノーセツ号、水雷艇二六七号、病院船ベーハ号の3隻である。これらが一つになると、十分大きく、威力のある勢力になった。しかし、乗組員たちは結局、統一行動をとれず、一本化した闘争方針を打ち出すことができなかった。力と権威のある指導部を欠いていたことが影響したのである。結果として、ポチョムキン号はまたもや独りで闘わねばならないことになった。

ポチョムキン号の乗組員と蜂起の指導者たちを待ちかまえていたのは、食料品、飲料水、燃料の確保という難問題であった。こういったものを艦隊の基地で残らず入手することなど出来ない話だった。事態に解決の見込みがないことを見てとった艦内委員会は、艦をルーマニア沿岸へ向けることにしたが、ここでもルーマニア当局はロシアの軍艦に食糧その他を供給することを拒絶した。そこで、ポチョムキン号は再び針路を、祖国の沿岸、こんどはフェオドシア（クリミア半島の西）へ向けた。

この危機にあたって乗組員の態度は驚くばかり毅然としていた。食べるものもなく、淡水も十分でなかった。しかし、革命運動における自分たちの役割の自覚が、ポチョムキン号の乗組員に力を与えた。後年アファナシー・マチュシェンコは、われわれは「このような砦を放棄するくらいなら、死んだ方がましだ」と心に決めた、と書いている。

フェオドシアの地元当局はポチョムキン号に食糧を供給してくれたが、飲料水と石炭はくれなかった。黒海艦隊のほかの艦の支援がなかったので、ポチョムキン号は止むなくルーマニア領海へ逃れて、ルーマニア当局に降伏することになった。

6月24日、ポチョムキン号はコンスタンツァ港外に投錨した。ルーマニア当局は同艦の水兵たちに身柄の安全と自由を保証した。下船すると、水兵たちはルーマニアのパスポートをもらってルーマニア市民となった。乗組員のなかには後になってスイス、米国、オーストラリアその他の国へ亡命した者もいた。祖国へ戻った乗組員には警察の惨忍な制裁と投獄と流刑が待ちうけていた。アファナシー・マチュシェンコは一九〇七年不法入国してロシアへ帰ったが、秘密警察に捕まり、セバストーポリ監獄で銃殺された。

今日まで残っているこの蜂起の記録は、ポチョムキン号の蜂起の政治目的を物語っている。欧州のすべての列強に宛てた呼びかけのなかでポチョムキン号の水兵たちはこう書いている。


セルゲイ・エイゼンシュテイン監督の映画『戦艦ポチョムキン号』から


映画『戦艦ポチョムキン』の有名なオデッサの階段のシーン

「艦隊の戦艦クニャージ・ポチョムキン・タブリチェスキー号の乗組員はロシアの専制政治に対し決然として闘いを挑んだ。われわれはこのことを欧州のすべての政府に通報するとともに、われわれが、黒海を航行するすべての外国船舶と、黒海沿岸のすべての外国の港に完全な不可侵を保証することを自らの義務と考える」

別の呼びかけには革命的水兵たちが掲げた実際的な政治的要求が述べられている。

「われわれは、直接、平等、秘密の普通選挙法に基づく全人民の憲法制定議会を必ず召集するよう要求する……われわれは、すべての国と人民の誠実にして勤労する市民が自由のためのわれわれの偉大な闘いに熱烈な共感をもって応えてくれるものと、深く確信する」

蜂起した戦艦の偉業は、皇帝の軍隊と艦隊、さらには全国の革命闘争に強い影響を及ぼし、ロシア艦隊の各艦艇に武装行動の波が押し寄せた。

一九〇五年11月13日、黒海で巡洋艦オチャコフ号の水兵の蜂起が起こった。戦艦パンテレイモン号、数隻の水雷艇、若干の沿岸警備艇の乗組員がオチャコフ号に合流した。蜂起を指導したのは勇敢な革命家ピョートル・シュミット中尉だった。一九〇六年にはバルト海上で巡洋艦パーミャチ・アゾーワ号に蜂起が起こり、同じ年のうちにクロンシュタット、リバウ（現在のリエパヤ市）、ウラジオストクなどの港で蜂起の火が噴いた。

レーニンは戦艦ポチョムキンの蜂起の意義を高く評価し、次のように書いた。

「オデッサの諸事件の大きな意義は、ここではじめてツァーリズムの兵力の大きな部分が——一隻の戦艦がそっくり——公然と革命の側にうつったという、まさにその点にある。政府はこの事件を人民にかくし、水兵の蜂起をそもそものはじめに圧殺するために、気ちがいじみた努力と、ありとあらゆる術策をもちいた。しかし、なにをやっても役にたたなかった」（レーニン全集、大月書店版、第8巻、五七〇ページ）

ポチョムキン号の革命的偉業はソビエトの多くの芸術作品のなかに形象化されている。それを題材にしていくつかの本が書かれ、劇がつくられた。セルゲイ・エイゼンシュテインの映画『戦艦ポチョムキン』は世界中で上映され、時代と民族を超越した最もすぐれた映画の一つとされている。

文化トピックス

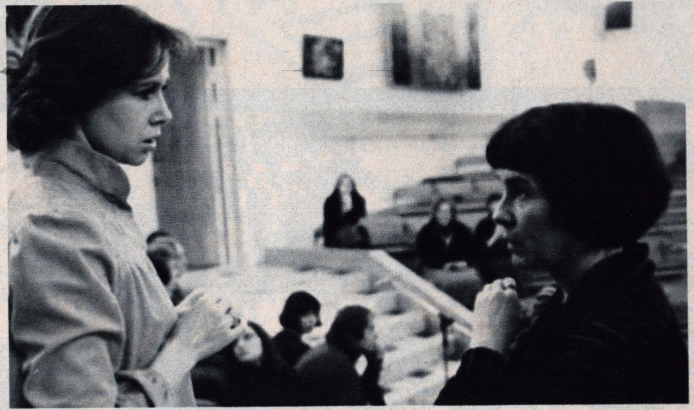
タチヤナ・リャズギナの華麗なステージ

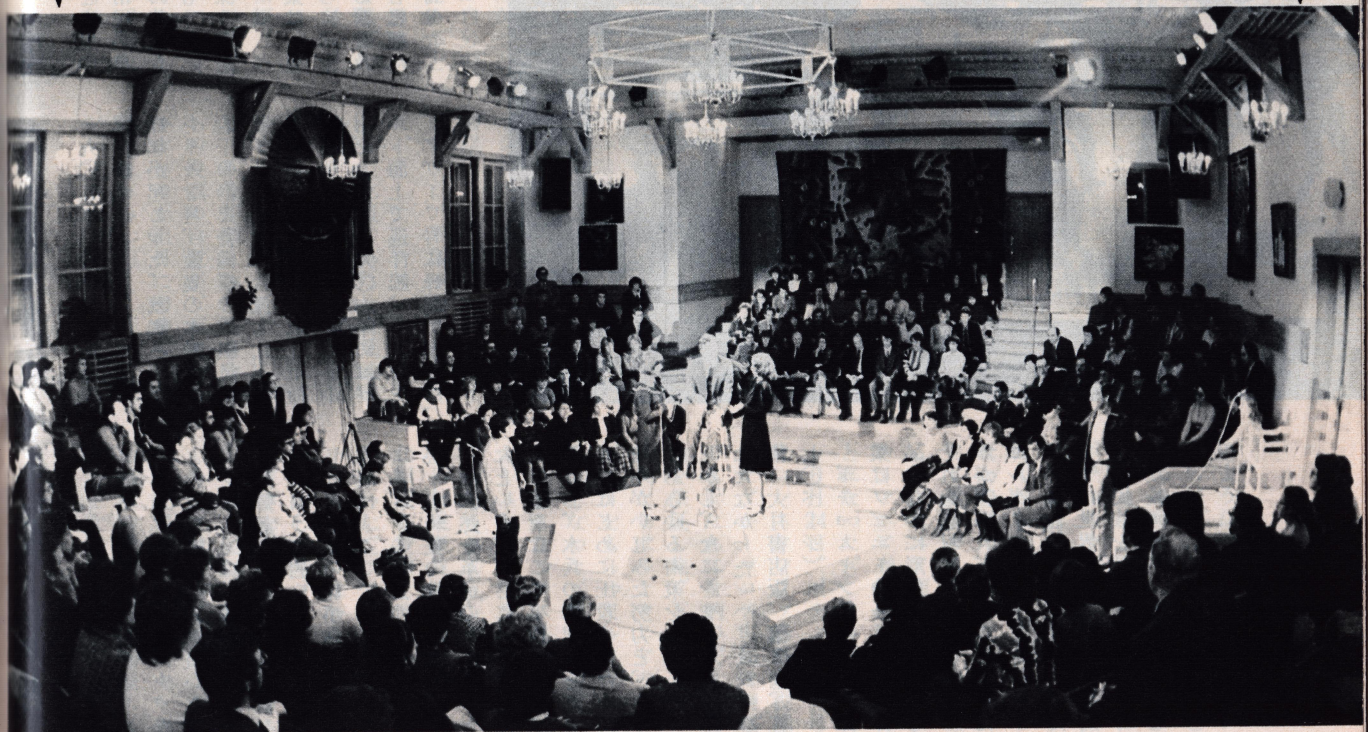
肉体のパフォーマンスは世界最古の芸術の一つで、各時代のさまざまの文献に"骨なし人間"や"蛇女"に関する記述が見られる。これは特別に体の柔らかい人のことだ。タチヤナもこの種の人間で、舞台では目まぐるしく体を曲げ、回転させ、その肉体の極限の表現力を駆使して舞う。だがアクロバット＝バレリーナのタチヤナが目ざすのは柔軟さの誇示ではなく芸術的形象の創造である。その所作の一つひとつが音楽の求めに応じたものだ。



球形の実験劇場

3年前モスクワに出来た実験劇場"スフェーラ"（球形）は大評判。六角形の中央ステージを真ん中に、周囲を観客席とサイド・ステージが四つ、階段五つが取り囲むユニークな構造で、E・エランスカヤ首席演出家は、これが俳優と観客を一体化させる、と言う。専属俳優だけではなく有名俳優の客演も多い。写真右はけい古中のエランスカヤ（右）と女優のE・シーモノワ。下はステージとホール。







小径を彩る木彫

モスクワの並木道や公園は市民が愛するいこいの場だ。市の北端にある森林公園"ロシヌイ・オストロフ"（ヘラジカの島）公園はモスクワに昔からある公園の一つ。その公園の小径がビクトル・クルグロフ制作の作品で飾られるようになり、子どもはメルヘンの世界にひたり、大人は彫刻家の尽きぬ幻想と力量に舌を巻く。写真はアトリエのクルグロフ。



アディゲ古墳の秘宝

モスクワの国立東洋諸民族芸術博物館に、1981年、物質文化・古代芸術史科が開設された。各種の作業のほかに、アディゲ自治州（ソ連欧州南部、クラスノダル地方）の古代文明の遺跡発掘もこの科の職員の仕事だ。ここ3年間に紀元前3000年紀から紀元14—15世紀末までのさまざまの時代の古墳35ヵ所が調査された。鉄器時代の三つの墓地から紀元前8—9世紀の約300の埋葬品が発見された。紀元前2000年紀末の定住地の発掘も開始された。

この4月、同博物館で「アディゲ古墳の秘宝」展が開催され、考古学的に貴重な出土品が展示された。中でも紀元前4世紀に作られた翼のある天馬ペガサスの形をした儀式用の金器（写真）は逸品中の逸品。古代の名工が残したこの作品はソ連内外で今までに発掘された遺宝の中でも類のないユニークなものだ。

第12回世界青年学生祭へ向けて

フェスティバルの討論会と文化プログラム

本誌記者　アンドレイ・ロスクトフ



3月28日から5日間にわたってモスクワで開かれた国際準備委員会第4回会議

3月末、第12回世界青年学生祭の国際準備委員会第4回会議が開かれ、一二六カ国の国内準備委員会と約一〇〇の地域、国際青年学生組織の代表が5日間にわたって討議した結果、第12回世界青年学生祭のプログラムなどが採択された。

さて、第12回青年学生祭の内容、行事は具体的にはどうなるのか？

8日間の会期中、開会日（7月27日）と閉会日（8月3日）を除く5日間は、⑴平和、核戦争防止、軍縮をめざす青年と学生　⑵反帝連帯のために　⑶自分たちの権利のために　⑷発展と新経済秩序のために　⑸安全と協力のために、というようにそれぞれテーマをもつことになった（もう一日は主催国であるソ連の日になっている）。

こういった毎日のテーマをめぐる基本的な討論は国際センターで行われる。今回の青年学生祭の国際センターは15もあり、これまでのどの青年祭よりずっと多い（前回一九七八年のハバナの青年祭は国際センターが五つだった）。このことだけでも現代の青年の関心の的になっている問題の範囲の広さが分かる。対ファシズム戦勝40周年でもあり、国際青年年でもある一九八五年の最重要イベントを青年祭のプログラムのなかに入れようと青年が強く望んだことも、国際センターの数が多くなった理由のひとつだ。国際センターの一部は直接対ファシズム戦勝40周年と国際青年年をテーマにしている。



第4回会議で報告する常任委員会のジャン＝クロード・ケネディ調整担当書記（左）

各センターの討論には最高五〇〇〇人が参加する予定だが、平和と軍縮のセンターの参加者が一番多くなることは確実だ。このセンターの公開討論では全面的完全軍縮のためにたたかう青年、宇宙の軍事化反対、非核地帯創設のために、などの問題が審議される。公開討論のテーマに入りきれない問題は〝円卓会議〟の形で討論しても差し支えない。平和と軍縮のセンターでこの種の問題は七つある。たとえば、軍事・政治ブロック化の問題、軍事ブロックの同時解消問題、信仰をもつ者と無神論者が地上の生命を守るために共同行動をとる方法と可能性についての問題などがそうだ。さらに各センターごとにテーマにそった行事がおこなわれる。平和と軍縮のセンターでは、さまざまな反戦運動、国際的および各国別の平和行進の参加者の会合、広島・長崎の被爆者との会合が予定されている。そのほか、センターのテーマにそった展覧会、文化行事が行われる。

結局、公開討論会での討論、〝円卓会議〟、テーマ別会合、文化行事というのが各センターの活動の構成内容になる。

では、国際準備委員会が定めた内容からはみ出す問題に強い関心をもっている青年はどうなるか。そういう青年のためには、〝自由な演壇〟というものを設け、だれでもこの演壇を中心に独自の〝討論センター〟や〝円卓会議〟を催してよいことになっている。

青年が解決しようと強く望んでいる現代世界の問題は実に複雑であり、また切迫したものであるにしても、世界青年学生祭は単なる政治的な会合ではなく、お祭りなのである。40年前初めて計画されたた時もお祭り的な性格をもっていたし、今日でもそれに変わりはない。

プログラムのお祭りの部分、つまり文化行事の内容はいま大体わかっているが、しかし実際にはもっともっと内容が充実したものになる。たとえば、各国の代表団はそれぞれ民族色あふれるクラブをもち、これが青年祭の独特な文化センターになる。ソ連の青年祭準備委員会はすでにこの種のクラブ用にモスクワで一番よいホールを割り当てずみである。各国の代表団は自国のすぐれた若い音楽家や芸能人を代表団に組み入れているから、期待は十分もてる。

若い科学者、芸術家、スポーツマン、観光旅行者、児童団体の代表たちもそれぞれ独自の国際センターをもつことになっている（これほど大規模な児童向けの行事を催すのは今回のモスクワ青年祭が初めてだ）。たとえば科学・芸術センターでは、若い俳優、音楽家、サーカス芸人、さらに奇術師の舞台が10以上開かれるし、また若い工業労働者、農業従事者、サービス業従事者、学生など職業別の青年の会合も行われる。

モスクワ川のほとりのゴーリキー公園の構内には〝芸術公園〟が置かれる。この〝芸術公園〟はソ連を構成する共和国の数の15のコンプレックスから成っていて、それぞれがお国ぶりの伝統にのっとった外観をそなえる。ここを訪れる外国のお客さんたちはソ連を構成するいろいろな民族の芸術、しきたり、風俗を知り、土産物を買い、お国料理を味わうことができる。

ところで、最後になったが、一体だれがモスクワ青年学生祭に参加するのか？　たとえば、昨年末頃モスクワ青年祭の直前にはほぼ一二〇カ国の青年団体がそれぞれ自国の全国準備委員会をつくるだろうという予想が出ていた。しかし、最近になって、この予想は低すぎることが分かった。国際準備委員会の第4回会議に集まった青年団体、学生団体の代表は実に一二六カ国、二〇〇〇人以上にのぼった。いまソ連の準備委員会では、青年祭の前景気から見て、ほぼ一五〇カ国から青年代表や招待客、見物のツーリストなど約四万人が参加するものと考えている。

善隣強化の重要な要因

——第2回ソ日極東・北海道友好交流会議に寄せて

ソ日協会事務局長 アレクサンドル・コロマク



昨年4月ハバロフスク市で第1回ソ日極東・北海道友好交流会議が開かれてから早くも1年たった。会議は大成功を収め、双方の評価によれば、地域交流の発展計画に重要な役割を果たしただけでなく、ソ日両国の民間人間の関係全般の拡大にも好影響を及ぼした。第1回会議の共同コミュニケの中で出



上　スケジュールの詰めを行う第2回ソ日極東・北海道友好交流会議のソ日双方の実行委員（ソ連対外友好・文化交流団体連合会で）。

右　モスクワの打ち合わせ会議であいさつする池島信吉・日本側実行委員長

北海道
ХОККАЙДО'85

シンボルマークの説明

——日本側の日ソ極東・北海道友好交流会議実行委員会の文書から

《第2回日ソ極東・北海道友好交流会議のシンボルマークは、全体として安定した日ソ関係と相互理解にもとづく両国民の今後一層の協力・発展を表現しています。

肩をならべる「日の丸」と「ソ連邦国旗」は、極東においてもっとも近接する日ソ両国の善隣・友好を意味し、国際社会のなかでの共通の目標にむかって途絶えることのない協力関係を表わしています。

その下の取り合う手と手は、あらゆる分野における積極的な交流を意味するとともに、両国民の平和な発展を約束する象徴となっています。

このデザインは、心のふれあいを表わすハートを型取ったものであり、また自然と平和を示すブルーのなかに、会議開催地である北海道の伸びゆくイメージがふくまれています》

席者たちは、一九八五年に北海道で第2回の会議を開きたいと希望した。

第2回ソ日極東・北海道友好交流会議は6月4日から4日間の日程で、札幌で開かれる。すでに会議の準備が始まり、双方の実行委員会が発足した。ソ連側の実行委員会の会長はソ連対外友好・文化交流団体連合会（対文連）幹部会のゲンナジー・ヤナエフ副議長で、名誉会長には第1回会議のソ連側代表団長を務めたビクトル・パステルナーク・ハバロフスク地方執行委員会議長（知事）・ソ連最高会議代議員がなった。そのほかの実行委員会のメンバーは、沿海地方、ハバロフスク地方、イルクーツク州、ノボシビルスク州、サハリン州、ブリャート自治共和国の国家機関と社会団体の指導者たち、ソ連の中央諸組織、官庁の代表たちである。

日本側の実行委員長は池島信吉・北海道議会副議長（社会党）で、名誉会長に横路孝弘・北海道知事、会長に阿部文男・衆議院議員（自民党）が就任した。阿部文男氏は日本側実行委員会の広報紙「友好交流」の中で実行委の使命について次のように書いた。

「日ソ友好に対する道民の関心と期待は極めて高く、両国民間の善隣・相互理解を深めるための意見交換もいっそう活発になっております。

このときに当たりまして、本委員会の使命と責任は極めて重く、改めてその職責の重大さを痛感する次第であります。委員会の運営に当たりましては日ソ両国の健全な発展のため積極的に取り組み、最善を尽くして参りたいと思います……」

交流会議のスケジュール打ち合わせのため池島実行委員長を団長とする北海道側の実行委代表団が4月18日から26日まで訪ソした。

代表団には石林清・北海道商工会議所専務理事、柴田定良・北海道労協共闘部長が加わっていた。

代表団はリジア・ルイコワ・ロシア連邦共和国副首相、チモフェイ・グジェンコ・ソ連海運相、ウラジーミル・ビノグラードフ・ロシア連邦共和国外相・元駐日ソ連大使と会談したほか、全ソ労働組合中央評議会、貿易省、ソ連漁業省、ロシア連邦共和国スポーツ委員会でも会談した。

モスクワでの話し合いの結果、双方は日程、会議運営手続きのほか、会議の合間に行われるスポーツ競技、札幌でのツワ自治共和国の「サヤン」アンサンブルの公演、シベリア・極東地域の社会・経済の発展状況を紹介する展覧会の開催などを取り決めた。

双方の合意によると、札幌のソ日極東・北海道友好交流会議の目的は、ソ日両国民間の相互理解、友好、善隣を深める問題について民間各界代表間の意見の交換を続け、また地域間の交流を全面的に発展させる緊急課題の解決をはかることにある。

ソ連側の会議代表団のメンバーは一二〇名の予定で、ソ連、ロシア連邦共和国最高会議、各地方ソビエトの代議員、ノボシビルスク、ウランウデ、ホルムスク、ネベリスク、ポロナイスクの各市執行委員会議長（市長）、文化人、学者、極東の青年・婦人団体、ソ日協会各地方支部の代表、経済・貿易・漁業の専門家などから成る。

ソ連代表団は6月3日フェリクス・ジェルジンスキー号で小樽に到着、まず6月4日に会議の開会式、ついで二つの本会議と四つの分科会の会議が行われる。分科会は(1)「社会団体を通じた交流および文化、科学、スポーツ、観光、姉妹都市の分野の交換の発展は、極東における友好と相互理解を深める重要な要因」、(2)「極東の勤労者間の接触の現状と接触拡大の見通し」、(3)「極東における善隣と信頼を強化するための通商・経済協力の発展」、(4)「北西太平洋の資源の保存と合理的利用における協力の発展」の四つのテーマで意見を交換する。討論のさいには、国際情勢と二国関係の差し迫った極めて幅広い問題について意見の交換が行われる予定である。

池島実行委員長はモスクワの会談で次のように述べた。

「北海道民はこんどの会議に非常に大きな関心を寄せている。第1回の会議で、日ソ両国民には協力の分野が沢山あることがはっきりわかった。北海道民にとって社会・経済的に大きな意義をもっているのは、ソ連極東地域との貿易と北西太平洋の資源を合理的に利用する共同措置である。これらの問題は討議の対象であり、第1回会議の経験でわかったとおり、その問題を前向きに解決することは相互理解と善隣を深める上で重要な実際的意義をもつ」

"ソ日協力の日の出を期待する"

——来日したソ連最高会議代表団のコソラポフ団長に聞く

5月はソ日交流の面で大変活発な月であった。さまざまな多数のソ連代表団が来日したが、その中には日本の国会にあたるソ連最高会議の代表団もあった。代表団のメンバーは、ソ連共産党中央委員、ソ連最高会議代議員、「コムニスト」誌編集長のR・コソラポフ（団長）、ソ連共産党中央委員、ソ連最高会議代議員、ウクライナ共産党リボフ州委員会第一書記のV・ドブリク、ソ連最高会議幹部会対外交流部次長のV・アンドレーエフ、ソ連外務省第2極東部職員のV・フォーキン（通訳）。

R・コソラポフ団長は今回の来日を総括して本誌記者に次のように語った。

「われわれは、対ソ親善を支持している日ソ友好議員連盟の客として来日しました。親善は崇高な課題です。ほぼ同じ時期にA・アントノフ・ソ連閣僚会議副議長（副首相）を団長とするソ連政府代表団も来日し、ソ日両国間の諸問題について日本側と政府レベルの交渉を行いましたが、われわれは社会団体の線で事実上同じ問題の解決につとめました。深刻な危険をはらんだ現在の状況においてはこのような使命を果たすことは大変重要です。

実生活そのものがソ日協力の可能な方向を決定づけています。それはまず何よりも、経済と文化です。すぐれた高度技術の国日本はわれわれにとって協力の前途有望な国ですし、一方ソ連は、無限の可能性をいっぱい秘めた大国です。協力はソ日両国のためばかりでなく全世界の平和の事業にとっても重要です。協力への道は、相互の信頼を強化することです。私が言っているのは、軍事的・政治的な面での信頼だけでは決してありません。もっと広い意味の信頼関係のことです。私はソ日友好に太陽が昇る日の来ることを信じています。

来日の印象について言えば、代表団の受け入れや代表団を取りまく雰囲気は予想していたよりずっと温かいものでした。私たち全員が日本は初めてです。時間がわずかしかありませんが、お国をよく知り、日本の人々の労働条件、生活、物の考え方をよく見ていきたいと思います。

相互理解と協力を拡大するための限りない可能性があるように思えます。

最後に、日ソ友好議連をはじめとして、われわれに対し多大の配慮をし、歓待して下さった国会議員の方々に感謝します」



▶
来日したソ連最高会議代表団。右からV・アンドレーエフ、R・コソラポフ団長、V・ドブリク、V・フォーキン（通訳）。



日ソ友好議員連盟第12回総会（5月15日）であいさつするコソラポフ団長。その右は総会議長の原　文兵衛参議院議員（自民党）と片山甚市参議院議員（社会党）〔写真提供＝日ソ友好議員連盟〕。

新刊紹介



ロシアの革命運動の歴史を平易に

——『帝政ロシアの終焉』

札幌の北海道日ソ友好文化会館からこのほど『帝政ロシアの終焉』（Ａ５判、113ページ）という本が出版された。

同会館では昨1984年春と秋に、それぞれ３回ずつ帝政ロシアの歴史に関する講演会（「ロシア文化セミナー」）を開催したが、本書は、そのうち秋に行われた講演をまとめたもので、ロシアの革命運動の歴史が平易に解説されており、多くの関係者から好評をもって迎えられている。

本書には「デカブリスト貴族の反逆——ロシア革命の曙」（出かず子・北海道大学スラブ研究センター助教授）、「ナロードニキの人々——ゲルツェンとバクーニン」（外川継男・同教授）、「革命と犯罪——1917年のペトログラード」（長谷川毅・同教授）の３編が収められている。

本書の入手を希望する方は、住所、氏名、年齢、職業を明記の上、郵送料（切手200円）を添えて北海道日ソ友好文化会館（〒062 札幌市豊平区平岸二条16丁目、電話011—811—8051）へ申し込めば送ってもらえる。本の代金は無料。

新刊パンフ配布のお知らせ

次の４種類のパンフ（誌代無料）を配布します。郵送ご希望の方は、送料分の郵便切手を添えて、ソ連大使館広報部パンフ係へお申し込み下さい。

各冊とも１冊の送料は二〇〇円、４冊セットの場合の送料は三〇〇円です。

☆『ヤルタ・ポツダム両会談と国際安全保障』（ワジム・ネクラーソフ著、Ａ５判一〇三頁、ＡＰＮ出版局）

☆『日々と生涯・レーニンの外伝』（エゴール・ヤーコブレフ著、新書判一六八頁、ＡＰＮ出版局）

☆『運命に逆らって』（イリヤ・ギトリツ著、新書判一三六頁、ＡＰＮ出版局——ソ連の身体障害者の生活と具体的な個人例の紹介）

☆『アジアの平和と安全——社会主義諸国の提案（資料集）』（ノーボスチ通信社編、Ｂ６判一〇五頁、アジア書房発行）。

なお、パンフによっては、品切れになるものもありますので、その節はご容赦下さい。

ソ連の視点

軍拡競争と軍縮交渉は両立しない

ノーボスチ通信政治評論員　S・ベグロフ

4月23日に開かれたソ連共産党中央委総会は、定例の第27回大会の招集決議を採択したのとならんで、対外政策上の諸問題にも大きな関心を払った。世界平和のために、よりよい明日のために、過去のいかなる時にもまして政治的意思を必要としている国際情勢の複雑さと緊張の激しさが確認された。

係争問題や紛争状態は政治的な手段で解決すべきだ、というのがモスクワの強い信念であり、そのことは中央委総会の演説の中でゴルバチョフ書記長が改めて強調した。彼の分析によれば、緊張の激化と問題の複雑化の第一の原因は、米国の特定層が依然として世界で支配的地位、何よりもまず軍事面での支配的地位を獲得しようとし、最も広範な戦線において——社会主義共同体に対しても、植民地主義から解放された国々、民族解放運動、資本主義諸国の勤労者に対しても——社会的雪辱を果そうとしていることにある。

人類は依然として選択に直面している。緊張と対立を一層激化させるか、それとも核紛争の物質的準備のプロセスを停止させるような相互に受けいれ可能な合意を建設的に探求するか、という選択だ。ソ連はつねに後者だけを受けいれられるものとみなし、それが実現可能だという国際社会の信念を強めるよう全力を尽くしてきた。

一九八一年2—3月に開かれた前回の第26回党大会は、軍事的脅威の緩和、軍拡競争の抑止をめざすたたかいをソ連の対外政策の中核的方向に定めた。人類を脅かしている危険の阻止をめざす現実的で実現可能な一連の措置が作成された。その中には、ソ米戦略軍備制限交渉の建設的な継続や、新型中距離核ミサイル欧州配備に対するモラトリアム、軍事分野での信頼強化措置の適用範囲の拡大などがある。

そうしたことに照らしてみると、〝自分たちがソ連を交渉のテーブルに着かせた〟というような米指導部の最近のうぬぼれた発言は、全く現実と合致していない。その反対だ。米国政府の〝一貫性〟の唯一のあらわれは、具体的なソ連の提案やイニシアチブに対して毎回、説明のつかない性急さで〝ノー〟と答えてきたことだった。一九八二年以降、ソ連の核兵器先制不使用の一方的公約が効力を保っている。一九八三年以降、衛星攻撃兵器を先に宇宙に打ち上げることに対する一方的モラトリアムが効力を保っている。米国側からそれにこたえる善意のそぶりすらなかった。

ミハイル・ゴルバチョフは、ワシントンに対する最近のソ連提案——ジュネーブ交渉の全期間にわたり、双方とも宇宙兵器の開発に対するモラトリアムを実施し、戦略核兵器庫を凍結しようという提案に言及した。ソ連はこの路線に従い、欧州での中距離ミサイルの展開とその他の対抗措置の増強に対するモラトリアムを一方的に宣言した。この善意に対して米国がすぐさまいつもの通り、紋切り型の〝ノー〟で答えたことは、米国に理性的な結果に事態を導こうという意向がないことをはっきりと物語るものとしか受けとれない。

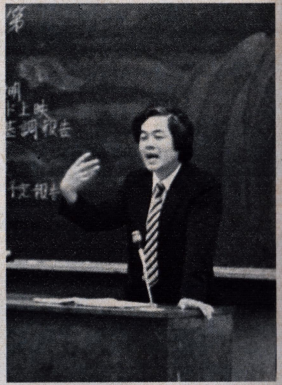
そのことはジュネーブ交渉の第一段階によっても裏付けられている。そこでワシントンは、そもそも戦略核軍備と欧州中距離核軍備の削減問題と合わせて宇宙空間への軍拡競争の不拡大問題を審議するのを拒否している。

軍拡競争と軍縮交渉を両立させることはできない。ソ連は、従来の交渉の悲しい経験を繰り返さないよう、そうした路線に手を貸すことはしない。そのことは今回の中央委総会できわめて明確に断言された。ソ連側は、米国の現在の立場が修正されるだろうという期待を表明し、ジュネーブで具体的な相互に受けいれ可能な合意の達成をねばり強く求めていく決意を確認している。

ソ連共産党中央委総会は、西欧諸国や日本との広範で多角的な互恵協力、対米関係の改善に臨む用意を明らかにすることによって、レーニンの平和共存原則に忠実なことを裏付けた。われわれのモラルと世界観に合致するのは、国際法の規範を十分尊重した上での対等で折り目正しい国家間関係だ。両体制間の歴史的係争を軍事的手段で解決しようとする試みを帝国主義が放棄する場合においてのみ、国際関係を正常な協力の軌道に乗せることができる。

〝新しいソビエトで〟

——22日間のソ連体験を語る早大生たち





上　集会であいさつする日ソ学生親睦会会長の井桁貞義早稲田大学文学部教授

左　報告集会に集まった学生たち

昨年の12月、早稲田大学のいろいろな学部で学ぶ7人の学生が22日間のソ連旅行をした。ソ連を縦横に旅行し、モスクワ、レニングラード、ハバロフスク、イルクーツク、タシケント、サマルカンドに滞在した。その旅行を通じてソ連の同世代の青年たちと会い、その生活ぶりや勉強ぶり、レジャーの過ごし方などを見聞した。さまざまのソ連の組織・機関、工業企業なども訪問した。

4月26日、早稲田大学で、これら7人の学生（日ソ学生親睦会会員）を囲む会が持たれた。ソ連に関心を抱く学生たちの前で7人は旅行の印象を語り、旅行中にとったスライドを映写し、参加者の質問に答えた。

この集会に寄せて学生自身の手になるパンフ〝新しいソビエトで〟もつくられた。

7人は旅行中いろいろなことに感動し、思い出と印象をたくさん貯めこんで来た。その中で最も重要な印象は、第2次世界大戦で二〇〇〇万の生命を失ったソビエトの人々が全力を尽くして平和を希求し、戦争を嫌悪している姿だった。まさにそのことについて集会では多くのことが語られた。

（A・スロベスヌイ）

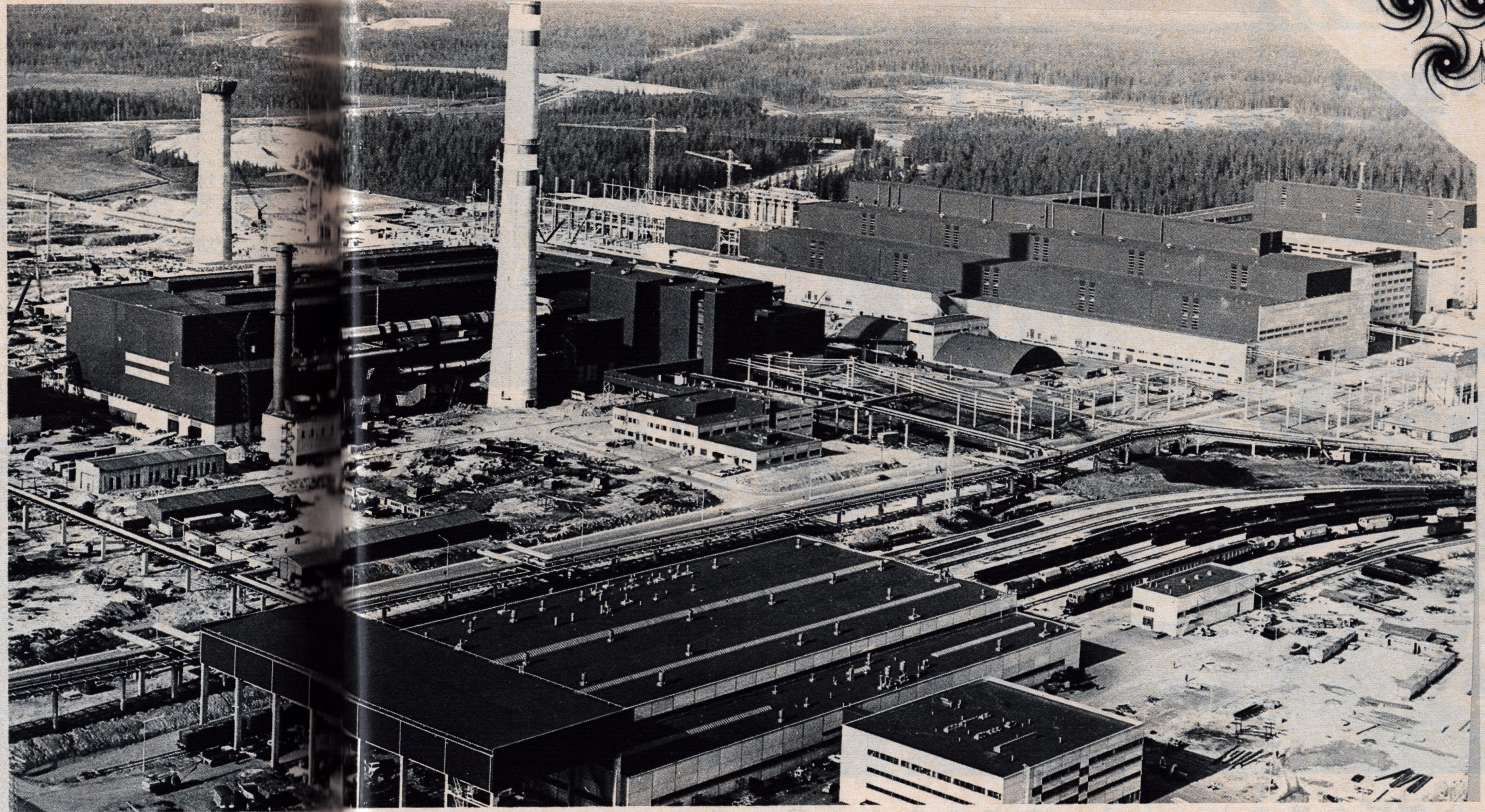
大阪で本誌読者会



4月27日、大阪で「今日のソ連邦」の読者会が日ソ協会の大阪府連合会、兵庫県連合会、京都府連合会の共催で開かれた。本誌の会には約20名が参加し、本誌の記事や編集について有益な意見や提案を述べた。ソ連側からは大阪駐在ソ連副領事のK・デリバス、V・キスタノフ、本誌の記事を提供しているノーボスチ通信社のM・エフィーモフ東京支局長が出席した（写真はその会の模様）。

話題を拾う

完成した鉄鉱石コンビナート



カレリア自治共和国（ソ連欧州部）北部にあるコストムクシャ採鉱・選鉱コンビナートが完成した。工事の着工は一九七八年。第3期最終工事分が完工したことによりソ連北西部最大のこの鉄鉱石コンビナートはフル操業に入った。

コストムクシャ・コンビナート建設は成果を上げているソ連・フィンランド経済協力の一例で、ソ連の専門家が設計し、実際の工事はフィンランドの企業が担当した。工事代金は製品の一部をフィンランドに供給することで相殺される。

コンビナートの年間生産量は鉄鉱石ペレット約九〇〇万トンの見込み。全生産工程の最大限の機械化と自動化がここの特徴である。

コントキ湖畔にはコンビナートの従業員たちが住む町も誕生した（写真はコストムクシャ採鉱・選鉱コンビナート）。

レーザーテレビ

右の写真は本誌6号の「短信アラカルト」でも紹介したレーザーテレビのスクリーン（面積12平方m）。これは、ノーベル賞受賞者N・バソフ・アカデミー会員をリーダーとするソ連科学アカデミー物理学研究所の学者たちのアイデアを実用化したもので、すでに米国、西独、英仏などで特許を取得ずみ。作動原理は普通のテレビと同じだが、レーザー光線を使うため普通のＴＶ画面より10万倍明るく、将来の映画館用など広い用途が考えられる。



モスクワの国際体操競技会

29カ国から144人の選手が参加して３月29日から31日までモスクワで、第12回“モスコー・ニューズ”紙賞国際体操競技会が開催された。この競技会を一言で表現すれば、“未来の体操との出会い”と言うことになろう。毎回この競技会では新星が登場する。今回個人総合で優勝したのは男子がセルゲイ・グーセフ、女子がエレーナ・シュシュノワのソ連勢。

この大会は若い選手にとっては他流試合の出来る絶好の機会、最高の道場と言えよう。昨年のこの大会では正式参加ではなかったソ連の男子若手ゴゴラーゼが、今回見事入賞を果たしている。今大会を通じ評価の基本的規準は依然として、リスク、技術、独自性であることが示された。日本チームも含め、一部の国のチームには近い将来ソ連選手の好敵手になるだろうと目される有望な新人が参加していた。

日本女子チーム監督で元オリンピック・チャンピオンの塚原光男氏は今大会の印象を次のように語った。

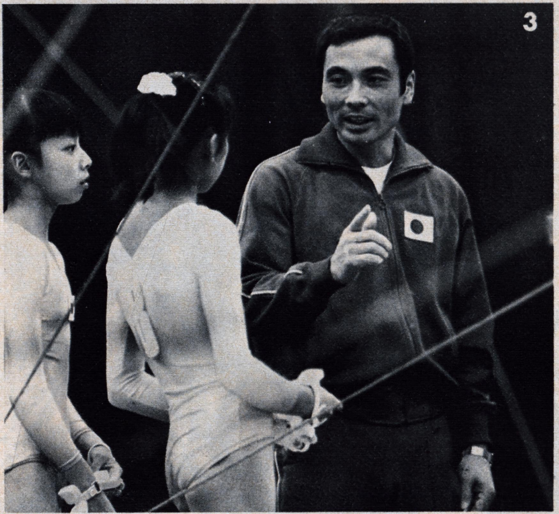
「私自身もこの競技会に出場した経験があるが、その度に新しい名前を発見した。今回も例外ではない。日本の中日新聞杯大会に参加して個人総合優勝したことのあるシュシュノワが大いに気に入った。技術的に複雑なプログラムをこなし、そのうえ芸術性、優雅さの表現にすぐれている大変魅力的な選手だ」

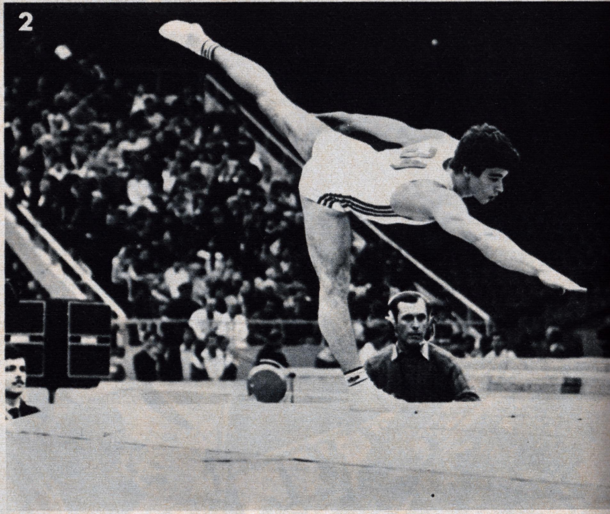
1　女子個人総合優勝のエレーナ・シュシュノワ

2　男子個人総合優勝のセルゲイ・グーセフ

3　日本女子チームの監督として参加した日本の往年の名選手塚原光男氏

1


3


2


身体障害者のスポーツ運動

エストニア駐在本誌記者　レフ・ワイノ

スポーツは、身体障害者を社会から締め出し、身体障害者同士さえ隔てさせようとする目に見えない壁を打ちこわす。医師たちはずっと以前からこの真理を知っていた。現在ソ連では、スポーツ運動の活動家や社会保障の活動家も身体障害者をスポーツに参加させる問題に取り組んでいる。

一九八四年の秋、エストニア共和国（バルト海沿岸）の首都タリンの近くで〝身体障害者スポーツ大会84〟が開かれた。これにはシベリア、バルト海沿岸地域、レニングラードから支持・運動器官に障害のある一五〇人が医師、マッサージ師、コーチを伴って参加した。大会の費用は主として地元の体育スポーツ委員会が、一部をリハビリセンターが負担した。

参加者は2日間にわたって7種目の技を競い合った。身体障害者はカメラを避けたりすることもなく、堂々と振る舞った。なぜなら彼らは、まだ普通の生活に溶け込むことに二の足を踏んでいる障害者がテレビの前に座って自分たちを見ていることを知っているからだった。

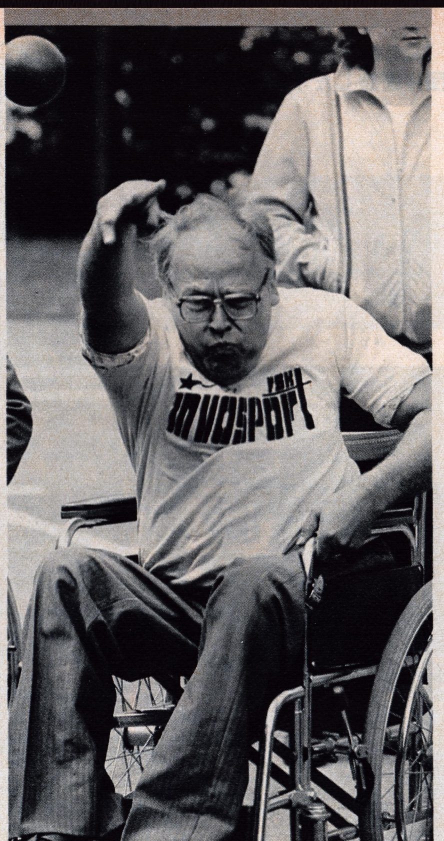
このスポーツ大会の組織者のひとりでエストニア身体障害者スポーツクラブ議長の技師ミフケリ・アイツァム（54歳、タリン市在住）はこう語る――「私たちは障害者が失ってしまったものを嘆き悲しむのではなく、残ったものを大事にするのを手伝いたいと思っています」

アイツァム自身、幼いとき患った灰白髄炎による重い障害を非凡な意志の力で乗り越えてきた人である。この人の実例と実践活動は、身体障害者仲間に希望の光を与えている。

タリンの身体障害者スポーツクラブは一九八〇年に建設されたオリンピック・ヨットセンターを基地にして活動している。この総合スポーツ施設は身体障害者がプール、体育館、サウナ、水圧マッサージ設備を使ってトレーニングするための理想的な条件を提供している。



射撃競技に参加したレニングラードのタマラ・ポポワは事故で車イスが手放せなくなってしまったが、持ち前の楽天主義と周囲の人々の援助でスポーツに打ち込んでいる。



砲丸投げに参加したエストニア人のスレプ・サーレは身体障害者スポーツクラブに入って3年目。



エストニア共和国の首都タリンの郊外で行われた身体障害者スポーツ大会のバレーボールの試合

身体障害者スポーツクラブは身体障害者のために門戸を開いているだけではない。ここでは引っ込み思案の身体障害者の援助を買って出る健常者も歓迎される。健常者の援助はしばしば不可欠だ。

施設の使用料はエストニア共和国社会保障省が、リハビリ指導員の賃金は医療・体育指導所が支払う。身体障害者スポーツクラブの会員は慈善家を必要としていない。それでも障害者はつねに、彼らのために生涯を捧げている献身的な人々に出会う。

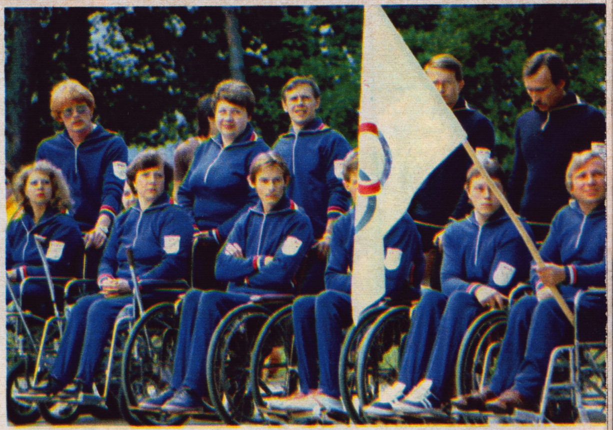
レニングラードのチームに付き添って身体障害者スポーツ大会にやってきた25歳のリハビリ指導員セルゲイ・ジュマエフは自転車競技に熱中し、中等体育専門学校で学び、コーチになるつもりだった。卒業実習でリハビリセンターにやってきたジュマエフは、そこを自分の職場に選んだ。

「これらの人々がこんなにも援助を必要としていることを私は知りませんでした。私は彼らのために時間を惜しみません。障害者が丈夫になり、基本的なことができるようになって私たちのセンターを去って行くのを見るのはこの上ない喜びです」とジュマエフは言う。

身体障害者のスポーツはシベリアでも盛んになりつつある。オムスクのリハビリセンターでは、スポーツから就職まで、身体障害者の社会復帰のすべての問題にわたる広範なプログラムが作成された。シベリアからはこのスポーツ大会によく練習したチームが参加した。そのうちの6人は車イスを手放せない人々だったが、チームは最強で、多くの種目で上位を占めた。

エストニア共和国社会保障相グスタフ・サリーは、医学と社会保障とスポーツ運動が協力することによって、身体障害者のスポーツを発展させるための好都合な下地ができつつある、と考えている。国庫からの支出に依拠してこの三者は、身体障害者に必要なすべてを提供している。すなわち、社会保障省は資金を、体育スポーツ委員会はスポーツ施設と指導員を、保健省は正しいトレーニング法と医療チェックを。

“身体障害者スポーツ大会84”で
団体優勝したオムスク市のチーム



身体障害者スポーツ大会参加
者の宿舎になったコテージ



▼
レニングラードから参加
したビクトル・パブロフ
と奥さんのタチヤナ。ビ
クトルは数年前、第6、
第7椎骨を折ってしまっ
たが、奥さんの協力を得
て充実した生活を送って
いる。



記念切手シリーズ

「科学万博―つくば'85」の記念切手





ことしの3月ソ連通信省は、筑波の科学万博の開会を記念し、4種の切手と小型シートを発行した。

上の左端の5コペイカ切手は、ソ連の宇宙飛行を例にとって、ソ連の科学技術の進歩を示したもの。

左から2番目の10コペイカ切手は通信衛星モルニヤ1と近代的な情報伝達システムの他の機器を描いている。

20コペイカ切手は原子力発電を含むエネルギー産業分野のソ連の成果を物語っており、水力タービン、高圧送電線の鉄柱、原子のモデルが図案になっている。

右端の45コペイカ切手は未来の住宅システムをテーマにしており、円筒のタワーの形の高層住宅が描かれている。

左の50コペイカの小型シートに描かれているのは、つくば科学万博のソ連館のシンボルマークである。

図案はソ連の切手の図案を書いて有名なユーリー・アルツィメノフ。グラビア印刷。アート紙使用。

黒海沿岸で育つ日本産植物

——バツミ植物園の東アジア部を見る

ソ連科学アカデミー
極東研究所研究員　キリール・チェレフコ
カメラ　V・ホフリャコフ　A・クラサビナ



バツミ植物園のアジサイ



カエデ

アジャール自治共和国（グルジア共和国内）の首都バツミから北へ9㎞の黒海の岸に、高い絶壁が海の中へ突き出ている。樹木の生い茂ったこの美しい場所は、その名も“緑の岬”（ゼリョーヌイ・ムイス）と呼ばれているが、ここにはロシアの優れた植物学者で地理学者だったアンドレイ・クラスノフが一九一二年に設立したソ連有数の植物園——バツミ植物園がある。大旅行家でもあったクラスノフは世界中を回り、亜熱帯と熱帯の多くの国を訪れていたので、バツミ沿岸の恵まれた立地条件をすぐに見抜いた。

この地がクラスノフを引きつけたのは、その亜熱帯性の気候だった。彼によると、バツミ沿岸の気候はフランス南部の大西洋岸、スペイン、オーストラリア、ニュージーランド、セイロン、日本のそれに似ていた。クラスノフは、バツミの湿潤な気候は過去の地質時代に地球上の大部分で見られた気候に近いと主張した。太古の植物は太平洋の亜熱帯諸国にごく一部しか残っていなかった。そこでクラスノフはそれらを

“生きた化石の植物園”に集めて、後世の人たちが地球上の植生がどのように変化したかを想像できるようにしようと思い立った。

現在のバツミ植物園は科学研究と文化・国民啓発のための一大総合施設になっており、年間二〇万人がここを訪れる。植物園の面積は一一一ha。草本は別として、樹木（高木と低木）だけでも一五〇〇種以上が集められているが、これはすべての大陸の亜熱帯、温帯産の樹木である。樹木の配列は地域別になっている。園内は多くの区域（部）に分けられ、各部にはどこか一つの大きな地理学的地域の樹木しか植えられていない。

北米部、ヒマラヤ部、地中海部、オーストラリア部はかなり大きい。面積も樹木の種類もこれより少ないのがメキシコ部、ニュージーランド部、南米部。地元ザカフカズ地方の多湿亜熱帯部もある。しかし面積（6ha）でも樹木の種類の数でもいちばん大きいのは、日本と中国の植物を集めた東アジア部である。

日本にはクラスノフは一八九二年と一八九五年に行き、さまざまな多くの植物を持ち帰った。そのうちの大多数はバツミの地に見事に根付いた。今ではこの植物園にある日本原産の植物はかなりの種類になるので、名前をぜんぶ挙げるのは無理である。竹類だけでもモウソウチク、マダケ、クロチク、ウンモンチク、ダイミョウダケ、カンチクなど50種以上ある。

竹林の上の、インド茶、中国茶、日本茶の畑になっている小山の頂上には桜の木が数本あって、毎年春には見事な花を咲かせ、植物園を彩る。小山の頂上に続く小道のそばには枝を空に鋭く向けた園芸品種のスギが植えてある。頂上へ向かう途中で見学者の目を引き付けるのが葉の色がさまざまで優雅な日本産の各種カエデの木立である。小山の頂上にはまた日本産のいろいろなキク、シャクヤク、ユリが植えてある。

日本産のツツジ類もこの植物園に華やかな色彩を添えている。なお、日本産のツツジは今では黒海沿岸全域に広く普及している。

東アジア部では毎月必ず何かの植物が花を開く。たとえば、1月には日本産のマツの一種が開花する。2月にはモモが枝が見えなくなるほど花をつけ、モクレンとその近縁種の低木が開花する。

3月にはスモモ、ヘントウ、サクランボがまるで雪に包まれたように真っ白な花で埋まる。4月は日本産のツツジの開花で名高い。同じ頃、日本よりも3カ月早くシナフジが開花する。5月は小さな池の周囲に植えられている有名なハナショウブの季節である。

6月と7月はアサガオの季節。同時にシナユリノキ、タイサンボク、バラが開花しはじめる。8月には池を彩る真っ白なハスの花が開花する。

9月はハギの開花の季節。10月は日本のコーナーだけでなく、植物園の大部分が日本産のカエデの王国に変わる。その紅葉は海に落ちる夕日の中で見ると、とりわけ美しい。

11月はもちろん、キクの季節。12月にはツツジ属の一部とビワが開花する。

このほか、バツミ植物園の東アジア部で目立つものとしては小さな実をつけるマテバシイ、春には柔らかいバラ色の葉を一斉に出すアラカシ、葉が細長く、だ円形ではなく丸い実をつけるコナラなどがある。これらの木の近くには地元のバツミ地方産のものとほとんど変わらない日本原産のツゲの小林が広がっている。

珍しい木としては池のそばに立っているエンコウスギを挙げねばなるまい。この近くには春の半ばから開花するバラ色、鮮紅色、白、スミレ色のツツジもある。

隣の北米部との境界近くにはニホンナシとケンポナシ（クロウメモドキ科）の小さな園地がある。

バツミ植物園では貴重な日本産の植物の研究をしているだけでなく、それを栽培して増やすことにも取り組んでいる。竹、クリ、その他の樹木の一部がこの地方の森林に移植されたのは、この植物園からである。また、黒海沿岸の都市の街路にもこの植物園から日本原産の園芸植物が広がっている。

←



バツミ植物園にはかなり広いモウソウチクの竹林がある。



アジサイ



▶ここには19世紀末に日本から移された樹木や草が植えられている。



▲3月の中旬から下旬に開花するモクレン



3月末に開花するサクラ



ユキノハナ（マツユキソウ）



サツキツツジ



▼園芸品種の葉の赤いカエデ



◀バツミ市民はこの植物園をよく訪れる。



色鮮やかなツツジの一種

短信アラカルト

海水でブドウ畑を灌漑

ソ連の学者たちは海岸の砂地に樹木や果樹を植えて、海水でそれを灌漑する方法を開発している。

これまでの説では、灌漑用の水には1ℓあたり1g以上の塩分が含まれていてはだめだということだった。それ以上だと土壌の塩分が濃くなりすぎてしまうからだ。たとえばカスピ海の水には1ℓあたり3gから12gまでの塩分が含まれている。したがって、灌漑にはまったく使えないと考えられてきた。だが、北カフカズのダゲスタン農業研究所の研究者たちはこれに異議をさしはさんだ。その根拠は、海岸の砂地には天然の理想的な排水機能があり、塩分は濃縮されない、というものである。土壌に残留した塩分は次の灌水のさいに地下に洗い流されてしまう。実験の結果はカスピ海の水を海岸の砂地の植物に利用できることを示した。特にブドウの栽培ではよい結果が得られた。

涙の効用

モスクワのソ連医学アカデミー実験心臓病学研究所の学者たちは、いままで知られていなかった涙腺の内分泌学的機能を発見した。それは傷が治るプロセスに直接作用する。

涙を出させるためにネズミの目にゴミを入れると、涙がたくさん出れば出るほど、ネズミの背中の傷は早く治った。傷の治り具合は平均して12日短縮された。涙腺を取り除いてしまうと、驚くべき現象が見られた。傷口がくっつかず、傷の治りが遅くなったのである。そのうちに皮膚が弾力性を失い、老化したようになってしまった。

恐らく、涙腺から血液の中に分泌される物質が、皮膚の緊張に影響を与えているのだろう。学者たちが涙腺のエキスをネズミたちに定期的に注入すると、皮膚はふたたび弾力性を取り戻し、傷の治りもよくなった。

12世紀の靴

流行はくり返される——この真理はベロルシアの考古学者たちの発見によっていまいちど証明された。ミンスク地域での発掘のさい、柔らかい皮でできたローヒールがたくさん見つかった。それは現代の女性が好んで履いているものとそっくりの形をしている。ただちがうのは、これらの靴には左右の区別がないことだけだった。

ベロルシアの考古学者たちは古い時代の靴の一大コレクションを持っている。そこには、先のとがった優雅なスリッポンもあれば、くるぶしまである履きやすいブーティーも、一枚皮で縫われた質素なモカシンも、柔らかいブーツもある。

暴風を研究するための装置

極東水文気象研究所で海洋性の暴風を研究するための装置が組み立てられた。それは透明の容器で、その中に暴風が発生する条件をシミュレートするさまざまな機器が収まっている。暴風の最初のつむじ風を発生させるレーザーもその一つ。宇宙から撮った台風の写真が実験室の中で発生させた嵐の写真と非常によく似ているのは興味深い。

近いうちにこの装置にはコンピューターと組み合わされた周波数レーザー測定機が追加される。これによって旋風の速度の刻々の変化を監視し、暴風発生のメカニズムだけでなく、その移動の秘密の解明にも近づくことが可能になるだろう。

バム鉄道沿線最初の工場

東シベリアとソ連極東の一五〇万平方km以上を占めるバム鉄道沿線地域の開発は南ヤクーチアで始まり、地域生産コンプレクスが形成されつつある。ここでは現在、年間九〇〇万tの粘結炭（コークスの原料）を生産するネリュングリ選炭工場が操業を開始し、ソ連石炭産業の一大基地創設の第1段階は大詰めを迎えた。バム鉄道沿線で最初のこの工場は、世界で他に類を見ないほど生産性の高い設備が集中している。ここでは、灼熱したガスの流れを使ってコークス用精炭を乾留する省エネルギー型の技術がこの分野で初めて採用された。工場のすべての工程は自動化されている。

巨大野菜の品評会

バルト海沿岸のエストニア共和国で巨大野菜の品評会が行われた。出品されたのはいずれ劣らぬ〝大物〟ばかり。たとえば、重さ16kgあまりのキャベツ、一個が2・2kgもあるジャガイモなど、エストニア共和国のコルホーズで育ったもの。アマチュア園芸家が出品したものでは、首都タリン近郊の菜園で採れた重さ43kgのカボチャもあった。



パパのお帰り（T・バジェノフ撮影）

第4回日ソ婦人セミナーと交流の会

さらに広がった友情と連帯の輪

日本教職員組合副委員長　橋口　和子



4月6日から13日まで日本各地で行われた第4回日ソ婦人セミナーと交流の会については前号でも紹介しましたが、本号では日本側の実行委員会事務局長を務めた橋口和子・日教組副委員長に今回のセミナーと交流について感想を書いていただきました（編集部）。

「二一世紀をめざす婦人の課題——平和と平等達成のために——」をテーマとして、日本の婦人代表一五三名とソビエト婦人委員会を代表して来日された、団長リュボーフィ・バリャスナヤ（ロシア共和国教育次官）さん外五名の方々とのセミナーは四月六・七日の両日、国立婦人教育会館で真剣な討論を、友好的雰囲気の中でおこないました。更に長崎・大阪・横浜の各地で多くの婦人と交流し、今こそ、平和・反核・軍縮のために婦人が連帯して立ち上がることの重要性を確認し合い、ソ連への理解と友情を深める貴重な交流の会を成功させることができました。

この交流は一九七九年に日本対外文化協会（対文協）とソ連対文連・ソ日協会との協定によって第一回を十月にモスクワ市において開催し、国際児童年を記念して「伸びゆく世代の育成についての婦人の役割」をテーマとして討論することから始まりました。

日本の代表団は対文協の呼びかけで、日ソ親善協会を中心に社会党、公明党の婦人議員の協力を得て、学者・文化人・医師・労組代表・教師・婦人団体など多くの分野の人々で構成された一〇名の代表を派遣し、ソ連側もジナイダ・フョードロワ婦人委員会事務局長を団長に一三名で構成されていました。

第二回は一九八一年5月東京で開催することとなり「国連婦人の一〇年」運動における日ソ婦人セミナーとして開催され、ソ連代表としてニコラエワ＝テレシコワ団長を含む五人の代表団を迎えて、セミナーを成功させ、福島・広島での交流も感動的でした。

このような取組みが多くの日本の婦人の間にソ連との友好連帯の重要性を認識させ、第三回には、日本の婦人代表は北海道から沖縄までの運動の中心となっている人々一五名の代表団となり、一九八二年十一月モスクワ市で「核兵器反対・軍備などデタントのための日ソ両国の婦人の闘い」を前進させるセミナーとして開催されました。

その時々の世界的な課題でこのように日本の多様な婦人たちとソ連のさまざまなセクションで活動している人々との討論と交流は着実に世界の平和と婦人の平等発展のために寄与してきていると考えます。

今回第四回を日本で開催するにあたって、日本では八四年四月から発起人会を開き、多くの婦人団体に呼びかけ、準備委員会を重ねて、六月二九日第一回の実行委員会を開催し一年をかけて、セミナーと交流の会成功のために取り組んできました。対文協や政党の援助なしに二七の婦人団体や協力委員多数の自主的な努力で、資金づくり、交流体制・セミナー内容の検討等を続けて、第四回を成功させました。

今回は、代表団の訪れる各地で桜の花も満開で、反核・軍縮・平和のために連帯して立ち上がる両国婦人代表を歓迎し祝福してくれた感じでした。

国立婦人教育会館近くの埼玉県嵐山町では、町長はじめ多くの農民たちが一ときを餅つき踊りで言葉の壁をのりこえて混然と一体となる交流が行われました。

長崎でも、市長が先頭で原爆の遺跡や学校を案内し、交流集会には婦人団体や労働組合、多くの婦人が参加し、「この無惨な体験をシッカリと受けとめ、この悲劇は絶対にくり返さないこと、私たち母親こそその先頭に立たなければ!!」というバリャスナヤ団長の核廃絶と婦人の連帯をという力強い訴えに感動の拍手がなりやまないという状況でした。

大阪でも市営住宅の見学やナショナル工場の見学のあと、三〇〇名の婦人が集まった交流集会で代表団はそれぞれの立場から「平和なくして平等なく、何の発展もありえない」ことを訴え、大阪の多くの婦人たちに、ソビエト婦人と日本の婦人の願いは一つという感銘をあたえる集会となりました。

東京での交流もトルクメン・アンサンブルの出演もあり、共同コミニュケの調印式・セミナー報告と代表の感想発表で場内が完全に一つに融け合い、「今日の日はさよなら、又逢う日まで」の大合唱で閉会することができました。本年は日本においては被爆四〇周年、ソ連ではファシズムと軍国主義を壊滅させてから四〇周年であり、国連婦人の一〇年の最終年という記念すべき年であり、両国婦人が世界の完全な平和と平等達成のために、全世界の婦人の連帯に向けて行動を起こし、全人類の安全確保のために力を結集することを確認しあったことの意義は極めて大きいと思います。最後に、ソ連代表団の方々の極めて精力的で熱意あふれる諸行動が多くの日本婦人を励まし、ソ連邦への理解を深めることができたことに心から感謝します。

ユニバーシアード神戸大会にエントリー

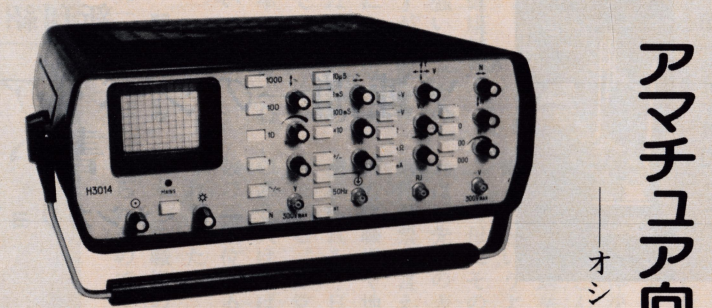
5月14日、ソ連のスポーツ協会〝ブレベスニク〟のワレリー・シムク副会長が神戸市役所を訪れ、ソ連学生チームの〝ユニバーシアード85〟神戸大会への参加を、ユニバーシアード組織委員会副会長の宮崎辰雄市長に正式に申し入れた。ワレリー・シムクは組織委と実務的問題を話し合うために来日したもの。ソ連チームは女子バレーボールを除く全種目にエントリーした。そのあと行われた記者会見でV・シムクは、ソ連選手団には最終的にはナショナルチーム・クラスの選手二〇四—二〇六人が入るので、30—33個の金メダルの獲得が期待できると述べた。候補選手として一九八〇年五輪の男子陸上400mで優勝したビクトル・マルキン、世界体操選手権総合優勝のユーリー・コロリョフ（一九八一年）、ドミトリー・ビロゼルチェフ（一九八三年）、ナタリア・ユルチェンコ（一九八三年）、一九八一年女子総合優勝のオリガ・ビチェロワ、五輪チャンピオンで男子水泳一五〇〇m自由型の世界記録保持者ウラジーミル・サルニコフ、その他の名が挙げられた。

（K・デリバス）

日本で発売

アマチュア向きのソ連製マルチメーター

——オシロスコープが付いたデジタル表示式



このほど東京の商社大陸貿易株式会社では全ソ機器輸出入公団（マシプリボルイントルグ）からデジタル・オシロ・マルチメーターDOMFAR（クラスノダル測定器工場製）を輸入し、晴海電気から発売することになった。

オシログラフというと一般に高価で、素人には使いこなすのがむずかしいというイメージがあるが、DOMFARは扱いが簡単で、値段も5万円以下。画面に波形を映し出すだけでなく、同時に周波数、電圧、抵抗値、電流値をデジタル表示できる。主な用途は家庭用電気器具の点検をはじめ、無線機の各部波形、電圧、電流の測定、オーディオ装置の出力、周波数の測定、マイコンの安定電源の調整、CLOCK回路の点検、各ロジック回路の波形点検および調整など、使い方によって用途・機能をさらに拡大することができるので、ラジオやエレクトロニクスの愛好家の関心を集めている。

本体の外形寸法は幅300mm、奥行310mm、高さ150mm、重量5・0kg、画面の大きさは縦30mm×横40mm。

お問い合わせは、大陸貿易（電話03・503・0661）またはは販売およびアフターサービス担当の晴海電気（電話03・531・1925）へ。



山本ミナ子さんの逝去を悼む

日本とソ連の子供たちの親善交流に尽くしてこられた草の根会（札幌市）の会長の山本ミナ子さんが4月28日、心臓発作のため急逝されました。76歳でした。

山本さんは戦前から子供の幸せと世界の平和を願って子供会「つぼみ会」をつくるなどの活動に励みました。1952年には、日本の将来を担う子供たちが、草の根のように、どんな風雪にも負けず力強く生き、立派に成長することを願って「つぼみ会」を「草の根会」と改称しました。

1970年から毎年多くの子供たちを国際キャンプに参加させ、ソ連、フランス、ドイツ民主共和国をはじめとする世界各国の子供たちとの親善に努めました。

とくに最も近い隣国ソ連との交流には力を入れ、夏休みを利用して草の根会の子供たちをクリミア半島やハバロフスクのピオネール・キャンプに派遣するなどして、日ソ親善に寄与しました。1979年にはこれらの功績に対してソ連対外友好・文化交流団体連合会から友好促進顕章が贈られました。

昨年は8月から9月にかけて娘の白取澄子さんと共にソ連の黒海沿岸で休養し、その滞在記を本誌（22号）に寄稿されました。

多くのソ連人にも親しまれた山本さんの人柄を偲びながら、ここに心からの哀悼の意を表します。

「今日のソ連邦」編集部

札幌で「平和へのいしずえ」写真展



展示された写真を見る（右から）ルドネフ札幌駐在ソ連総領事と柴野・北海道日ソ友好文化会館理事長ら（写真提供＝北海道日ソ友好文化会館）

札幌の北海道日ソ友好文化会館で、ソ連の対独戦勝40周年を記念して、ソ連の戦時中の歴史的な写真を集めた写真展「平和へのいしずえ」が4月5日から16日まで開催された。

同会館の柴野理事長は「ソ連はこれまでの戦争の中で最も多くの血が流されたナチス・ドイツとの戦争に勝ちぬきました。二千万人もの貴い犠牲の上に築かれた貴重な平和を守りぬきたいと願うソ連国民の気持ちは、ヒロシマ、ナガサキの惨禍を体験した私たち日本人の気持ちと全く同じだろうと思います。戦後40年経過したこんにち、国際緊張は日増しに強まってきておりますが、私たちは悲惨だった日々の記憶を風化させてはいけないばかりでなく、あの悲劇を二度と再び繰り返さないよう、最大限の努力を払わなければなりません」と語った。

同展は、昨年9月に結成された北海道日ソ友好会館連絡協議会に加盟している他の4団体（釧路日ソ友好貿易会館、羅臼町日ソ資料センター、猿払村日ソ友好記念館、稚内日ソ友好会館）でも順次公開される。

新刊紹介



ソ連随一のシベリア通が書いたシベリアの本

――レオニード・シンカリョフ著『第二シベリア鉄道』

ソ連経済研究家　**仲　弘**

かけだしの記者生活から押しも押されぬ一流ジャーナリスト（イズベスチヤ紙の記者）になるまでの二十数年をシベリアで暮らし、シベリアと極東の隅から隅まで歩きまわり、多くの記事と3冊の著書でもって、ソ連随一の「シベリア通」となったシンカリョフ氏が、その総仕上げとして書いたのが、この『第二シベリア鉄道』である。「イズベスチヤ」は、ソ連政府の機関紙であり、その記者は大変な権威を持っている。しかし、「権威」は、往々にして「面白さ」と両立しないものである。けれども彼の書いたものは、すべて何度も版をかさねている。これはいかに彼の書いたものがユニークであり、面白く、そして多くの問題点をえぐりだしているかということの証明であろう。

私が彼に会った時の印象はソ連式の表現によれば、まさに「コルホーズニク」（コルホーズ農民）であった。これはやわらかく言えば、「スマート」の反対である。彼は世界的な学者とも議論するが、なによりも少数民族の村をたずね、トナカイの肉を一緒に食べ、昔からシベリアに住みついているロシア人たちとお茶を飲み、誰からも「仲間」扱いにされ、そしてその人々の立場からシベリアと極東のことを書いている。さまざまな人々が住み、いまや開発の最前線にあって、いろんな「俗人」が入り込んでいるこの土地に、さらに近代的な鉄道が通じる。これは一面ではソ連の生産力開発のすばらしい局面であり、力強い人間像が生まれている。他方、自然と、それと同じように大切にしなければならない人間の生活もある。この本は、そのようなさまざまな角度から論じられた、シベリアに関するルポルタージュである。

訳者が自分の訳した本の紹介をするのはめったに無いことだが、シンカリョフの本と人間にほれこんで訳した私として、ぜひ皆さんに読んでいただきたく、筆をとったしだいである。

（本書はプログレス出版所出版、ナウカ社輸入発売〈電話東京二六四―〇〇二一〉。A5判三七六ページ、一八〇〇円）

読者のページ

東京都　野村　律

詩情ある個性的なソ連映画が好きですが（『愛の奴隷』のような）、年間少ししか見られません。内外で国際賞を受けたものも見たいものです。「今日のソ連邦」でそれら秀作の内容を紹介して下さい。他の舞台芸術に関する華やかな頁も期待します。芸術家の近況やかつて各方面のチャンピオンだった人の消息も時には人物だよりにのせて下さい。例えば今でも名作集で見られる『石の花』のドルージニコフやフィギュアのモイセーエワ、バレーボールのドロホフ、モリボガ選手のその後についても。

『断崖』『夢うつつの飛行』『シベリアの詩』『自由この甘い言葉』『シベリア特急』など面白そうな映画がありましたら誌上封切を願います。

農業政策や教育改革、健康管理についても興味があります。強い酒とその量についても有名な国ですが、健康について日本のように新聞によく取り上げられますか。子供の躾は両親のうちどちらが重く受け持つのですか。その他平均寿命のこと、出産率の対策、心臓病と肥満なども知りたいです。

松江市　関　あゆみ

私は時々「今日のソ連邦」を見ている高校生です。この間、学校の「現代社会」の時間にソ連の議会制度について教わりました。その時先生は、「ソ連の選挙は全く形式で、当選する人は初めから大体決まっている。候補者は一人で、ほとんど共産党員で、民主的ではない。選挙というより信任投票である」というように言われました。

家で母にその話をしましたら、「それは、先生の表面的な把握だ。確かに信任投票と言えるかも知れないが、候補者は職場や地域で話し合いの中から決められる。日本などよりよほど民主的である。非党員でも職場の中で信頼のある人は選ばれている。（代議員総数の三割位いる）」という風に話してくれました。

本当に職場の中で話し合いの中で決められるのですか？　どのくらいの規模（働く人の数、地区の広さ等）を基にしているのですか？　それから、母は、選ばれた代議員の出身は、労働者、農民、知識人、女性、青年とそれぞれの人口構成を大体正しく反映している、と言いましたが、それは、初めから何人という風に割合が決められているのですか？

「今日のソ連邦」の中でいいですから、ソビエトの議会制度について詳しく、言葉だけでなく、具体的な資料（数字）を挙げて載せて下さい。もしできれば、職場や地域の中で、一人の代議員が選ばれる様子を具体的に載せて下さい（最高会議と地方会議の両方）。

〝民主的である〟という事実を先生に示したいと思います。

催し物のお知らせ

☆第14回全国ロシア語コンクール

▽7月7日（日）午後1～4時
▽東京・日ソ学院（東京都世田谷区経堂1－11－2）
▽優勝者は2週間のソ連旅行に招待。入賞者には賞品、参加者全員に記念品を贈呈。
▽審査はロシア語スピーチ（テーマは自由、5分以内）および審査員との質疑応答で行われる。
▽申し込み締め切りは6月22日。所定のスピーチ原稿に参加費1,000円を添えて申し込む。
▽主催　日ソ協会、日ソ学院
▽後援　在日ソ連大使館、井上満・ちとせ記念館、ナウカ株式会社
▽申し込み・問い合わせは、コンクールの事務局（電話03・429・8239）へ。
※当日の傍聴は自由。

☆ボリショイ劇場バレエ学校特別公演

東京・東京文化会館（7月17、18、19、20、21、22日）、筑波科学万博会場（7月26日）、長野・県民文化会館（7月28日）、群馬・県民会館（7月29日）、宮城・県民会館（7月31日）、宇都宮市文化会館（予定、8月1日）、大阪・フェスティバルホール（8月3、4日）、名古屋市民会館（8月6、7日）、福岡・サンパレス（8月9、10日）、広島・郵便貯金ホール（8月12日）、松山市民会館（8月15日）、東京・ＮＨＫホール（8月18日）。
▽電話予約・お問い合わせは、エミー・インターナショナル（電話03・234・7207）／東京労音（電話03・265・6361）へ。

☆北海道・エルミタージュ美術館展

7月13日(土)―8月22日(木)(月曜休館)
北海道立近代美術館（札幌市中央区北1西17）
前売り料金（一般600円、高・大生400円、小・中生200円）
▽お問い合わせは、北海道新聞本社事業局文化事業部、各支社事業部へ。

☆ソビエト名作映画鑑賞会

セレブリャコフ特集（6月21日）
▽会場・東京・大手町・日経小ホール
▽開映・6時15分　入場料800円
▽お問い合わせは、(株)日本海（電話03・262・4131）へ。

ノーボスチ通信 特派員報告

死の兵器の展覧会

M・バクラノフ記者（マナグア）

ルイス・アルフォン・ベラスケス公園はニカラグアの首都マナグアの中心部にある。マナグアは一九七二年の大地震と一九七九年のソモサ派国家警備隊との血なまぐさい戦闘の後遺症で、市民が日曜日に一息つきに行く場所はまだそれほどたくさんはないが、一番人気のあるのがこの公園だ。週末になると、子供たちが我が物顔で芝生や運動場を跳びまわっている。この公園でサンディニスタ民族解放戦線軍が反政府ゲリラ〝コントラ〟との戦闘で捕獲した銃や砲の展示会を催した。

兵器と子供とは一見相容れない概念のようだが、記者はこの展示会で二人の少年の立ち話を小耳にはさんだ。「ほら、自動小銃FALだ——米国製の」とひとりが言うと、「ちがうよ、ベルギー製だよ」と、もう少し年上の8歳ぐらいの少年が訂正した。残念ながらニカラグアの子供は非常に早くから銃砲のことを知っている。それもまた聞きの知識ではない。〝宣戦布告なき戦争〟の4年間に死んだニカラグアの子供は約二〇〇〇人。米国製の自動小銃で撃たれたり、米国製の爆弾や地雷に吹き飛ばされたのだ。

その兵器が野外に展示されている。米国製のM19迫撃砲、やはり米国製のクレイモア地雷、ニカラグア沖に敷設された機雷やそのために使われた大型ボート（CIAが供与した）もある。

この兵器展を見ていると、北からニカラグアに迫っている死の脅威が実感として伝わってくる。

追われる平和運動家たち

I・ドロフェーエフ記者（オタワ）

一九八三年4月、カナダ国会の建物のそばに反戦運動の活動家たちが「平和キャンプ」のテントを張った。芝生の上にできた小さなオレンジ色のテントは、平和を求める普通のカナダ国民の熱意の象徴だった。それから2年の間、炎暑も酷寒も物ともせず昼も夜も平和キャンプの人々は平和を訴えた。顔ぶれが変わり、人数も3人から7人のあいだを上下した。夏になるとテントの数が少し増えたが、平和のために闘おうとする決意はいつも変わらなかった。

オレンジ色のテントはカナダの反戦運動のほんの一部分だが、反戦運動が不敗不屈である象徴となり、カナダ人の良心となった。記者がさる2月のひどく寒い日にこの平和キャンプの指導者エイブ・ベースフィールドに初めて会ったとき、彼は「私たちは最後まで闘う。私が去っても他の者がくる。私たちは全カナダ人の共通の心情の表れなのです」と言った。

ところが、当局は国会前の広場のテントを撤去させることに決めた。ある早朝突然姿を現した警察は平和キャンプのテントをつぶし、その〝住人たち〟を追い払った。エイブとイボンヌ・デュベが逮捕された。

エイブとイボンヌの罪名は財産の侵害であった。テントを張った土地は国会の所有地で、そこを占拠してはいけないというのである。人民が選んだ立法機関がその所有地から人民の代表を追い払おうというのだ。

エイブとイボンヌは釈放されるや、闘いを続ける堅い決意を秘めて国会の建物のそばに戻ってきた。集まってきた記者たちに二人は「テントがなくてもパンフレットを置く机とイスがいくつかあれば、真相糾明の活動は続けられる」と語った。

平和な環境で仕事と勉強を

S・コロソフ記者（プノンペン）

プノンペンの住民ならだれでもテクノという言葉を知っている。カンプチア・ソビエト友好高等工科大学のことをここではこう呼んでいる。この大学の純白の建物はカンプチアの首都を訪れる人の目をすぐ引く。毎朝何百人もの若い男女が自転車を置き場に置いて、教室へ急ぐ。

この大学はソ連が建てて一九六四年にカンプチアに贈与したもの。その当初からこの国の経済に必要な技術家の主な養成施設になった。土木建設、電気工学、地質探鉱、水力灌漑の4学部があり、有資格の技術要員が不足しているから、授業は二部制で行われている。

記者は写真のショーケースに近づいた。いまではポル・ポト派の連中が大学の建物をぶちこわした当時の面影を偲ぶものはこの写真しかないだろう。外れた窓わく、折れ曲がった鉄筋、壊された家具、床のゴミの山、これが一九八一年の春ここに着いたソ連の最初の教師団が目にした光景だった。授業の正常化と教室の復興を同時に進めなければならなかった。カンプチアの労働者を助けてソ連の建設専門家も、もちろん学生自身も一生懸命に働いた。

最近大学創立20周年を記念した集会でオム・ニェン・サラク学長は次のように述べた。

「本校は二つの民族の友好という誇るべき名前を冠している。カンプチア人民共和国は新生活を建設しつつ、ソ連その他の社会主義国の変わらぬ兄弟的援助と支持を感じている。この固い政治同盟は私たちに平和に働きかつ学ぶ可能性を与えている。ここにカンプチア人民の幸福な生活の保証がある」

ソ連の新聞記事から

（一九八五年5月前半）

党中央委政治局の定例会議

ソ連共産党中央委員会政治局は定例会議を開き、一九八五年4月26日にワルシャワで開かれたワルシャワ条約加盟諸国党・国家最高指導者会議に参加したソ連代表団の活動の成果を検討し、全面的に承認した。

党中央委政治局は友好と相互理解の状況のもとで開かれたこの会議が、社会主義共同体諸国のいっそうの団結、その経済力と防衛力の強化、平和愛好的対外方針の首尾一貫した遂行にとって重要な意義を持つことを指摘した。ワルシャワ条約の期限延長を満場一致で決めたことは兄弟同盟諸国の安全の強化、欧州と全世界における平和の維持と強化への新たな大きな貢献である。政治、経済、社会・文化、軍事の分野での社会主義諸国の協力のたゆまぬ強化は、今後ともソ連共産党とソビエト国家の政治の不可分の一部でありつづけるだろう。

政治局は石油とガスの探鉱作業を強化する計画を承認した。この計画によれば、新しい掘削技術、地球物理学的技術、コンピューター技術を広範に駆使し、合理的な探鉱法にもとづいて、第12次5カ年計画中に深部ボーリングの作業量は著しく増える。

M・S・ゴルバチョフ同志とA・A・グロムイコ同志の金永南・朝鮮労働党中央委政治局員、朝鮮民主主義人民共和国政務院副首相兼外相との会談についての報告が聴取された。政治局はこの意見交換が両国関係のいっそうの強化、朝鮮半島とアジア、世界全体の平和と安全のためのソ連と朝鮮民主主義人民共和国の協力の強化に役立つことを指摘した。アジア・太平洋地域における米国の軍国主義的政策に反対し、ワシントン＝東京＝ソウル軍事・政治ブロックの結成、朝鮮民主主義人民共和国の平和愛好的イニシアチブを封じ込めて朝鮮の分断を固定化しようとする西側諸国の試みに反対する上で協力をつづけることの重要性が強調された。

政治局はM・S・ゴルバチョフおよび他のソ連指導者とD・オルテガ大統領を団長とするニカラグア代表団との会談の結果を審議した。そのさい、祖国の自由と独立をめざすニカラグア国民の献身的な闘争とのソ連の連帯が改めて確認された。米国政府が国際関係の一般に認められた基準を乱暴に踏みにじってニカラグア国民に対する大規模な経済侵略を行い、国家テロリズム政策を遂行し、この国に対する宣戦布告なき戦争を拡大している現在、ニカラグアを支持し、中米における公正な政治的調整をめざす活動を強化することの意義はますます増大していることが強調された。

（プラウダ紙5月7日号）

子どもだけのサーカス団

この珍しいサーカスを見るための切符はいつも売り切れてしまう。舞台では子どもたちが素晴らしい妙技を披露する。

カザフ共和国のアマチュア児童サーカス〝バルディルガン〟は16年前、ツェリノグラード市で結成された。一座の出し物は大人のサーカスでも十分通用する興味深い、むずかしいものばかり。子どもたちが空中ぶらんこや綱渡りを演じると、場内は静まり返る。道化師の演技には腹をかかえて笑い、犬の芸当にやんやの喝采が湧く。

サーカスの指導者V・アニシンは語る——「〝バルディルガン〟には約一〇〇人の学童がいます。団員は当然のことながら、毎年更新します。だが、芸の上でも精神的にも常に成長するという原則は不変です」

この児童サーカスはアマチュア芸術祭で数々の賞を取り、結成以来16年間に約五五〇回公演した。

（イズベスチヤ紙5月12日号）



「経験交流」（A・セムチェンコ作、トルード紙5月2日号）

文豪トルストイ展

トルストイ家父祖伝来の領地ヤースナヤ・ポリャーナの邸宅博物館で「レフ・トルストイと祖国防衛・平和擁護」展が開かれた。

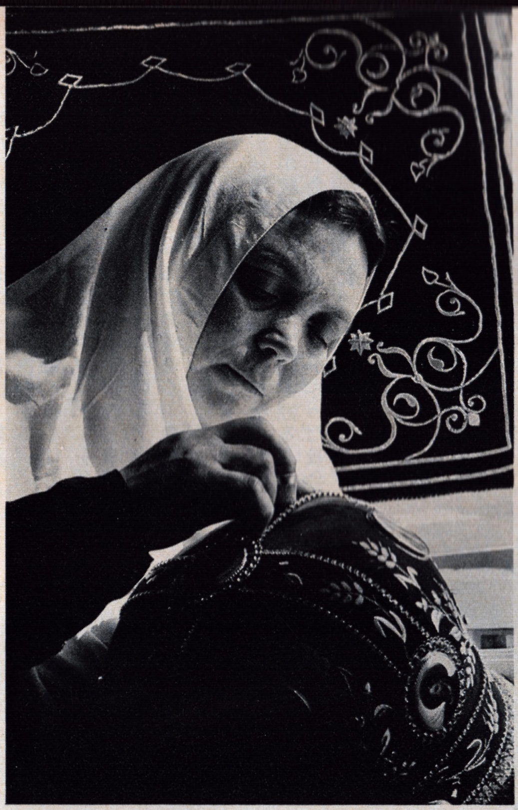
この展覧会に出品されている展示物は、戦争は人類の正常な状態ではない、というこの人道主義作家の思想を示している。一八五三—五六年のクリミア戦争に参加した経験を持つトルストイは、生涯の最後の日まで熱烈な平和擁護者だった。

（イズベスチヤ紙5月13日号）



本誌記者 インナ・ジューコワ
カメラ M・ユルチェンコ

鐘楼のある中央の見張りの塔





修道僧の最高位スヒーマを受けた尼僧。その僧衣は銀糸の刺しゅうが施してあり、幅広のマントや袈裟には、イエス・キリストの齢の数と同じ33本のドレープが入っている。

金糸縫いの工房の指導者はミハイラ尼。たくさんの助手がいる。教会の儀式や普段の生活に使われるかぶりもの、棺覆い、その他がここで作られる。

ピュフチツ修道院はロシア正教会の12の女子修道院の一つで、エストニア共和国（バルト海沿岸）のコフトラヤルベ市の近くにある。

今回このピュフチツ修道院取材の計画を練るにあたって、モスクワで私たちが一番気にしたのは、修道院の隠遁生活をあまり長いこと乱してはいけない、ということであった。そのために修道院取材旅行はあらかじめ、特別の行事のない普通の時期の、天候も撮影日和が期待できる7月末から8月初めにかけて組まれた。

黒のごわごわしたウールの修道衣をまとっていながら、スリムでとてもしとやかに見えるナタリア尼が、私たちの案内人になってくれた。前身は芸術学者でレニングラードで働き、やがて修道生活に入り、ここに来て8年ほどになるという。相変わらず芸術や美術史に夢中で、ここを訪れる修道士や教会の活動家、一般の人たちに修道院の生活を説明する係をしている。

19世紀末の創立

ピュフチツ修道院の創立は一八九一年。建造物が現在のような輪郭になったのは20世紀初頭のことである。本堂のウスペンスキー寺院は、古代ロシア教会の伝統的様式と今世紀初頭の様式を結びつけた建物である。洋紅色と砂色の煉瓦、緑色の円屋根という対称的色調がうまく調和している。その隣には方形の屋根を持つ食堂。入口には日に3度、修道女たちを食堂に呼び集める鐘がある。この修道院で最も美しいのは天幕型の屋根がある木造の寺院であろう。ピュフチツの建築アンサンブルは史的文化財として国の保存建築物に指定されている。修道院は一般公開されており、観光客も入れるが、参観者は修道院の生活を乱してはならない。修道院の敷地は、無料で無期限に使用する権利を国から与えられている。

日常生活

どこの修道院の規則も、修道士（女）全員に一定の勤労の励行を決めている。勤労――これは修道士（女）によって行われるしょく罪のための労役である。ここでも朝6時に始まるお勤めの後や朝食後に毎日、働く能力のある修道女（一四四人中40歳未満の者が半数以上を占める。最年少は22歳、最年長は84歳）はそれぞれ一定の仕事をもらう。

ピュフチツでの労役の範囲は広い。修道院には国から賃借りしている土地が75haある（賃借料はコルホーズの場合と同じ）。小麦、ライ麦、オート麦、飼料用作物が播かれ、野菜が栽培されている。農園には30頭の乳牛をはじめ、

馬、鶏がいる。温室、養蜂場、製粉所もある。最近、ニジマスの養魚池も出来た。夏のあいだ野良仕事はいっぱいある。草刈り期には夕方遅くまで外で働く。

野外の仕事が終わると、個人個人の傾向——まして専門を持った修道女もいることなので——を考慮した労役が課せられる。金糸縫いの技術のある尼は豪華な僧帽、棺覆い、巾着、テーブルクロスを制作する。そのうちの何点かはこの修道院の博物館の陳列品になっている。料理好きの修道女はタルト、ケーキ、クッキーを焼く。修道生活では肉は使わないが、精進料理はおいしくて滋養のあるものでなくてはならない。図書館には教会関係の図書のほかに世俗的なもの——新聞、雑誌、畜産・畑作・養蜂の専門書がある。

修道女が行う勤労にはもちろん、重労働は入らない。車やトラクターを運転するのは雇いの運転手。建設工事や修理作業も外部に発注している。夏はレニングラード神学アカデミーの学生も手伝いに来る。

ここで生産された食肉、牛乳、バター、鶏卵、蜂蜜、余剰の穀物・野菜は国が統一買付価格で買い上げる。その売上金や、修道女たちが作った教会の調度品を売ったお金、信者からの寄付も修道院の収入になる。修道院には2人の看護婦がいるが、必要な場合は大病院で治療が受けられるし、それはもちろん無料である。教会の規則は修道士は必ず年に1カ月の休暇をとらねばならぬと規定している。休暇を利用して修道女は肉親を訪ねたり、どこでも好きな所に行ける。休暇の費用は修道院が支払う。

修道女という天職

勤行、勤労、日常生活、修道女の立ち居振る舞いなど、修道院内で行われていることすべてが、一般のソビエト人にとっては分かりにくいベールに包まれている。ロシア正教会の修道院の歴史は一〇〇〇年近くになる。

どの修道女も、自分がどこから来て、俗世界でどんな職業を持ち、どこで学んだか（大部分が中等教育修了者で、中等専門教育あるいは高等教育修了者も若干いる）をすすんで話してくれた。だが質問が修道院に入るきっかけとなった事柄や動機に及ぶと、答えは〝神のお召しによって……〟という紋切り型の文句になった。案内のナタリア尼は「あなたには理解出来ません」と断定し、「私たち修道女同士でも俗世間時代の生活についてあれこれ聞くようなことはしないのです」と穏やかにつけ加えた。

修道院長のワルワラ尼は54歳。僧院生活は32年になり、ピュフチツ修道院の院長を16年間つとめている。

19世紀末に建てられた小さな木造の家が院長の住まいだ。

修道女という天職についてワルワラ院長に聞いた。

「これは実際説明しにくいことです。



ピュフチツ修道院は森に囲まれている。



◀修道院の門の上にある鐘楼



▼これはごく普通の庵室だが、ちょっと違うのはオルガンがあること。ベーラはレニングラード神学アカデミーで合唱指揮者クラスを卒業した見習尼。



◀修道院院長のワルワラ尼。54歳。1952年に22歳で修道院に入った。1968年からピュフチツ修道院の院長。



▼修道院のパン焼き所。見習尼のワレンチナとマリアが働いている。ここで焼かれるのはこの修道院独特のパン。



▼家畜小屋で。馬係主任の見習尼ネオニラが8頭の馬の世話をしているが、最近、子馬が1頭加わった。



訪ねて来た身内と。

戦後の困難な時期にはただ単に苦悩する人たちが、信念に基づいてではなく悲惨な運命に導かれて、私たちの所にやって来たのですが、今は違います。もちろん今も、教会の儀式、修道院の居心地のよさ、静寂、魅惑的な歌声にあこがれる人もいます。でも一年三六五日の永い労働の日々です。何世紀にもわたって常に、修道院生活には肉体労働や生きるために必要な最少限の糧についての心配がつきものでした。修道院に入った者は必ず義務的な勤労を果たさねばなりませんが、全員が全員それに耐えられるわけではありません。菜園で働きたいと思っていても家畜小屋や畑に出されたりします。義務的勤労は柔和さを養います。修道院風に言えば、〝己の意志を切り取る〟ことになります。これは困難で、誰にでも出来るというものではありません。入った当初は気に入っていても、すぐに疲れてしまう人もいます。ただ誰にも俗世界に戻る権利がありますから、修道院を出て行き、それっきりになる人もいますし、また舞い戻る人もいます。帰って来られるのは一度だけです。修道院に新人を迎える場合は本人の能力、健康状態が考慮されますが、何よりも重要視されるのは修道女に向いているかどうかです。普通は次のような順序を踏みます。修道院に入って見習尼になった人は、修道院生活6—8年を経て最初の剃髪式をし、正式の尼になります。最終的に高位の尼になれるのは、20—25年間修道院生活をし、45—50歳の年齢に達した人です」



コルニリア尼は戦後直後からもう40年間も僧院生活をしている。工房で木彫りの作品を制作し、聖像画を描く。その多くの作品が修道院の博物館に並べられている。



見習尼のナジェジダはすべての〝義務的〟労役に加えて、ピュフチツ修道院の歴史・建築記念物が大切に保存されるように見守る役目を自分の義務として課した。



▲僧院の敷地内にある養蜂場。コルニリア尼が作ったウスペンスキー寺院を型どった巣箱もある。

ここの女性たちはさまざまな系路を経て修道院に来た。そんな彼女たちに共通しているのは、大部分が信仰熱心な家庭の出身で、子どもの頃から教会に親しんで来たということだ。

「道を踏みはずした人、罪を犯した人を修道院から追い出したことがありますか?」

「許せない罪などというものはありません(法律違反はもちろん別です)。人間は誤りを犯します。もちろん、私たちは閉ざされた世界に住んでおり、家庭に起こるようなかっとうも起きま



森の中の草地も貴重な草刈り場。草刈り機が入れない所は手作業に頼る。

す。いずれにせよ大切なのは、ごたごたを静かに解決することです」

〝別世界にいるわけではない〟

「修道院に入るということは俗世界を軽視していることではありません。

私たちが心の命ずるままに行動し、教会の儀式を行うのを邪魔する人はありません。私たちの生活は活動的です。毎日毎日、労働と礼拝で明け暮れます。近くの〝オクトアベル〟コルホーズとは隣人同士のつき合いをし、協力しあっています。コルホーズは技術面で私たちを助けてくれますし、人手不足の時は手を貸してくれます。私たちもジャガイモの植え付けや取り入れ、草刈り期にはコルホーズに手伝いに行きます。地元の山林管理所からは薪をもらっていますし、私たちは毎年管理所の山林にエゾマツ、アカマツ、シラカバを植林しています。

ピュフチツ修道院ではソ連のよその宗教団体と同じように国の祝日はすべて祝っています。平和擁護委員会の活動にも参加し、赤十字・赤新月社の団体会員でもあります。当修道院は定期的にソ連平和基金にお金を寄付しています。ここの修道尼は何度となく国際的な宗教会議や大会でロシア正教会の代表になりました。

正教の礼拝では神のご加護の下にあるわが祖国、政権、軍隊、人々に祈りの言葉を捧げています。平和を支持する人のために祈ります。地球上のすべての人々が幸せに、つつがなく、平和に暮らして欲しいと思うのです」



修道院には水道設備もスチーム暖房もあるが、毎日曜日に〝聖なる泉〟に水汲みに行く習慣が残っている。



▲見習尼ニーナとアレクサンドラ尼も毎日の義務である勤めを果たす。今日は魚の下ごしらえの仕事。



左上　後方にそびえるのはウスペンスキー寺院、その隣は食堂。手前に建物3階分の高さに積み上げられているのは薪。



祭日の食事の時の尼僧の合唱

豊臣秀吉とその時代を描く

——A・イスケンデロフ著の評伝

昨年末モスクワのナウカ出版所から『豊臣秀吉』（四四五ページ、一万部）が出版された。著者はソ連科学アカデミー準会員、歴史学博士アフメド・イスケンデロフ（58歳）。日本学を学び、中世から現代までの日本史に関する著書、論文が多く、なかでも一九六一年に出版された『16世紀の日本の封建都市』は有名。最近は国際的民族解放運動・労働運動の諸問題にも研究分野を広げている。

『豊臣秀吉』は「日本の中世史を飾る最大の人物と見られる」（著者の意見）秀吉の生涯と活動を、具体的な史料を基に物語風に描いている。秀吉の政治的履歴は彼の時代環境と切り離せないから、当然この著作には日本の中世の時代とその当時の風俗、習慣が精彩に再現されていて、興味深い。かつてジャワハルラル・ネールは『父が子（インディラ・ガンジー）に語る世界歴史』の中で「もし過去を知りたければ、過去に好感と理解を示さねばならない……過去の人物がさも現代人のわれわれと同じ思考様式に立つかのように考えて、そういう目で彼らを評価するのはばかげている」と語ったが、イスケンデロフはこのネールの言葉に従って書いている。

本書を執筆するさい、著者は東京大学史料編纂所所蔵の秀吉の手紙類を詳しく調べることができ、それが秀吉個人の行為の矛盾の特徴をよりよくつかみ、秀吉の政治的、思想的見解や当時の事実や事件に対する秀吉の態度、秀吉と周囲の人々との相互関係をよりはっきり示すのに役立った、と著者は見ている。

本書は3部14章、序文、エピローグから成り、各章ごとに沢山の参考文献をあげている。本書の約40枚のカラーグラビア、モノクロの写真、さしえは、中世日本の主要人物の形象、生活用具、建築、美術を示している。

著者は秀吉が活動した時代または段階を三つに区分している。これら三つの時代、段階は性格や意義がそれぞれ違っており、第1段階は秀吉が織田信長に仕えてから信長が一五八二年に非業の死を遂げるまでで、秀吉の軍事的才能が開花し、赫々たる勝利を次々に収めた時期である。第2段階は秀吉が政権に就いた初期の時代で、当時としては先進的な数々の改革が行われ、その結果日本の社会・経済構造と政治体制が大きく変わった時代である。第3段階はそれまでの秀吉の業績の多くを事実上抹殺した朝鮮戦役開始後を中心とする秀吉の晩年の時代である。

四〇〇年前の秀吉の時代を生き生きと精細に描いた本書が、ソ連の読者の注目をひいているのは、日本の中世の様相を深くえぐっているだけにとどまらず、大きな特徴と並んで、日本の情勢の動きが、全世界の全般的情勢を定めた他の国々と類似した数々の特徴を当時すでにもっていて、非常に注目されるからでもある。他の国々と似た特徴が少なからずあったからといっても、当時はまだ多くの国々、諸国民は幅広い、恒常的な交流や接触をしていなかったのだから興味深い。日本史におけるこの重要で興味深い時代や日本の歴史的、文化的伝統に関する知識が、本書を通じてさらに深まれば、ソ連の読者は日本の現代の現実をもっとよく理解できるようになろう。



『豊臣秀吉』のとびら（右）と仮とびら

今日のソ連邦
一九八五年6月15日号
昭和五十四年六月二日第三種郵便物認可　発行人　加藤宣幸
編集・ソ連大使館広報部（郵便番号141・東京都品川区東五反田3―9―13・電話03・447・3536）
定価　一五〇円

